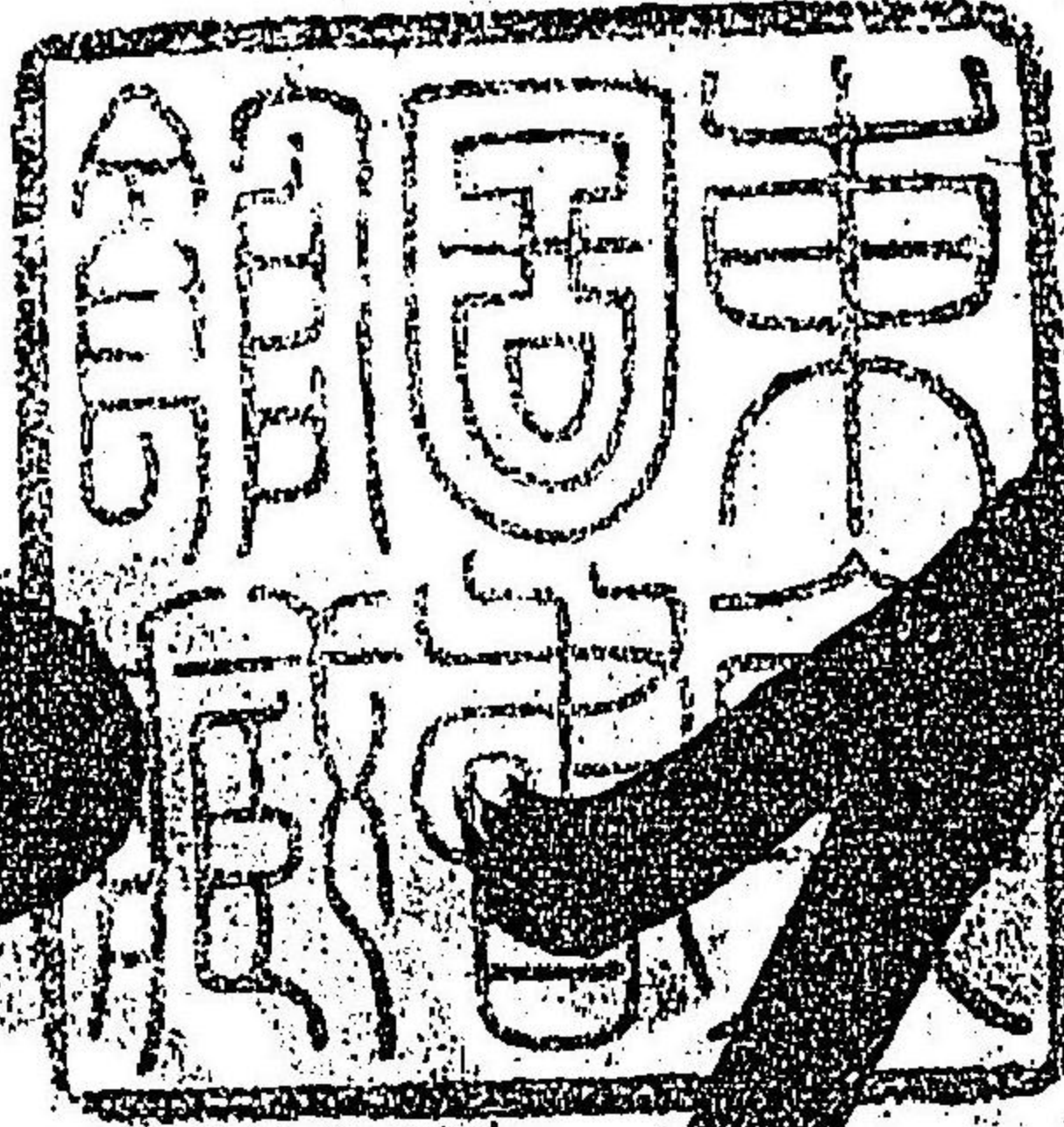


工本-89

34-194

W/O 4039 / 23



Large, bold calligraphic characters in black ink, possibly reading '改印' (Revised Seal/Stamp).

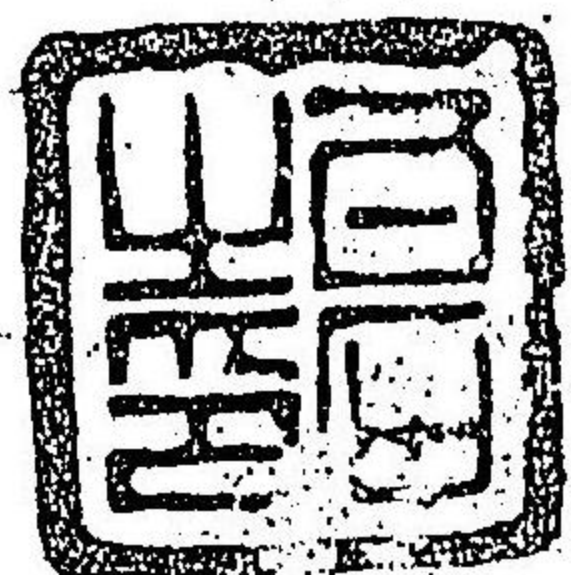


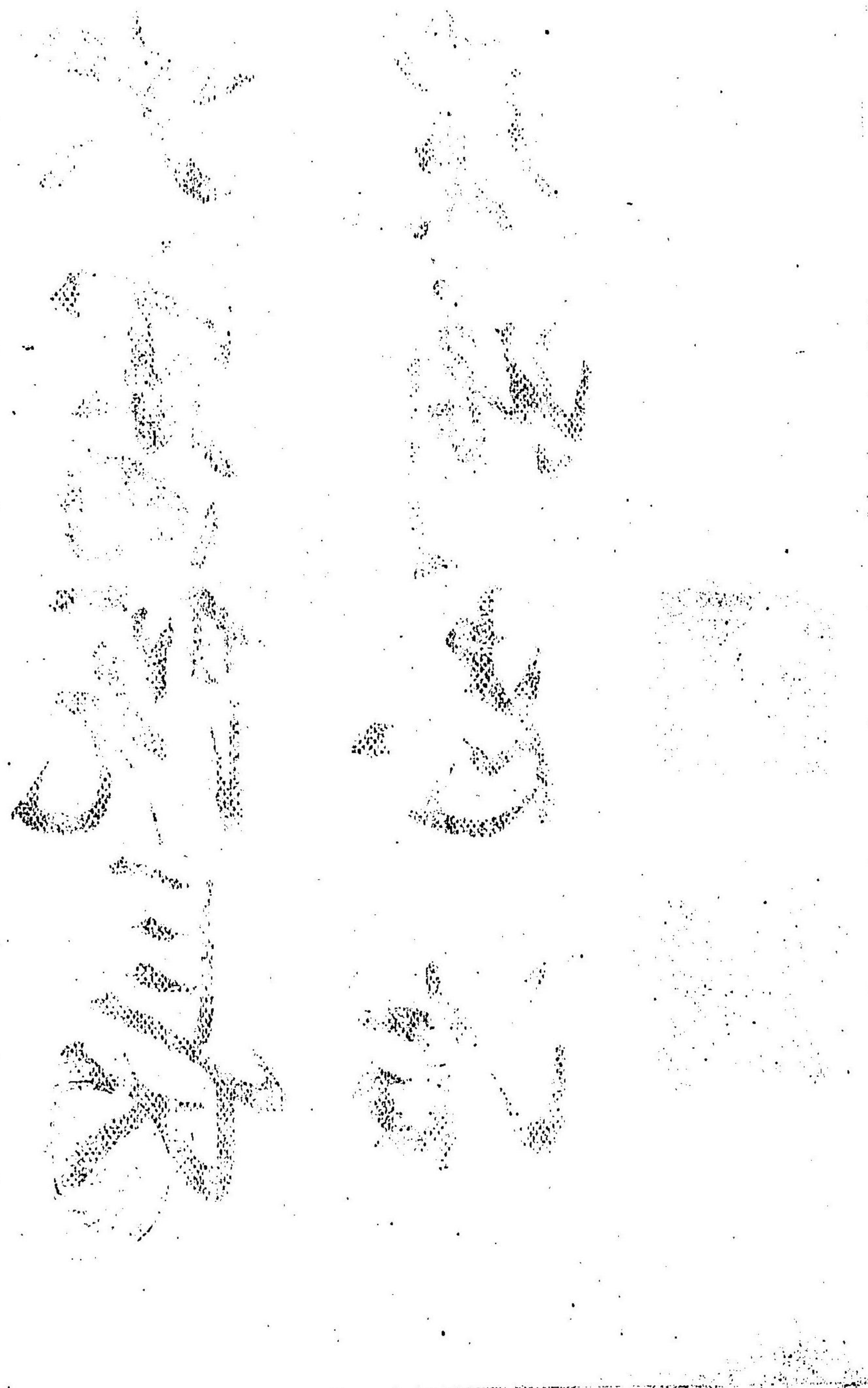
福

福

水

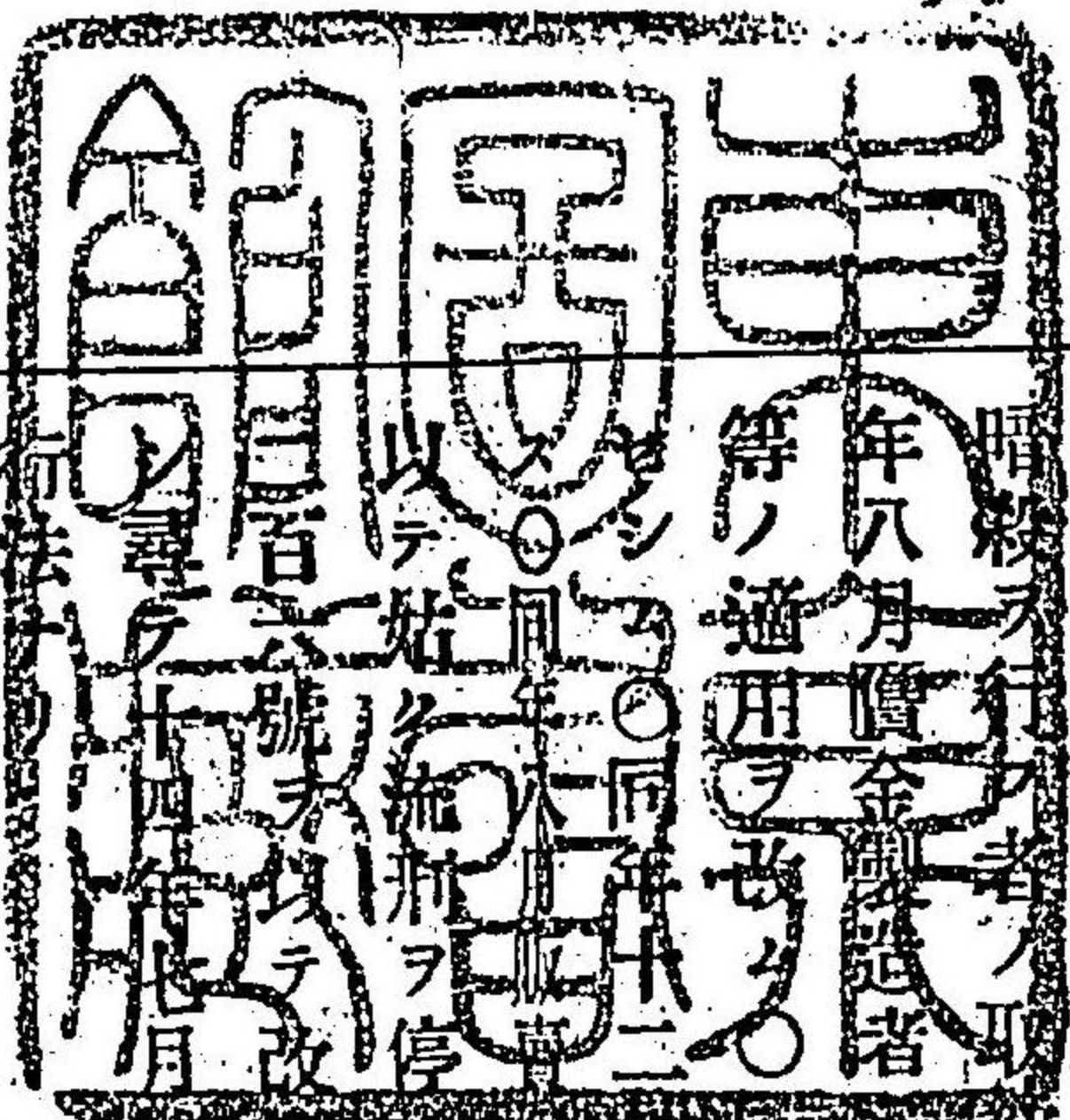
大審西院長
尾崎忠治





日本刑律實用

中村六郎



○刑法沿革 明治元年正月暗殺ヲ行フヲ嚴禁ス○同年同月賄賂ヲ以テ從人ノ囑託
 スルヲ禁シ萬一密ニ餽受スル者ハ双方急度處置ニ及フヘキ旨ヲ公布ス○同年三月
 暗殺ヲ行フ者ノ取締方ヲ定ム○同年閏四月阿片煙草ノ賣買及ヒ吞用ヲ制禁ス○同
 年八月贖金製造者ノ嚴禁取糾サシム○同年十月新律布令迄ハ舊律ヲ用ヒ磔刑焚刑
 等ノ適用ヲ改メ○同年十一月新律治定迄四刑各三等ヲ以テ假ニ輕重ヲ配當シ處置
 年産婆ニ墮胎ノ取扱ヲナスヲ嚴禁ス○三年正月財産沼籍法ヲ廢
 シ○同年十一月北海道流所規定未タ立タサルヲ
 以テ姑ク流刑ヲ停メ准流法ヲ定ム○同年十二月新律綱令六卷ヲ頒布ス○六年六月
 以テ舊テ十四條七月第三十六號ヲ以テ改正律例ヲ公布ス○十三年七月第三十六號布令ヲ以テ刑法ヲ改定
 而シテ十七年第一號布告ヲ以テ賭博犯ヲ行政警察ノ處分ニ屬ス○二十二年六月法
 律第十七號ヲ以テ賭博犯ノ行政警察處分ヲ廢止シ刑法ニ復セシム

沿革

第一編 總則

第一章 法例

第一條 正文略之

(參照再開刑 法草案) 第一章 刑法一般ノ適用

草第一條 凡ソ法律ニ據リ罰セラレタル總テノ所爲又ハ缺遺ヲ犯罪トス(刑、零)

犯罪ノ 犯罪ヲ分テ重罪、輕罪及ヒ違警罪ノ三種ト爲ス(刑、第一條)

第一種ノ犯罪ハ法律上第十二條ニ列記セル刑ノ一ヲ以テ罰スルモノナリ

第二種ノ犯罪ハ法律上第十三條ニ舉示セル刑ノ一ヲ以テ罰スルモノナリ

第三種ノ犯罪ハ法律上第十四條ニ揭示セル刑ノ一ヲ以テ罰スルモノナリ

(刑、零○草、零○佛刑、第一條)

第二條 正文略之

草第二條 何等ノ所爲又ハ缺遺ト雖モ法律ニ正條アルニ非サレハ罰スルコトヲ得ス

(刑、第二條○草、零○佛刑、第四條)

第二條第三百九十條
第三百五十五條

一號

被告豐吉ハ善三郎ナルモノヨリ酒代金延滞ノ督促ヲ受ルヨリ被告直吉ノ借用證書

刑罰ヲ行
フニハ正
條ノ必要
ナル事

兄弟相謀
リ善務ノ

免脱ヲ圖
ラシカ爲
メ先ニ結
ヒアリシ
證書ノ偽
造ニ成立
タル旨不
實ノ首告
ヲナスモ
誣告モ詐
僞財モ詐

ニ書改メ之レヲ善三郎弟豐治へ交付シ置キタル處期限經過スルモ返却セサルヨリ
 豐治カ督促スルニ因リ豐吉ハ秀五郎ニ相談シタルニ秀五郎ニ於テ實兄直吉ノ印影
 ナ盗用シタルコトヲナストキハ纒カノ懲役ニテ該負債償却ノ義務ヲ免カル、旨教唆
 シタルヲ以テ豐吉直吉ト相謀リ勝凭ニ詐欺ノ情ヲ明示シ依頼シ勝凭ハ源太ニ面會
 シ該情況ヲ示メシ代人ノ依頼ヲ爲シタルニ源太ハ之ヲ承諾シ以テ八戸警察署へ告
 訴シタリト云フニ過キサレハ詐欺取財未遂犯罪又ハ誣告罪等ヲ組成セサルモノナ
 リ何トナレハ詐欺取財ノ罪ヲ組成センニハ人ヲ欺罔又ハ恐喝スルコト人ノ財物又ハ
 證書類ヲ騙取スルコトヲ必要トス然ルニ原裁判所カ前段認ムル所ノ事實ニ依レハ
 被告等カ目的トスル處ノモノハ惟タ其義務ヲ免脱セントスルニ外ナラスシテ財物
 若シクハ證書類ヲ騙取シ又ハ騙取セントシタルモノニアラサレハナリ又誣告罪ヲ
 組成センニハ不實ノコトヲ以テ人ヲ告訴スルコト、其人ヲ陷害セントスルノ惡意
 アルコト、ヲ必用トス然ルニ原裁判所カ前段認ムル所ノ事實ニ依レハ直吉カ豐吉
 ヲ告訴シタルハ其實兩人ノ共謀ニ出テタルモノニシテ毫モ誣告ノ意ナケレハナリ
 其他被告共ノ所爲ハ法律ニ罰スヘキ正條ナキモノトス然ルヲ原裁判所カ被告共ヲ
 詐欺取財未遂犯ノ正從トシテ刑法第三百九十條等ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ裁判
 ナリ(弘前輕罪裁判所ノ言渡シニ對シ吉田豐吉吉田直吉久保秀五郎久保勝
 ナリ(早川源太上告事件明治十九年十月八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

法例

罪ナリ
ニ基キ無
ニ第ニ條
罰セス故
ノ未遂ハ
賍物牙保

二號

第二條
第四百一節

刑法第四百一條ノ罪タルヤ上告論旨ノ如ク獨立ノ犯罪ナレモ之レヲ細説スレハ事
後ノ從犯トモ稱スヘキ性質ノ罪ニシテ他ノ一個單獨ノ犯罪トハ聊カ其質ヲ異ニス
ルヲ以テ假令犯罪ニ關スル物件ノ賣買其他ノ牙保即チ紹介ヲナスモ之ヲ遂ケ得サ
ル以上ハ未遂ノ所爲ヲ罰スルノ法章ナキヲ以テ無罪タルヤ論ヲ俟タス即チ本案被
告カ所爲ニ於ケル原判官ノ認ムル事實ニ依レハ隱匿漂流物賣買ノ紹介中事發覺シ
テ遂ケ得サリシモノナレハ之レヲ罪ト爲ラサルモノトシ無罪放免ノ言渡ヲ認可シ
タルモ亦タ相當ナリ(橫濱警署裁判所ノ言渡ニ對シ中村文次郎上告事件
明治十九年五月廿五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

三號

第二百十條第一項

私書ヲ偽造シ以テ其ノ偽造證書ノ謄本ヲ製シ之ヲ行使シ金圓ヲ詐取シタリ然レモ
其偽造證書行使ハ謄本ニ過キサルモノニシテ正本ノ如ク何等ノ信用ヲ害スル程ノ
性質ヲ供ヘサルモノナレハ刑法第一百十條第一項ノ罪ヲ組成セサルナリ故ニ無罪ナ
リトス但シ詐欺取財ノ事實アルハ格別ナリトス(裁判所ノ言渡ニ付シ河野省伯カ上告事
件明治廿年十一月廿九日大審院判決)

偽造證書
ノ謄本ヲ
行使スル
モ非ナシ

第二條第七十一條
第三百六十六條

四號

未タ債主ノ手ニ渡サ、ル證書ノ如キハ一片紙ニ過キスシテ未タ何等ノ價直ヲ有セ
サルモノナリ故ニ之ヲ竊取シタリトスルモ刑法第三百六十六條ノ竊盜罪ヲ組成セ
ス無罪ナリトス但シ家宅侵入罪ハ此限ニアラス(裁判所ノ言渡ニ對シ菅田原次郎上告事件
明治廿年五月十六日大審院判決)

第二條

五號

刑法第三百六十六條ノ盜罪ヲ構成センニハ他人ノ保管スル所有物ヲ竊取スルノ事
實ナカル可カラズ今原判文ヲ閱スルニ其認メタル事實ニ依レバ被告ノ使用シタル
槻材ハ漂流物ニシテ被告ハ之ヲ拾得シ浦役場ニ届出テタルニ該届書ノ散失シ役場
ニ於テ其事實ヲ知ラス之レカ處分ヲ爲サ、ルノミナラス何人モ之ヲ保管シタルモ
ノニアラザレハ盜罪構成ノ原素ヲ具備セサルハ勿論又刑法第三百八十五條ノ漂流
物隱匿罪モ組成セサルモノニシテ刑法第二條ニヨリ無罪トナル可キ事實ナリトス
(高知警署裁判所ノ言渡ニ對シ成岡嘉次郎上告事件
明治廿一年十二月廿六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

何人モ未
タ保管セ
サル物件
ヲ處置ス
ルモ罪ト
ナラス

債主ノ手
ニ渡サ、
ル證書ヲ
竊取スル
モ罪ナシ

六號

第三百九十九條

法例

盜賊ナル
ヲ知テテ
單ニ途上
ニ運搬シ
タル者ハ
敢テ其所
爲ヲ論セ
ス

法ノ罪セ
サルヲテ
以テ人ヲ
誣告スル
モ罪ナシ

族籍ノ凡
俗ヲ厭ヒ
タルノ僞
造ハ罪ナ
シ

俗説ヲ妄
信シタル
所爲ハ過
失罪ヲ組
成セス

六

刑法第三百九十九條ニ所謂寄藏トハ盜賊ナルヲ知テ寄托ヲ受ケ之ヲ藏匿シタルモノヲ云フニ在リ本件事實ノ如キ單ニ途上運搬ヲ爲シタルニ過キサル所爲ハ假令盜賊ナルヲ知リタルニアリト雖モ之ヲ以テ法律上寄藏ノ所爲ナリト爲スヲ得ス故ニ被告等ノ所爲法律ニ正條ナシトシテ刑法第二條ニ依リ無罪ヲ言渡シタルハ相當ニシテ擬律錯誤ニアラス(福岡警務裁判所ノ言渡ニ對シ江口証外一名上告事件 明治廿二年十二月十九日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二條
第三百五十五條

七號

誣告罪ヲ組成スルニハ人ヲ陷害スルノ目的ヲ以テ法律上有罪ニシテ且不實ノ事柄ヲ訴出シタルモノナルヲ要ス今被告ノ如ク舊貨幣ヲ偽造シテ訴出テシモ舊貨幣ハ明治七年第九十三號公布ヲ以テ一般ノ通用ヲ廢止セラレタルモノナレハ被告ハ事ヲ訴フルノ始メヨリ目的ヲ遂成スル能ハサルヲ即法律上罪トナラザル事柄ヲ訴出テタルモノト做サ、ルヲ得ザルノミナラス偶々之レカ爲メ處斷セラレタルモノアリトスルモ被告カ訴出テタル事柄ノ不實ニアラザリシヲ徵シ得ベキヲ以テ被告カ所爲ハ到底犯罪ヲ構成セサルコ益明ナリ(金澤警務裁判所ノ言渡ニ對シ明珍修太郎於テ破毀ノ判決)

第二條
第二百三條

八號

文書偽造罪ハ眞實ヲ變換スルヲ害ヲ生スルコ惡意アルコト三條件具備シテ其罪ヲ組成スルニアリ然ルニ本件戶籍簿ヲ變換スルカ如キハ其意思ヲ問ヘハ單ニ家ノ族籍ノ凡俗ナルヲ厭ヒタルニ出テ戶籍簿ノ名家ヲ變換シタル迄ニシテ他ニ念慮ノナキモノナレハ罪ノ問フ可キニアラサルナリ(裁判所ノ言渡ニ對シ羽田榮治カ上告事件 明治廿年五月五日大審院判決)

第二百十七條
第二條

九號

被告人房吉シユン多吉ナミハ被告人フギニ於テ房吉養長男タリシ萬吉カ神經病ニ罹リタルヲ狐ノ付キタルモノト思惟シ此事ヲ咄セシヲ信シ云々狐ヲ放吳レントテ多吉ヲシテ石三箇ヲ取寄セシメ之ヲ燒キテ云々巳レ右燒石ヲ萬吉ノ脊部ニ一度押付ケ猶房吉ハフギカ差圖ニ從ヒタルモノナレハ被告等ハ終始フギノ妄説ヲ信シ而カモ彼レノ指示ニ從ヒ萬吉ノ疾病ヲ治セント企圖セシ行爲ニ外ナラスシテ更ニ疏虞懈怠等ノ事實ニ適合スル廉アルコトナシ然ラハ則テ刑法第三百十七條ニ所謂疎虞懈怠ヨリ生スル過失罪ヲ構造セサルナミナラズ法律上之ヲ制裁スヘキ正條ナキニ付キ無罪トス(弘前警務裁判所ノ言渡ニ對シ關根房吉關根シユン關根多吉足 決ナミ上告事件明治廿一年四月十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第二條
第三百九十三條

法例

二重典賣
ノ抵當公
要アルヲ

十號

刑法第二百九十三條末項ノ罪ヲ構造スルニハ已ニ公証ヲ經テ抵當典物ト爲シタル
ヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重子テ抵當典物ト爲シタルヲ要スルナリ然レハ本案
被告事件ノ如キ疑キニ公証ヲ經ス抵當トナシタル地所ヲ重子テ他人ニ抵當ト爲シ
タルモ法律ニ之レヲ罰スヘキ正條ナキヲ以テ豫審判事ニ於テ其理由ヲ明示シ免訴
シタルモノナレハ原會議局ニ於テ豫審終結ハ相當ナリト認メ之ヲ認可スルニ付テ
ハ何故ニ現行法律上罪スヘカサルヤノ理由ヲ明示スルニ及ハサルモノトス(前橋
裁判所會議局ノ言渡ニ對シ岸九平上告事件
明治廿年五月十二日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百三十一條

十一號

裁判所ニ對シ氏名ヲ詐ルハ罪ヲ逃レンカ爲メニテ別ニ求爲スル所アツテ詐稱スル
モノニ非ラサレバ素ヨリ罰ス可キモノニアラス(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ松坂安太郎上
告事件明治廿一年十一月廿九日大審院ニ於
テ棄却
ノ判決)

第二百八十二條

十二號

舊金銀貨ハ明治七年第九十三號公布ヲ以テ人民相互ノ取引ヲ廢止セラレタルニ依

偽造ノ舊
貨幣ナル

犯罪純治
ノ際氏名
ヲ偽ルモ
別ニ罪ト
シ論セス

テチ知リ
テ行使ス
ルモ罪ト
ナラス

リ一般ノ通用貨幣ニアラス其性質金銀塊ニ異ナルヲナシ故ニ其偽造ノ情ヲ知テ收
受行使スルモ刑法第八十二條以下ノ制裁スル所ニアラス然ラハ則チ被告カ偽造
ノ情ヲ知テ舊貨幣タル小判壹歩銀ヲ收受行使シタルモノト爲シ刑法第八十二條
第九十條ヲ適用シ刑ヲ言渡ス可キモノニアラス故ニ無罪ナリ(神戸重罪裁判所ノ言渡
常上告事件明治二十一年二月二
十八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第二百四條

十三號

刑法第二百四條ノ官吏ノ公證文書トハ其明文ノ公債證書地券ハ勿論地所建物ノ質
入書入又ハ賣買讓與等各其規則ニ從ヒ相當官吏ノ公證ヲ得テ其効力ヲ生セシムル
ノ證書類ヲ指稱スルヲ謂ヒナリ
然ルニ今此ノ徵兵脫漏入籍願書與印ヲ如キハ假令其戸長ヲ瞞着シ其與印ヲ得テ之
ヲ郡長ニ差出スモ唯其認可ヲ得ルニ止マルモノナレハ則チ未タ此等ノ罪スルノ正
條ナキヲ以テ罪ノ問フ可ナシ但シ夫レガ爲メ刑法第二百三十一條ノ事實アリタル
時ハ其罪ニ問フ可キモノトス(裁判所ノ言渡ニ對シ井上由藏カ上告事件
明治二十年十二月廿七日大審院判決)

第二條

十四號

法例

徵兵脫漏
願與書ヲ
詐欺手段
ヲ以テ得
ルモ罪ノ
問フ可キ
ナシ

刑ノ廢止
ハ公訴權
ヲ消滅セ
シム

官ノ嫌疑
以前ハ刑
法第百五
十一條ノ
罪ヲ組成
セズ

刑ノ既
往ニ溯ラ
サル事
例外

刑ノ既
往ニ溯ラ
サル事
適用

刑法停止
ヲ解キタ
ルノ法ハ
尙本周知
期限ヲ要
ス

本件ニ對シ明治廿二年一月二十三日京都輕罪裁判所ニ於テ裁判言渡ヲ爲シタル處
其裁判未タ確定セサル中則チ明治二十二年法律第一號ヲ以テ徵兵令ヲ改正セラレ
該法律ヲ掲載セシ官報ノ原裁判所へ到達シタルハ明治二十二年一月二十四日ニ在
リ而シテ其新令ニ依ルルハ舊徵兵令第三十四條届出云々ノ點ハ刪除セラレタリ依
之觀之本件所爲ノ如キハ新令ニ於テハ之ヲ罪ス可キ正條ナキニ依リ則チ刑ノ廢止
ニ屬シタルモノニシテ治罪法第九條第四項ニ基キ公訴消滅ニ販スベキモノトス依
テ原裁判ノ當否如何ニ關セス直ニ免訴ヲ言渡スモノナリ(京都輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ藤
月九日大審院ニ
於テ破毀ノ判決)
第二條
第五十一條

十五號

中野渡辰ヲ逃走セシムルコトヲ謀リタルハ同人カ放火ノ所爲アリシトノ爲メナルコ
ヲ推知スルニ足リ且又辰ヲ青森迄見送リタルハ十月十五日ニシテ放火シタリト云
ハ十月四日ノ後ナルコトハ一件書類ニ徵シ明瞭ナルモ其實被告人等相謀テ辰ヲ北海
道へ渡航セシメタルハ未タ官ノ追捕處分ニ係ル以前ニアルヲ以テ被告等ノ所爲ハ
刑法第百五十一條ノ罪ヲ組成セス全第三條ニ依リ無罪ナリ(弘前重罪裁判所ノ言渡ニ對シ
中野渡吉松中野渡馬助中野渡松之助中野渡丹治中野渡室中野渡
孫兵衛上告事件明治廿二年六月八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第三條 正文略之

草第三條 刑法ハ其頒布以前ニ係ル犯罪ニ付キ既往ニ溯ルノ効力ヲ有セス
然レモ新法ノ條則ニシテ更ニ寬和ナルモノハ直チニ之ヲ適用スヘシ(刑、第四條○
草、零○佛刑第四條)

第三條 第一項

一號
法律規則ハ其明文アルモノヲ除クノ外ハ既得權ヲ剝奪ス可キモノニアラサルハ論
ヲ俟タサルナリ故ニ舊証券印稅規則ニ於テ金錢判取帳ノ附込年限ヲ定メサル以上
ハ其印紙ヲ附込金高ニ滿ツル迄ハ何年迄之ヲ使用スルモ新印稅則ニヨリ之レヲ罰
ス可キニアラサルナリ(裁判所ノ言渡ニ對シ川岸甚左工門ノ上告事件
明治廿年四月廿八日大審院ニ於テ破棄ノ判決)

第三條

二號
刑法第百六十條第百六十一條ニ掲載セシ賭博犯罪處斷ノ法條ハ明治十七年第
一號布告ヲ以テ一旦其施行ヲ停止シ行政警察ノ處分ニ屬セシメ而シテ本年法律第
十七號ヲ以テ右布告ヲ發シ即チ刑法施行ノ停止ヲ解キタル者ナリ抑刑法ノ正條ハ
固ヨリ一般人民ノ周知スル所ナリト雖モ其法條ヲ施行スルニ於テ必ス施行期限ヲ

法例

定メタル規則ヲ遵守セサル可カラサルモノニシテ其停止ヲ解キタルヨリ七日ヲ經
過セサル前即施行期限内ニ該ル賭博犯ニ對シ直ニ刑法ノ正條ヲ適用スルコトヲ得
サルモノトス(千葉縣裁判所ノ言渡ニ對シ藤藤七助外一名上告事
件明治廿二年十月廿九日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第三條

三號

賭博處分
規則トハ刑
法トス可キ
モノニアラ
ズ又刑罰停
止ノ効ハ溯
及セズ

賭博犯ヲ處分ス可キ行政規則ハ本年六月法律第十七號ヲ以テ廢止セラレシト雖モ
其廢止前即チ規則施行中ニ犯シタル賭博犯ニ對シ直ニ刑法上處分ノ區域ニ移シ刑
法ノ正條ヲ溯及ス可キモノニアラズ又行政上ノ懲罰規則ヲ以テ刑法ト同視シ其輕
重ヲ比照ス可キ者ニアラス原裁判所ニ於テ本案被告事件タル行政規則施行中ノ賭
博犯ニ對シ刑法第三條第二項ヲ適用シ行政規則第六十一條ニ依リ處斷シタルハ附
帶上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ニ該ル不法ノ裁判ナリトス而シテ原裁判所檢察官カ刑
法ノ効力ヲ及ホスヘキモノトノ上告論旨モ亦相立ス仍テ無罪ナリ(大津縣裁判所ノ言
渡ニ對シ佐藤久兵衛
上告事件明治廿二年十月廿三
日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第三條

四號

新舊一方ノ附加刑アル法律ヲ比照スル場合ニハ刑法第三條第二項ノ法意ニ基ツ

主刑ノ比
較シ附

加刑ハ比
較セズ

キ主刑ノミヲ比照シ輕キニ從ヒ處斷シ其附加刑ヲ科ス可キモノニアラス然ルニ原
裁判所ニ於テ新舊煙草稅則ヲ比照シ輕キ新法ニ從ヒ處斷シナカラ其附加刑迄ヲ科
シ其犯罪ニ係ル煙草十八玉ヲ沒收スト言渡シタルハ上告論旨ノ如ク不法ノ裁判ナ
リ(新潟縣裁判所ノ言渡ニ對シ清水園吉上告事件
明治廿二年五月十八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第三條 第百條

五號

抑新舊ノ法ヲ比照シ處斷ス可キ犯罪ニシテ數罪俱發シタル場合ニ於テハ先ツ同性
質ノ犯罪ニ付一個毎ニ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從ヒ而シテ後チ數罪俱發例ニ照シ
一ノ重刑トヲ比照シ處斷ス可キニ原裁判ハ擬律ヲ誤リ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡
タル不法ノ裁判ニシテ非常上告ハ其當ヲ得タルモノトス依テ治罪法第四百三
十五條第二項ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判スルコト左ノ如シ
原裁判言渡書ニ認メタル事實ニ依リ之ヲ法律ニ照スニ所犯新法實施前ニ在ルヲ以
テ刑法第三條第二項明治十四年第八十一號布告ニ依リ新舊法ヲ比照シ竊盜罪ハ舊
法ニ於テハ新律綱領賊盜律竊盜條及ヒ改定律例第三百三十五條ニ依リ贓金三百圓以
上懲役終身新法ニ於テハ刑法第三百六十八條全第三百六十七條全第三百六十九條
同第三百七十六條ニ依リ七月十五日以上六年三月以下ノ重禁錮六月以上二年以下

新舊法ヲ
比照ス可
キハ罪數
箇アル場
合

法例

ノ監視ニ該ル依テ輕キ新法ニ從ヒ監視ヲ付セス強盜罪ハ舊法ニ於テハ改正強盜律第二項ニ依リ懲役終身瞭望者ナルヲ以テ律例第二百二十八條ニ依リ一等ヲ減シ懲役十年ノ處原諒ノ情狀アルヲ以テ名例律斷罪無正條ニ照シ一等ヲ減シ懲役七年新法ニ於テハ第三百七十八條全第三百七十九條ニ依リ有期徒刑原諒ス可キ情狀アルヲ以テ全第八十九條全第九十條ニ照シ一等ヲ減シ重懲役ニ該ル依テ輕キ舊法ニ從ヒ處斷ス可キモノトス而シテ二罪俱發スルヲ以テ名例律二罪俱發以重論條及ヒ刑法第百條ニ照シ一ノ重キ強盜ニ從ヒ懲役七年ニ處スル者ナリ(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ年十月三十一日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第三條

六號

被告勇吉ハ明治十三年十一月二十二日竊盜三犯ノ科ニ依リ懲役七年ニ處セラレ服役中明治十四年四月頃外役先ヨリ逃走シ明治十五年九月以後二人以上共謀シ數次竊盜ヲ犯シタル所爲ニ對シ前掲ノ法條ヲ適用シ棒鎖二日ノ上從新拘役及ヒ重禁錮監視ノ刑ニ處斷シタリ抑改定律例第三百一條ニ掲ケル棒鎖二日ノ上仍ホ原犯ノ年限ニ照シ新ニ拘役ストアル從新拘役ノ處分法ハ明治十四年第八十一號布告新舊法比照例第十三條ニ舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ストアルニ依テ自カラ

從新拘役
ノ法ハ新
法ニ於テ
廢止セリ

比照十四
箇ノ例

消滅シタル者ナリ然レハ舊法ニ依テ處斷ヲ經タル囚徒逃走シタル者ハ單ニ棒鎖ノ刑ノミヲ科スヘキモノナルニ原裁判所カ棒鎖二日ノ上從新拘役ニ處シタルハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル者ナリ(岡山輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ井間勇吉上告事件明治二十一年四月十二日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第三條第二項

七號

刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

第一條 新舊法比照左ノ如シ

新法

舊法

- | | |
|--------|------|
| 一 死刑 | 斬絞 |
| 二 無期徒刑 | 懲役終身 |
| 三 有期徒刑 | 禁獄終身 |
| 四 無期流刑 | |
| 五 有期流刑 | 懲役十年 |
| 六 重懲役 | 懲役七年 |
| 七 輕懲役 | 禁獄十年 |
| 八 重禁獄 | |

法例

九 輕禁獄

十 重禁錮

十一 輕禁錮

十二 罰金

十三 拘留

十四 科料

禁獄七年

懲役十二日以上五年以下

禁錮鎖錮十一日以上五年以下

贖罪収贖罰金科料二圓以上

懲役禁獄鎖錮拘留十日以下

贖罪收贖罰金科料二圓未滿

舊法新法ノ刑期内ナル時

短期ヲ比較ス可キ

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期内ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過ク
ルヲ得ス(舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ重禁錮
ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ノ重禁錮ニ處スルノ類若シ舊法ノ刑期新
法主刑ノ短期ニ等クシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ(舊法ニ
於テ禁獄三十日ニ該ル者新法ニ照シ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ
從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類)

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短
キ者ニ過ルヲ得ス(舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照ラシ
三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル者ハ新法ニ從ヒ三月以上一年以下ニ處スルノ
類)若シ舊法新法ノ刑其短期等クシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ

舊法ノ金
刑新法ノ金
金額内ナ
ル時

附加ナキ
体刑

体刑ト金
刑

刑法第二
十七條ノ
適用

舊法ノ体
刑

監視ノ除
却

從フ(舊法ニ於テ二月以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上二年以
下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處スルノ類)

第四條 舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法主刑ノ金額ニ在ル時ハ新法ニ
從フ但舊法ノ金額ニ過クルヲ得ス

第五條 舊法新法ノ罰金科料共ニ多數寡數アル者ハ其寡數ノ寡キ者ニ從フ但其多
數ノ寡キ者ニ過クルヲ得ス

第六條 舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加スヘキ時ハ其罰金ヲ
附加セス

第七條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科料ニ該ル時ハ新法ニ從フ舊法
ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル者ハ舊法ニ從フ

第八條 舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタルモノ其金額ヲ延期限内ニ納完スル能ハサ
ル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但一圓未滿ト雖仍ホ一日ニ計算
ス

第九條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑
ヲ適用セス但除族追奪位記沒収ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條 舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セ
法例

除族ノ

第十一條 華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セス

加減ヲ以テ本刑トスル

第十二條 新法ト舊法ト比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

棒鎖

第十三條 舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

右奉勅旨布告候事(明治十四年十二月第八十二號布告)

○布告ノ法式(十九年二月勅令第一號)第三條第一項

八號

施行ノ期限

第十條 凡ソ法律命令ハ官報ヲ以テ布告シ官報各府縣廳到達日數ノ後七日ヲ以テ施行ノ期限トナス但官報到達日數ハ明治十六年五月二十六日第十四號布達ニ依ル

天災

第十一條 天災時變ニ依リ官報到達日數内ニ到達セサルキハ其到達ノ翌日ヨリ起算ス

例外

第十二條 北海道及沖繩縣ハ官報到達日數ヲ定メス現ニ道廳又ハ縣廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス

即日ノ施行

島地ハ所轄郡役所ニ官報ノ到達シタル翌日ヨリ起算ス
第十三條 法律命令ノ發布ノ當日ヨリ施行セシムルコトヲ要シ又ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケタル者ハ第十條第十一條第十二條ノ例ニ依ラス
○官報到達日數十六年五月第十四號布達
今般第十七號ヲ以テ布告布達施行期限ヲ改定シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

到達日數

周知期限ノ日數

- 京都府四日○大坂府四日○神奈川縣即日○兵庫縣四日○長崎縣十一日○新潟縣五日
- 日○埼玉縣即日○群馬縣即日○千葉縣即日○茨城縣二日○栃木縣二日○三重縣四日
- 日○愛知縣三日○靜岡縣二日○山梨縣二日○滋賀縣四日○岐阜縣四日○長埜縣四日
- 日○宮城縣五日○福島縣四日○岩手縣七日○青森縣十日○山形縣五日○秋田縣八日
- 日○福井縣八日○石川縣七日○富山縣六日○鳥取縣七日○島根縣八日○岡山縣六日
- 日○廣島縣七日○山口縣八日○和歌山縣六日○德島縣六日○愛媛縣九日○高知縣八日
- 日○福岡縣九日○大分縣十一日○佐賀縣十一日○熊本縣十一日○宮崎縣十一日
- 鹿兒島縣十二日

但富山佐賀宮崎ノ三縣ハ開廳ノ日迄舊管廳ノ到達日數ニ依ル

草第四條 凡ソ帝國ノ臣民外國ニ在テ日本國ノ安寧ニ對スル重輕罪、國璽、官印、

法例

外國ニ於テ行ハレ

タル重罪

印紙及ヒ記號極印ノ偽造(若クハ詐欺ノ行使)貨幣及ヒ適法ノ通用ヲ有スル内國ノ紙幣及ヒ内國貨幣ニ準シタル銀行紙幣ノ偽造、變造(若シハ偽造變造シタル該貨幣ノ行使)ノ罪ヲ犯シタル者ハ日本ノ法律ニ循ヒ日本ニ於テ罰スヘキモノトス然レモ其犯罪ノ行ハレタル國ニ於テ確定裁判ヲ經サルハ日本ニ於テ起訴ヲ爲スコトヲ得ス(刑、零〇草、第三百二十四條以下、第四百十八條以下、第二百四條以下、第二百二十八條以下)〇佛法、第七條)

承前

草第五條 帝國臣民ノ外國ニ在テ犯シタル重罪ニシテ前條外ノモノハ以下ノ條件ノ具備スルニ非サレハ日本ノ法律ニ循ヒ日本ニ於テ起訴裁判スルコトヲ得ス

第一其犯罪ノ行ハレタル國ニ於テ確定裁判ヲ經サル時

第二犯罪人自ラ日本ノ領地内ニ歸來スルカ或ハ其交付ヲ得タル時

第三日本ノ法律ニ於テ罰ス可キ犯罪ニシテ其行ハレタル國ノ法律ニ照シ重罪又ハ輕罪ト看做サル、時

第四日本官廳ニ被害者ノ告訴アルカ或ハ外國政府ヨリ日本官廳ニ公然ノ告發アリタル時

第五其犯罪ノ外國政府ニ於テ恩赦ヲ受ケサル時

第六其公訴ノ外國ノ法律ニ照シ期滿免除ヲ經サル時(刑、零〇草、零〇佛治、第五

罪犯交付ノ禁止

外國人ノ罪犯

承前

條)

草第六條 何レノ場合ニ於テモ日本臣民ノ罪ヲ犯シタル國ヨリ之ヲ裁判懲罰スルカ爲メニ罪犯交付ヲ求ムルトモ日本政府ハ之ヲ許可スルコトヲ得ス

第七條 日本ノ所領内又ハ其屬國內ニ於テ外國人ノ行フタル犯罪ハ總テ日本ノ法律ニ循ヒ日本ニ於テ罰スヘキモノナリ(刑、零)

〔附言〕 新刑法ヲ頒布スル所ノ布告ニハ下ノ一條ヲ設クヘシ「本法典ヲ外國人ニ適用ス可キ時期ハ追テ外國トノ條約締結ヲ以テ之ヲ定ム」(刑、零)

第八條 外國人外國ニ於テ第四條ニ記載シタル犯罪ヲ行フタルハ第五條ニ列記セル第一、第二ノ條件具備スルニ於テハ日本ノ法律ニ循ヒ日本ニ於テ罰スヘキモノトス(刑、零)

草案第四條乃至第六條

朕帝國ト亞米利加合衆國トノ間ニ締結シタル兩國犯罪人引渡條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム(明治十九年十月六日ノ勅令)

御名 御璽

日本國亞米利加合衆國犯罪人引渡條約譯文

日本皇帝陛下及ヒ亞米利加合衆國大統領ハ兩國内并ニ其管轄内ニ於テ司法事務ヲ

條約ノ趣旨

法例

益周到ナラシメ及ヒ犯罪ヲ防止センカ爲メ下ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ
告訴發ヲ受ケ未ダ處分ヲ經スシテ逃亡スル者ハ其情狀ニ據リ互ニ之ヲ引渡スノ
便宜ナルヲ認メ之レカ爲メ條約ヲ締結スルコトニ決シ日本皇帝陛下ハ外務大臣伯爵
井上馨ヲ亞米利加合衆國大統領ハ日本駐劄特命全權公使リチャード、ビー、ハッパ
ードヲ各其全權委員ニ命セリ因テ双方全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ誠實適式ナ
ルヲ認メ左ノ條々ヲ議定ス

引渡

第一條 締約國一方ノ管轄内ニ於テ第二條ニ掲クル犯罪ニ付有罪ノ宣告若クハ告
訴發ヲ受ケタル者他ノ一方ノ管轄内ニ於テ發見セラレタルトキハ締約兩國政府
ハ本條約ニ開列スル情狀及ヒ制限ニ遵ヒ互ニ之ヲ引渡スヘシ

第二條

引渡ヲ要
ス可キ
犯罪

- 一 謀殺、謀殺未遂犯、其他殺人罪
- 二 貨幣ノ偽造若クハ變造、偽造若クハ變造貨幣ノ發行或ハ行使、公債証書、其
利札、銀行紙幣、其他公衆ノ信用ヲ受ク可キ證書類ノ偽造並ニ其發行若クハ行
使

三 文書ノ偽造若クハ變造並ニ其行使

四 監守盜即チ官吏又ハ監守人締約國一方ノ管轄内ニ於テ公金ヲ私用スル罪並

ニ傭主ノ損害トナルヘキ被傭人ノ監守盜

五 強盜若クハ五拾弗以上ノ竊盜

六 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ夜間若クハ晝間他人ノ家宅ヲ破壞シ之ニ侵
入スル罪

七 重刑ニ當ル罪ヲ犯ス目的ヲ以テ官衙、國立銀行、私立銀行、貯蓄銀行、財產管理
會社、及保險會社並ニ其他會社ノ家宅ヲ破壞シ若クハ破壞セスシテ之ニ侵
入スル罪

八 偽證及偽證教唆

九 強姦

十 放火

十一 國際法ニ於テ海賊ト認ムル罪

十二 引渡ヲ請求スル國ノ旗章ヲ掲タル船舶大洋航行中其船内ニ於テ犯シタル
謀殺、謀殺未遂犯、其他殺人罪

十三 惡意ヲ以テ鐵道、馬車鐵路、船舶、橋梁、家屋及ヒ公用建物並ニ其他ノ建物ヲ
破壞シ若クハ破壞セント謀リ其所爲人命ニ危害ヲ生スヘキモノ

十四 銀行營業者、受託人、銀行若クハ財產管理會社ノ頭取役員ノ詐欺ニシテ現

法例

行法律ニ據リ罪トナルヘキモノ

第三條 請求ニ係ル人ヲ引渡ノ請求ヲ受ケタル國ニ於テ審判中トナルトキハ之ヲ引續キ之ヲ審判スルトハ該國ノ隨意タルヘシ但其審判該逃亡人ノ引渡ヲ請求スル罪ノ爲メニアラサルトキハ一時其引渡ヲ遲滯スルコトアルモ終ニ之ヲ拒クコトヲ得ス

政事犯ハ拒絶シ得ル

第四條 若シ請求ニ係ル人ヲ政事上ノ犯罪ニ付審判シ若クハ處刑セントスルノ目的ヲ以テ引渡ヲ請求シタリト認ムルトキハ其引渡ヲ爲サ、ルヘシ又引渡サレタル人ハ其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪ニ付審判若クハ處刑セラレ、ト無ルヘシ

引渡ニ付キ經由ス可キ手續

第五條 引渡ノ請求ハ締約國相互ノ外交官ヲ經テ之ヲ爲スヘシ若シ外交官其國內又ハ其政府所在ノ地ニ駐留セサルトキハ高等領事官之ヲ爲スヘシ

全上

已ニ有罪ノ宣告ヲ受ケタル逃亡人ノ引渡ヲ請求スルニハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ証印アル宣告文寫其裁判官ノ職權ニ付相當行政官ノ証明書及ヒ其行政官ノ職權ニ付日本又ハ合衆國ノ公使若クハ領事ノ証明書ヲ添フ可シ若シ逃亡人告訴發ヲ受ケタルノミナルトキハ請求國ニ於テ發シタル逮捕狀ノ公寫及其逮捕狀ヲ發スルノ根據トナリタル證據書類ノ公寫ヲ添フヘシ

全上

逃亡人ノ引渡ハ之ヲ發見シタル國ニ於テ本罪ヲ犯シタルモノトセハ該國ノ法律ニ

同

遵ヒ之ヲ逮捕シ及ヒ審判ニ付スヘキ刑事上ノ證據充分ナル場合ニ限ルモノトス
第六條 本條約第二條ニ掲クル犯罪ニ付告訴發ヲ受ケタル逃亡人逮捕ノ爲メ相當官吏ヨリ逮捕狀ヲ發シタル旨外交官ヲ經由シ電報ヲ以テ通知アリ且該逃亡人引渡ノ請求ハ追テ本條約ノ條款ニ從ヒ之ヲ爲スヘキ旨該外交官ヨリ保證シタルトキハ締約國政府ハ假リニ之ヲ逮捕シ相當ノ期限内即チ二月ヲ超過セサル間之ヲ監禁シ其引渡請求ノ根據ト爲ルヘキ書類ノ提出ヲ待ツヘシ

法律ハ其國ノ臣民ヲ管理スル故引渡スルノ義務ナシ費用止此ノ約條ノ方法効力

第七條 締約國ハ本條約ノ條款ニ因リ互ニ其臣民ヲ引渡スノ義務ナキモノトス但其引渡ヲ至當ト認ムルトキハ之ヲ引渡スコトヲ得ヘシ
第八條 被告人ノ逮捕監禁訊問及ヒ送致ノ費用ハ其引渡ヲ請求シタル政府ニ於テ之ヲ支辨スヘシ
第九條 本條約ハ其批准交換後六十日ヲ經テ効力ヲ有スヘシ而シテ締約國ノ一方ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ヘシト雖モ其廢止ノ通知ヲ爲シタル後六月間ハ仍ホ其効力ヲ存スヘシ

右確證トシテ双方ノ全權委員ハ各本條約ニ通ニ署名調印スルモノナリ

明治十九年四月廿九日即チ西曆第一千八百八十六年四月廿九日東京ニ於テ書ス

井

上

鑒

法例

修正

十號

亞米利加合衆國政府ハ前條約ニ左ノ修正ヲ爲サンコトヲ請求セリ

第二條第一項「謀殺、謀殺未遂犯、其他殺人罪」トアルヲ「謀殺及ヒ其未遂犯」ト改

ム

同條第四項「私用スル罪」ノ下「並ニ備主云々」ノ十九字ヲ削除ス

同條第五項「強盜」ノ下「若クハ五拾弗以上ノ竊盜」ノ十一字ヲ削除ス

同條第十四項全文ヲ削除ス

其四條中「其引渡前ニ犯シタル政事上ノ犯罪」ノ下「若クハ其引渡ヲ許シタル犯罪ノ外」ノ十五字ヲ追加ス

第六條中「相當官吏ヨリ」ノ下「妥當ノ證據アルニ依リ適法ノ」十三字并ニ「電報」ノ下「又ハ其他書面」ノ六字及ヒ「締約國政府ハ」ノ下「法律ノ範圍内ニ於テ」ノ九字ヲ追加ス

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

帝國及亞米利加合衆國兩全權委員ノ締結記名調印シタル兩國犯罪人引渡條約及ヒ亞米利加合衆國政府ノ發議ニ係ル該條約ノ修正事項ヲ朕親シク閱覽點檢セシニ能

ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ總テ之ヲ嘉納批准シ日本帝國ニ依テ該修正ヲ加ヘタル兩國犯罪人引渡條約ヲ履行遵奉セシムルコトヲ茲ニ約ス

神武天皇即位紀元二千五百四十六年明治十九年九月二十五日東京帝宮ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈴セシム

御名 御璽

外務大臣 伯爵 井上 馨

西曆千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ日本帝國及ヒ亞米利加合衆國ノ兩全權委員カ調印シタル犯罪人引渡條約ニ華聖頓府ニ於テ其批准ヲ交換スヘキノ明文アリト雖モ兩締約國ハ其批准ヲ東京ニ於テ交換スルコトニ議定シ又條約ノ末文ニ西曆第一千八百八十六年四月二十九日東京ニ於テ書スト解スルコトニ議定シタリ因テ今下ニ連署シタル兩名ハ本件ニ關シ各其政府ヨリ委任ヲ受ケ右條約批准交換ノ爲メ互ニ相會同シ双方ノ批准ヲ精密ニ比照セシニ孰レモ能ク符合スルヲ以テ定式ニ隨ヒ本日之ヲ交換セリ

右証トシテ下ニ連署シタル兩名ハ此交換証書ニ其名ヲ記シ印ヲ鈴ス

西曆千八百八十六年九月二十七日東京ニ於テ
井 上 馨

法例

草案第四條乃至第六條

十一號

朕逃亡犯罪人引渡條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム(明治二十年八月 勅令第四十二號)

御名 御璽

勅令第四十二號

逃亡犯罪人引渡條例

第一條 本條例ニ於テ締約國ト稱スルハ既ニ帝國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シ若ク

ハ今後締結スル外國ヲ謂フ

引渡犯罪ト稱スルハ外國ト締結シタル犯罪人引渡條約ニ掲クル犯罪ヲ謂フ

逃亡犯罪人ト稱スルハ締約國ノ管轄内ニ於テ犯シタル引渡犯罪ニ付告訴發テ

受ケ若クハ有罪ノ宣告ヲ受ケタル帝國臣民外ノ人ニシテ帝國ノ管轄内ニ逃避シ

タル者又ハ逃避シタルノ嫌疑若シクハ逃避セントスルノ嫌疑アル者ヲ謂フ但左

ノ場合ニ於テハ帝國臣民ヲ包含ス

一帝國ト請求國トノ犯罪人引渡條約ニ交互其臣民ノ引渡ヲ爲ス可キ條款アルハ

二犯罪人引渡條約ニ交互ノ任意ヲ以テ其臣民ノ引渡請求ニ應スルコトアル可キ旨

締約國

引渡犯罪

逃亡犯罪

引渡ノ請

引渡ヲ拒

引渡請求
ニ係ル犯罪
事件ノ事
件ニ付告
訴發テ
受ケタル
等ノ場合
締約以前
ノ犯罪
裁判權ヲ
有スルハ

ノ條款アリ且請求國ニ於テ同様ノ場合ニハ自國ノ臣民ヲ引渡ス可キ旨ヲ申出
タルハ

第二條 締約國ヨリ逃亡犯罪人ノ引渡請求アリ之カ引渡ノ目的ヲ以テ其手續ヲ爲
スルハ本條例ニ定ムル所ノ條款ニ據ル可キモノトス

第三條 左ノ場合ニ於テハ逃亡犯罪人ヲ引渡スコトヲ得ス

一 引渡ノ請求ニ係カル者ノ所犯政事上ノ犯罪ナルトキ

二 引渡ノ請求ハ實際政事上ノ犯罪ニ付審問シ若クハ處刑セントスルノ目的ニ

出テタル旨ヲ本人ニ於テ之ヲ證明シタルトキ

第四條 逃亡犯罪人其引渡請求ニ係カル犯罪外ノ事件ニ付キ帝國內ニ於テ告訴告

發ヲ受ケ又タハ處刑中ナルトキハ無罪又タハ刑期滿限若シクハ其ノ他ノ事由ニ

因リ釋放セラレタル後ニアラサレハ之ヲ引渡スコトヲ得ス

第五條 帝國ト外國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シタルハ逃亡犯罪人ノ犯時其締約

以前ニ係ルト雖モ該締約國ノ請求ニ應シ其引渡ヲ爲スコトアルヘシ

第六條 引渡犯罪ニ付キ帝國裁判所ニ於テ締約國裁判所ト均シク裁判權ヲ有スト

雖モ若シ司法大臣ノ意見ニ於テ其審判ヲ便ナラシメンカ爲メ逃亡犯罪人ノ引渡

ヲ可トスルトキハ之ヲ引渡スコトアル可シ

法例

逮捕状ノ
効力

第七條 本條例ニ據リ發シタル總テノ逮捕状ハ帝國内何レノ地ニ於テモ効力アル
モノトス

二箇國ノ
請求ニ係
ル時

第八條 一逃亡犯罪人ヲ二國以上ノ締約國ヨリ各其國ニ於テ犯シタル罪ノ爲メ引
渡請求ヲ爲シタルトキハ最初請求ヲ爲シタル國ニ之ヲ引渡スヘシ但シ其請求ヲ
爲シタル締約國間ニ特別ノ約束若シクハ協議アル場合ハ此限ニアラス

逮捕状ヲ
發付ス可
キ手續

第九條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一名若シクハ二名以上ノ上席檢事ニ命
シ逃亡犯罪人ヲ假リニ逮捕スル爲メ附録第一號書式ニ仍リ假逮捕状ヲ發セシム
ルヲ得

通知

外務大臣ハ締約國ヨリ相當ノ順序ヲ經由シ書面又ハ電信ヲ以テ逃亡犯罪人ヲ逮
捕スル爲メ既テニ逮捕状ヲ發シタルコトノ通知ト其ノ引渡ヘ正式ニ依リ請求ス
可キ旨ノ保證トニ接シタル後ニ限リ本條ノ請求ヲ爲ス可シ

逮捕状ノ
期限

第十條 假逮捕状ニ據リ逃亡犯罪人ヲ逮捕シタル場合ニ於テ二月ヲ過キサル相當
ノ期限内ニ其引渡ノ請求ナキトキハ之ヲ釋放ス可シ但此場合ニ於テ逮捕シタル
者ヲ釋放スルモ再ヒ之ヲ逮捕シ及引渡スコトヲ妨ケサルモノトス
假逮捕状ニ據リ逮捕シタル者ノ引渡請求アリタルトキハ更ニ附録第二號書式ノ
逮捕状ヲ發シ假逮捕状ト交換スヘシ

引渡ノ順
序

第十一條 第九條ニ定メタル例外ノ場合ヲ除クノ外ハ引渡請求ヲ爲シタル國トノ
條約ニ定メタル相當ノ順序ヲ經由シ左ノ書類ヲ添ヘ引渡ノ請求アリタル後ニ非
ラサレハ何人ヲモ引渡ノ目的ヲ以テ逮捕スルコトヲ得ス

一 告訴發發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其所犯ニ付訴アリタル國ノ相當官吏
ニ於テ發シタルト認メ得キ逮捕状ノ公寫及ヒ該逮捕状ヲ發スルノ根據ト
爲リタル口供書若クハ陳述書ノ公寫

二 有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ証印ア
ル宣告書ノ寫

外務司法
兩大臣ノ
意見

第十二條 外務大臣引渡請求書ニ接シ犯罪人引渡條約ノ條款ニ適合シタルト思量
スルトキハ該請求書ニ其關係書類ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ送付ス可シ
司法大臣本條ノ請求ニ接シ妥當ノ事由アル請求ト思量スルトキハ逃亡犯罪人ノ
所在又ハ其到着スベシト認ムル地ノ上席檢事ニ命シ逮捕状ヲ發セシム可シ

檢事

第十三條 上席檢事前條ニ掲カケタル司法大臣ノ命令ニ接シタルトキハ附録第二
號書式ニ依リ逮捕状ヲ發ス可シ

逮捕

第十四條 請求ニ係ル逃亡犯罪人ヲ逮捕シ若クハ假逮捕シタルトキハ其逮捕状ヲ
發シタル上席檢事又ハ之ヲ逮捕シタル地ノ上席檢事ニ引渡ス可シ

法例

具申
書類

上席検事ハ逃亡犯罪人逮捕ノ顛末ヲ直ニ司法大臣ニ具申ス可シ
司法大臣上席検事ノ具申ニ接シタル時引渡請求書アレハ其寫及ヒ附屬書類ヲ速
ニ該検事ニ送付ス可シ但被告人ヲ釋放ス可キノ命令ヲ發スルトキハ此手續ヲ爲
スニハ及ハズ

告訴發
ニ依ル檢
事ノ處置

第十五條 告訴發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席検事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人
違ナキヲ及引渡請求書ニ附屬セル書類ノ確實公正ナルコトヲ認定ス可シ但上席
検事該書類ノミニテハ証據不充分ナリト認ムルトキハ仍ホ被告人ノ犯罪ニ對ス
ル証據ヲ取ルコトヲ得

有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席検事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人違ナキ
コト及其引渡ヲ請求シタル締約國ノ相當裁判所ニ於テ宣告ヲ爲シタルノ確實ナ
ルコトヲ認定ス可シ

具申

第十六條 上席検事被告人ノ訊問ヲ結了シタルトキハ訊問書ニ其處分方ニ關スル
意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ具申ス可シ但上席検事ハ之ト共ニ引渡請求書寫及
附屬書類ヲ返却ス可シ

司法大臣該検事ノ具申ニ接シタル時ハ附錄第三號書式ニ依リ引渡狀ヲ發スルカ
又ハ逮捕シタル者ヲ釋放ス可シ

留置ノ期
限

第十七條 逃亡犯罪人ハ逮捕狀ニ據リ逮捕セラレタル後二月以上留置セラレ、コ
トナカル可シ

引渡狀ヲ
發ス可キ
場合

第十八條 司法大臣ハ左ノ場合ニ限リ引渡狀ヲ發スルコトヲ得
一 引渡犯罪ニ付告訴發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ若シ其告訴發ヲ受ケ
タル罪ヲ帝國内ニ於テ犯シタルモノトセハ帝國ノ法律ニ據リ被告人ヲ審判
ニ付スルニ充分ナル犯罪ノ証據アリト認メタルトキ
二 有罪ノ宣告ヲ受ケタルモノ、場合ニ於テハ相當裁判所ニ於テ其ノ宣告ヲ爲
シタルコトヲ認メタルトキ

欠席裁判
ノアリタ
ル場合

第十九條 欠席裁判ニ由リ有罪ノ宣告ヲ受ケタルモノハ其引渡ヲ請求シタル締約
國トノ間ニ特別ノ約款アルニ非サレハ本條例ニ於テハ之ヲ告訴發ヲ受ケタル
者ト爲シ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ト認メス

外務大臣
へ通知

第二十條 逮捕シタル者ヲ釋放シ又ハ其引渡ノ爲メ引渡狀ヲ發シタルトキハ司法
大臣ハ引渡請求書及ヒ附屬書類ニ其執行シタル手續及其理由ノ略記ヲ添ヘ之ヲ
外務大臣ニ返付ス可シ

留置期限

第二十一條 引渡狀ヲ發シタル後何人ヲモ一月以上留置スルコトヲ得ス但此期限
内ニ之ヲ帝國外ニ引取ラサルトキハ請求國相當官吏ニ於テ正當ノ事由ヲ示スニ

法例

非サレハ釋放ス可シ

携帶品ノ
交付

第二十二條 逃亡犯罪人ヲ引渡タストキハ其逮捕ノ際差押ヘタル本人ノ携帶品ハ
正當ノ理由アルニアラサレハ其引渡ノ節本人ト共ニ悉ク之ヲ交付ス可シ

通行ノ認
可

第二十三條 司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一外國ヨリ他ノ外國ニ引渡シタル
モノ、帝國内海陸ノ通行ヲ認可スルヲ得

全上

本條ノ請求ハ引渡ヲ受ク可キ國ノ政府ヨリ引渡狀ノ公寫ヲ添ヘ相當ノ順序ヲ經
由シタル照會書ヲ外務大臣ニ於テ受領シタルトキニ限ル但帝國ト請求國トノ間
タニ特別ノ約款ナキトキニ該照會書ノ外仍ホ請求國ノ政府ニ於テ之ト同一ノ場
合即チ第三國ヨリ帝國ニ逃亡犯罪人ヲ引渡シタル場合ニ該請求國內海陸ノ通行
ヲ均シク認可スヘキノ保證ヲ爲シタルトキニ限ル
(附錄略ス)

草案第四條乃至第六條

法ノ制裁
ハ土地及
國民ニ
及フモノ
トス

本案ノ問題ハ公訴ヲ受理スルノ當否ニ在レハ之ヲ論決センニハ其犯罪ハ内國ノ法
律ヲ以テ支配スルヲ得ヘキヤ否ノ問題ヲ論究セサルヘカラス上告趣旨ヲ閱スルニ
其第一ハ内國法律ノ範圍内ニ支配セラルヘキモノニアラス公訴ハ受理スヘカラス
トノ論ナレトモ法律ハ土地ヲ支配シ兼テ國民ヲ支配スルモノナレハ在外國ノ犯罪
ト雖モ内國ノ法律ヲ以テ支配スルハ立法ノ本旨ナリ而シテ本件ノ事實ハ原判文ニ

因ルニ内國ニ頒布スルノ目的ヲ以テ地ヲ外國ニ假リテ發行シ現ニ之ヲ内國ニ頒布
シタルモノナレハ其効果ヲ得タルハ内國ニ在リ又其犯罪ノ地モ内國ニ在リト云ハ
サル可カラズ然ラハ則チ本案ノ犯罪ハ内國ノ法律ヲ以テ支配ス可キハ當然ニシテ
其發行地ノ在外國ナルカ故チ以テ罪ヲ免カル、ヲ得ス從テ公訴ヲ受理セサルヘカ
ラサルハ論ヲ俟タサルナリ第二内務大臣カ新聞條例第二十一條ニ依リ處分シ尙ホ
刑律ニ依リ處分スルモ決テ一事再理ノ原則ニ悖ルト云フヲ得ス内務大臣カ該條ノ
處分ヲ爲スハ治安ヲ保護シ風俗ヲ維持スルニ必要ナリトスル場合其新聞ノ流布ヲ
防遏セシカ爲メ施行スル方法ニ即チ一ノ行政處分ニ過キサレハ其新聞紙ニシテ
犯罪ノ所爲アリト認ムルトキハ尙ホ刑罰ヲ加フルハ相當ノ處分ニシテ決テ刑罰權
ヲ重行スルモノト云フヲ得サルナリ第三日本ノ法律ニ從フヘキモノトセハ新聞紙
條例第一條第二條第七條第八條第十二條ニ觸ル、點ニ付テモ公訴ヲ起スヘキニ第
十八條第三十二條ニ觸ル、點ニ付公訴ヲ起シタルト云フモ公訴ヲ提起スルハ檢察
官ノ職權ニ在テ被告人カ之ニ侵入スルハ一ノ苦情ヲ唱フルニ過キスシテ上告ノ原
由ト爲スヘキモノニアラス第四日本人外國ニ於テ罪ヲ犯シタルトキ之ヲ適用スヘ
キ正條アラスト云フモ被告人カ犯罪ハ既ニ第一項ニ論スル如ク其効果即チ犯罪ノ地
ハ内國ニアルヲ以テ之レヲ罪スルハ勿論ナリ第五被告人カ身外國ニ在リト雖トモ現

法例

ニ内國ノ公益安寧ヲ害ス可キ所業ヲ内國ニ行フタル者ナレハ即チ其身ハ内國法律ノ範圍内ニ立ツモノニシテ其内地アラサリシト云フヲ以テ刑罰ヲ免カル、ヲ得サルナリ第六其論說紀事惡意ヲ以テシタルニアラサレハ刑罰ヲ受クヘカラスト云フカ如キハ事實上ノ問題ニ屬スルモノナレハ以テ上告ノ原由トナスヲ得ス第七ノ論旨ニ付原判文ヲ閱スルニ檢察官公訴ノ趣旨ヲ按スルニ以下ノ文詞ハ即チ被告カ申立ル趣旨ノ相立タサル理由ヲ說示シタルモノナルコトハ其文詞ニ因テ瞭然タレハ理由ヲ明示セズ審理ヲ盡サスト云フヲ得サルナリ第八其官吏ヲ侮辱シ朝憲ヲ紊亂シ公ニセサル文書類ヲ記載スル等犯法ノ所爲ハ皆新聞紙ノ頒布ヲ以テ其目的ヲ遂ケタルモノナレハ新聞紙頒布ノ所爲ハ即チ該犯法ノ所爲ナリト云ハサルヘカラスト云フヲ得サルナリ(東京輕罪裁判所ノ公訴ヲ受理セサル言渡ニ對シ細下熊野上告事件明治二十一年十二月二十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四條 正文略之

現行刑法ハ陸海軍ノ法律ト其關係ヲ遮斷セリ

第九條 此刑法及ヒ其他罰則ノ條目ハ陸海ノ軍人ニモ亦タ之ヲ適用ス但シ陸海軍ニ關スル特別ノ法律ヲ以テ別段ニ規定シタルモノハ此限ニ非ラズ
第五條 正文畧之

我國罰令處斷法ト同一ニ出テタリ

特別犯ノ事

第十條 特殊ノ犯罪ニ關スル法律ニ於テ現ニ記載セル特別ノ刑名及ヒ或ル職務又ハ職業ニ關スル法律規則中ニ現ニ包含セル懲戒處分ハ此刑法ニ於テ別段規定セサル諸件ニ關シテハ舊ニ依リ之ヲ適用ス可シ然レモ本法ノ總則ハ之ヲ援用スヘシ將來頒布スル所ノ特別ノ法律規則ニ付テモ亦タ該法律ニ抵觸スル明條ヲ載セサルモ亦此總則ヲ援用スヘシ(刑、第五條)

第五條

一號 他ノ法律規則ト名ク可キモノ左ノ如シ
○銃砲取締規則明治五年正月二十八號布告 ○火藥取締規則明治十七年十二月三十一號布告 ○古物商取締條例明治十年二月第五號布告 ○質屋取締條例明治十七年三月九號布告 ○澆入紙製造取締規則明治二十年七月勅令第三十六號 ○爆發物取締罰則明治十七年十二月二十二號布告 ○保安條例明治二十年十二月二十二號布告 ○集會條例明治十三年四月勅令第六十七號 等 其他 九十 七箇ノ罰例アリ

第五條

一號 明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノ左ノ例ニ照シ

承繼法

法例

テ處斷ス(明治十四年十二月
第七十二號布告)

名稱ノ換

第一條 凡ソ懲役ハ十一日以上ヲ以テ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

全上

第二條 凡ソ禁獄及禁錮ハ十一日以上ヲ以テ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

全上

第三條 凡ソ罰金及科料ハ二圓以上ヲ罰金ニ處シ二圓未滿五錢以上ヲ一圓九十五

全上

錢以下ノ科料ニ處ス

全上

第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及答可申付トアル

全上

ハ總テ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

單行法ニ
ハ適用セ
ス

第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

例法ト罰
例ト併發

第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ據テ處斷ス

例ト併發
審理ノ官

第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スルモノト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ處

斷ス

但始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

衛

以上ノ數條ハ刑法頒布以前ノ法律規則ヲ繼續セシメタルニアリ即チ之ヲ相續法若

クハ繼承法ト云フ故ニ刑法頒布以前ノ罰令ニハ必ラス之ヲ引用シ其刑ノ名稱如何

ヲ了知セシメサル可カラサルモノトス

ヲ了知セシメサル可カラサルモノトス

第二章 刑例

第一節 刑名

第六條 正文略之

草第十一條 刑罰ハ主刑及ヒ附加刑トス

主刑ハ必ス裁判所ニ於テ宣告セララル可キモノトス附加刑ハ法律ニ制定シタル區別

ニ從ヒ或ハ裁判所ニテ宣告スルコトアリ或ハ當然主刑ニ附從スルコトアリ(刑第六條

○草第三十九條乃至第五十六條)

第七條 正文略之

草第十二條 重罪ノ主刑ハ左ノ如シ

第一 死刑 第二 無期徒刑 第三 有期徒刑 第四 無期徒刑 第五 有

期流刑 第六 重懲役 第七 輕懲役 第八 重禁獄 第九 輕禁獄

第八條 正文略之

草第十三條 輕罪ノ主刑ハ左ノ如シ

第一 重禁錮 第二 輕禁錮 第三 罰金

第九條 正文略之

草第十四條 違警罪ノ主刑ハ左ノ如シ

第一 拘留 第二 科料

主刑及ヒ
附加刑ノ
事

重罪ノ主

輕罪ノ主

違警罪ノ
主刑

刑例

拘留科料ハ主刑ニシテ附加ス

第九條

一號

拘留科料ノ刑ハ違警罪ノ主刑ニシテ違警罪ニ付テハ法律上附加刑ヲ科スルノ規定ナケレハ只タ其主刑ヲ科スルニ止マルモノナリ然ルニ原裁判所ガ本按被告等カ犯罪ニ對シ刑法第四百一條ヲ適用シ而シテ一等ヲ酌減シ違警罪ノ範圍ニ於テ拘留ノ刑ニ處シナカラ科料ヲ附加シタルハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル不法ノ裁判ナリ(新潟縣裁判所ノ言渡ニ對シ松山國治郎小田林藏瀨賀鹿(藏上告事明治廿年四月廿三日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第十條 正文畧之

草第十五條 附加刑ハ左ノ如シ

- 第一 公權剝奪 第二 公權停止 第三 私權執行ノ停止 第四 監視 第五 罰金 第六 沒收 第七 處刑言渡書ノ公示

第十條 第七十一條

一號

刑法第十條ニ依ルニ罰金ヲ附加刑ノ一ニ規定シアルコト判然ナレバ科料ヲ附加スルコトヲ規定シタル法條ナケレバ体刑ニ附加スルニハ必ス罰金ニ止ムヘキコトハ言ヲ俟タサル處ナリ故ニ減等ノ場合ニアリテモ寡數科料ノ金額内ニ及フモ多數尙ホ罰金

現行刑法ハ第七條

科料ハ附加刑ニアラス

刑罰ニ關スル一般ノ規則ニ關シテ

死刑

ノ全額ヲ下ラサルキハ罰金ヲ以テ附加スヘキモノナリトス依テ科料ヲ附加シタル點ヲ破リ於本院罰金ニ更正ス(宮城控訴院ノ言渡ニ對スル佐藤直藏上告事件明治十九年十二月廿五日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第十一條

草第十六條 各刑ノ執行ノ方法及ヒ細目并ニ受刑者ノ懲戒律ハ一般ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム(刑第十一條)

第二節 主刑處分

第十二條 正文畧之

草第十七條 死刑ハ絞首ヲ以テ之ヲ行フ(草、零〇佛刑、第十二條)其執行ハ刑罰ノ執行ニ關スル一般ノ規則ニ指定セル官吏ノ面前ニ於テ獄内ニ之ヲ爲スモノトス(草、零〇佛刑、第二十六條)

一號

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ典獄刑場ニ立會典獄ヨリ囚人ノ死刑ヲ執行ス可キコトヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ執行セシム但其時限ハ午前十時前トス〇第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サス但立會吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス〇第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ(以上刑法附則第一章)

刑例

錯誤ノ保

第十三條 正文略之

草第十八條 死刑ノ執行ハ治罪法ニ制定セル申明書類ノ外司法卿ノ特命ヲ受ケタル後ニ非スハ之ヲ許サス(刑、第十三條○治罪法第六百廿二條、第六百廿三條)

第十四條 正文畧之

草第十九條 死刑ノ執行ハ國祭日其他適法ノ祭日ニ之ヲ爲ス可カラス(草、零○佛刑、第二十五條)

左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭 孝明天皇祭 紀元節 春季皇靈祭 仁孝天皇祭 神武天皇祭 六月大祓 秋季皇靈祭 神宮新嘗祭 天長節 後桃園天皇祭 新嘗祭 光格天皇祭 十二月祓(刑法附則第四條)

第十五條 正文略之

婦女懷胎ナリト申立テタル事

草第二十條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ノ旨ヲ申立ツルキハ執行ヲ停止シ其分娩後又ハ醫士二人ニ於テ其懷胎ト認メサル旨ヲ證シタル後ニ非ラサレハ死刑ヲ行ハス(草、零○佛刑、第二十七條)

更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行スヘシ(刑法附則第五條)

第十六條 正文略之

死刑ノ遺骸

草第二十一條 死刑ノ遺骸ハ親族請フ者アレハ直チニ之ニ下付ス但シ其親族ハ毫モ儀式ヲ用フルトナク速カニ之ヲ埋葬ス可シ(佛刑、第十四條)

第十七條 正文略之

徒刑

草第二十二條 徒刑ニ處セラレタル男子ハ無期有期ヲ分タス政府ヨリ定メタル日本ノ島地ニ於テ其刑ヲ受クヘシ

第十八條 全上

該徒刑者ハ至重ノ作業ニ使役セラルヘシ(草、零○佛刑、第十五條)

徒刑ニ處セラレタル婦女ハ内地ニ設置セル特別ノ監獄ニ拘禁セラル可シ

同上

該婦女ハ婦女相當ノ定役ニ服セシム

第十九條 正文略之

刑例

同上

草第二十四條 總テ無期有期ヲ分タス徒刑四年齡滿六十歲ニ至リタル者ハ其刑期ノ殘餘禁錮ノ定役ニノミ服スヘキモノトス
宣告ノ際既ニ六十歲ニ滿ツル者亦タ右同様ニ刑ヲ執行ス(草、零〇佛刑、第七十條、第七十一條、第七十二條)

四四

流刑

第二十條 正文略之

草第二十五條 流刑ニ處セザレタル者ハ無期有期ヲ分タス政府ヨリ定メタル日本ノ島地ニ押送セララル可シ

流刑囚ハ特別ノ監獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

該囚ハ獄則ニ依循シ藝術又ハ力役ニ從事スルコトヲ許ス(刑、零〇草、零〇佛刑、第十七條)

同上

草第二十六條 有期流刑ノ期限ハ十六年以上二十年以下トス

第二十一條 正文略之

草第二十七條 無期流刑ニ付テハ刑ノ執行五年ノ後又有期流刑ニ付テハ三年ノ後政府ノ決定ニ依リ受刑者其刑ノ滿期ニ至ルマテ島地ニ於テ地ヲ限リ別々ニ居住スルコトヲ聽許セララル、ナ得

流刑寛恕

此時ヨリ政府ハ其親族ニ同居スルノ許可ヲ與フルコトヲ得又政府ハ之ヲシテ耕作ニ

從事セシムルカ爲メ土地ノ使用ヲ許與スルコトヲ得
此等ノ准許可及ヒ許與ハ其者一人ニ限ルモノトシ懲戒律若クハ規則ノ違反アルニ於テハ何時ニテモ取消スコトヲ得ルモノトス(刑、零〇草、零〇佛千八百五十四年五月三十一日ノ法律)

懲役

第二十二條 正文略之

草第二十八條 懲役ハ國內ノ懲役場ニ於テ之ヲ受ケシム

懲役ニ處セラレタル者ハ該場ニ於テ苦役ニ服スヘキモノトス

重懲役ノ期限ハ一年以上十五年以下トス

輕懲役ハ六年以上十年以下トス

懲役ニ處セラレタル者滿六十歲ニ至リタルハ第二十四條ヲ適用ス可シ(刑、第二十二條〇草、零〇佛刑、第二十一條)

第二十二條

一號

範圍ヲ定ム可キ法條ハ判文ニ示サレタルモ瑕瑾

刑法第二十二條ハ刑法ノ總則ニシテ刑期ノ範圍ヲ定メタルモノニテ犯罪ヲ罰スヘキ正條ニアラサレハ其言渡シタル刑期ノ該條ノ範圍ニアレハ特ニ之レヲ掲ケサルモ不備ノ裁判ト云フヲ得ス(千葉重罪裁判所ノ言渡シニ對シ平野辰次郎上告事(件明治二十一年七月七日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

刑例

四五

第二十二條

二號

刑法第二十二條ヲ適用シ重懲役ノ範圍ヲ示サ、ルハ不法ナリト云フモ該條ノ如キハ總則ニ過キサレハ別ニ之ヲ明示スルヲ要セサルモノナリ
(千葉重罪裁判所ノ言渡ニ對シ小林慶藏上告事件明治廿一年六月廿九日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二十三條 正文略之

禁獄

草第二十九條 禁獄ノ刑ハ日本内地ニ設ケタル特別ノ監獄ニ於テ之ヲ受ケシメ定役ニ服セシメス

同上寛恕

重禁獄ノ期限ハ十一年以上十五年以下トス
輕禁獄ノ期限ハ六年以上十年以下トス(草、零〇佛刑、第二十九條)
草第三十條 重禁獄ナレハ二年又輕禁獄ナレハ一年ノ後受刑者政府へ請願シテ其刑期ノ殘餘中流刑ノ爲メ設ケタル島地ニ移ルコトヲ得
此場合ニ於テハ第二十七條ヲ適用スルコトヲ得(刑、零〇草、第四十六條)

禁錮

第二十四條 正文略之

草第三十一條 重禁錮ハ禁錮場ト稱スル特別ノ監獄内ニ於テ受ケシムルモノトス
輕禁錮ハ特別ノ監獄内又ハ其獄内ノ別檻ニ於テ之ヲ受ケシムルモノトス

強令又ハ
隨意服役
ノ収益金

第二十五條 正文略之

法律ハ各犯罪ニ就キ重輕禁錮ノ最短期及ヒ最長期ヲ定ムルニ十一日以上五年以下ノ間ニ於テ但シ第八十三條ニ豫定セル場合ハ此限ニ非ラス(草、零〇佛刑、第四十條)
草第三十二條 總テ重罪刑若クハ輕罪刑ノ定役アル場合ニ於テハ其服役ノ直接ノ収益金若クハ官署ニテ査定セル其估計額ヲ平均ニ三分シ其二ヲ獄舍ノ費用ニ供シ其一ヲ受刑者又ハ其親族ノ爲メ領置シテ刑罰ノ執行ニ關スル一般ノ規則ニ依循シ使用ス可シ

罰金

第二十六條 正文略之

草第三十三條 罰金ハ二圓以上十圓爲ス
法律ハ各犯罪ニ就キ其最多額ト其最少額トヲ定ムヘシ

不納罰金
ノ變換

第二十七條 正文略之

草第三十四條 裁判確定ノ日ヨリ一日以内ニ罰金ノ全額ヲ納完セサルキハ一圓ヲ一日ニ折算シ其罰金ノ全額又ハ其不納ノ殘額ニ達スルマテ之ヲ輕禁錮ニ換フコトヲ得一圓以下ト雖モ尙ホ一日ニ計算ス

刑例

受刑者ノ拿捕ハ政府ノ目代ノ請求ニ因リ裁判所長ノ命令ヲ待テ之ヲ行フ〔又裁判所長ハ之ヲ拒絕スルヲ得〕

〔裁判所長ハ何時ニテモ政府ノ目代ノ請求若クハ受刑者ノ請願ニ因リ其命令ヲ廢棄スルヲ得〕

〔受刑者一タヒ該禁錮ノ解放ヲ受ケタルニ於テハ再ヒ同一ノ罰金ニ換ヘテ禁錮ニ處セラル、ヲ得ス〕

他人ノ辨濟

受刑者其親族其他何人ニテモ罰金ノ全額又ハ其不納ノ殘額ヨリ經過シタル禁錮ノ日數タケ金額ノ扣除ヲ爲シテ之ヲ辨濟スルキハ常ニ該禁錮ヲ止息セシムルヲ得〔何レノ場合ニ於テモ罰金ニ代易シタル禁錮ノ期限ハ二年ヨリ超過スルヲ得ス〕

〔刑、第二十七條○草、零○佛刑、第五十二條、第五十三條、千八百六十七年七月二十二日ノ法律、千八百七十一年十二月十九日ノ法律〕

合併又ハ附加シタル罰金

草、第二十五條 自由剝奪ノ刑ニ合併又ハ附加シテ罰金ヲ言渡シタルキハ主刑ノ終リタル後ニ非ラスンハ不納ノ罰金ニ禁錮ノ代易ヲ行フヲ能ハス〔刑、零〕

第二十八條 正文略之

拘留

草、第二十六條 拘留ノ刑ハ拘留場ト稱スル特別ノ監獄ニ於テ之ヲ受ケシム法律ハ各違警罪ノ種類ニ就キ拘留ノ最長期及ヒ短期ヲ定ムルニ一日以上十日以

下ノ間ニ於テス〔但シ第八十五條ニ記スル所ハ此限ニ在ラス〕〔刑、第二十八條○草、零○佛刑、第四百六十五條〕

第二十八條 第七十一條

一號

長期禁錮ニシテ短期徒刑ナキハ未タ減盛ト云フ可ラ

刑法第七十一條ニヨリ禁錮ヲ減シテ科料ニ下シタルキハ尙ホ長期短期ノ四分ノ一ヲ減シタル範圍内ニ於テ處斷ス可キモ之ヲ全法第二十八條ニ依リ一日トナスカ如キハ許サ、ルモノトス何トナレハ全法第七十一條ハ其二十八條ヲ受ケタル條目ニアラスシテ單獨シテ拘留科料ニ處スルヲ許シタルニ過キサレハナリ〔千葉輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ中村金藏カ上告事件明治十九年八月廿七日大審院判決〕

第二十九條 正文略之

科料

草、第三十七條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下トス法律ハ各違警罪ニ付キ其最額ト最少額トヲ定ムヘシ〔刑、第二十九條○草、零○佛刑、第四百六十六條〕

第三十條 正文略之

科料ヲ拘留ニ變換スル事

草、第三十八條 裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ科料ヲ納完セサルキハ第三十四條及ヒ第三十五條ニ制定セル方法ニ從ヒ不納ノ一圓ヲ拘留一日ニ折算シ之ヲ拘留ニ換フ

刑例

一ヲ得一圓以下ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス(但シ拘留ハ此理山ニ據リテ十五日ヨリ超過スルコトヲ得ス)

(輕罪裁判所ニテ科料ヲ言渡シタルキト雖モ受刑者拿捕ノ命令ハ違警罪裁判官ヨリ發スルモノトス)刑第三十條○草零○佛刑第四百六十七條

第三節 附加刑處分

第三十一條 正文略之

公權剝奪

草第三十九條 公權剝奪ハ受刑者ニ對シ左ノ事項ヲ來ス

第一 一切ノ政權其他性質若クハ法律上日本臣民ノミ特有スル諸權利ノ褫奪

第二 政府ノ一切ノ官職及ヒ公務ノ免黜及ヒ將來ノ奪權

第三 一切ノ貴號位記及ヒ本國ノ勳章ノ剝奪

第四 日本國內ニ於テ公然勳章ヲ帶フルノ禁止外國ノ勳章ヲリトモ亦之ヲ禁

ス

第五 日本ノ陸海軍ニ從事シ及ヒ兵器ヲ帶フルノ無能力

第六 他人ノ利害ニ關スル公私ノ證書ニ證人トシテ捺印署名スルノ無能力及ヒ

法廷ニ於テ單ニ事實參考ニ供スルカ爲メノ外證人タルノ無能力

第七 無能力ナル人ノ後見人若クハ監察人タルノ無能力但シ親族ノ認可ヲ得テ自己ノ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

第八 分散會社組合ノ財産其他如何ナル共有財産ニテモ其管財人又ハ管理人タルノ無能力

第九 私立タリトモ學校ノ長及ヒ教師又ハ學監タルノ無能力(刑第三十一條○

草零○佛刑第三十四條)

○勳章年金褫奪停止(明治十六年六月二十二號布告)第三十一條

一號

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ

其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スルモノ重罪輕罪ノ訴ヲ受テ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ

佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受ルコトヲ得ス

○勳章年金褫奪及停止取扱手續(十九年七月十九號令第十九號)

二號

明治十六年九月二十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルコト左ノ如シ

勳章年金褫奪及停止取扱手續

因褫奪ノ原

全上犯罪ニ基因セシ

刑例

榮譽ノ汚辱
犯罪

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、時ハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者

但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨル

第二項 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

第三項 懲戒例及免黜條例ニヨリ免官セラレタル者

褫奪手續

第四項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキハ裁判確定ノ後裁判

管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局

總裁ヘ具申スベシ其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十二

條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依リ處分ス

全

第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所轄長官又ハ地方官ヨ

リ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申ス可シ

取調

第四條 賞勳局總裁ハ其具申ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレタルモノ及ヒ第一條

第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ議定官ノ會議ニ於テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫

奪スベキ者ハ奏請ス

裁可

第五條 褫奪ノ裁可アリタル時ハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作り褫奪ノ具申ヲ爲シタ

通知

ル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム

褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヘ通知ヲ可シ

進級者ナ

第六條 勳位進級セシ者ナルキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪ス可シ年金票モ亦同シ

褫奪勳章

第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨリ賞勳局ヘ還納ス可

返納

シ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係ルトキハ其宣告書寫ヲ添フ可シ

刑事ノ被

第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留セラレタルトキハ其年月日及事

告トナリ

由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申ス

可シ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルトキハ其事狀ヲ詳記シ

テ之ヲ申告ス可シ

全上

第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ其訴ヲ受ケスト雖モ現ニ拘留セラレタルトキハ檢察

官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ具申ス可シ

外國ノ勳

第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキハ亦總テ此手續ニ準據ス可シ

承前

第三十二條 正文略之

草第四十條 凡テ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ當然前條ニ列記セル諸權利ヲ終身

剝奪セラル、モノトス(草、零〇佛刑、第二十八條)

刑例

第三十三條 正文略之

承前

草第四十一條 (重禁錮ノ言渡ハ當然受刑者現任ノ官職及ヒ公務ノ褫奪ヲ來スモノトス)

〔輕禁錮ハ其刑期間右ノ權利ノ停止ヲ來スノミ〕(刑、零〇草、零〇佛刑、第四十二條)

公權停止

草第四十二條 其他第三十九條ニ記載セル諸權利ハ第二項ニ掲ケタルモノヲ除キ重輕禁錮ノ刑期間當然停止セラルヘキモノトス(草、零〇佛刑、第四十二條)

第三十四條 正文略之

承前

草第四十三條 裁判所ハ右ノ外犯罪ノ性質ト情狀トニ依リ各本條ニ定メタル禁錮ノ刑期ニ等シキ時間右諸權利ノ全部又ハ幾分ノ停止ヲ増展スルコトヲ得

此停止ノ期限ハ禁錮ノ刑終リタル時ヨリ始メテ起算スルモノトス(草、零〇佛刑、第四十二條)

第三十五條 正文略之

法律上ノ禁止

草第四十四條 凡テ自由剝奪ノ重罪刑ノ言渡ハ刑期間當然私權執行ノ停止即チ禁止ヲ來ス

此法律上ノ禁治産ハ死刑ニ處セラレタル者ニモ亦タ其執行ニ至ルマテ之ヲ及ホスモノトス(佛刑、第二十九條、第三十條)

附後見

草第四十五條 重罪囚ノ財産ハ民事裁判所ニ於テ其親族會議及ヒ該囚ノ意見ヲ聞キタル上後見人ヲ命ジ之ヲシテ管理セシム

受刑者ノ法律上ノ禁治産ニ關スル其他ノ規則ハ民法ニ制定ス(刑、零〇民法草案、第三百四十條、第五百六十七條)

第三十六條 正文略之

寬典

草第四十六條 無期有期ヲ問ハス流刑ニ處セラレタル者第二十七條ニ規定シタル幽閉ノ時間ヲ經過シタルキハ政府ヨリ其者一人ニ限り私權ノ全部又ハ幾分ノ執行ヲ聽許スルコトヲ得

禁獄囚ニシテ第三十條ノ利益ヲ得タル者亦同シ(刑、第三十六條〇草、第六十六條〇佛千八百五十四年五月三十一日ノ法律)

第三十七條 正文略之

承前

草第四十八條 有期ノ重罪刑ニ處セラレタル者ハ法律ニ制定セル本刑長期ノ半ニ等シキ時間當然監視ニ附ス

第三十八條 正文略之

承前

草第四十九條 監視ハ法律ニ特定セル場合ノ外禁錮ニ附加スルコトヲ得ス(草、第三百三十三條、第四百七十七條、第五百五十七條、第九十三條、第九十六條、第二百二十四

刑例

條、第四百二十二條、第四百二十八條、第四百五十一條、第四百五十八條○佛刑、第五十條

第三十九條 正文略之

草第四十七條 無期ノ刑ニ處セラレタル者恩赦若クハ刑ノ期滿免除アリタル場合ニ於テハ當然十五年間ノ監獄ニ附ス(草、零○佛刑、第四十四條乃至第四十九條、千八百七十四年一月二十三日ノ法律)

第四十條 正文略之

承前起算ノ點

草第五十條 凡テ法律又ハ裁判ニ依リ重罪若クハ輕罪刑ニ監視ヲ附シタル場合ニ於テハ主刑ノ終リタル日ヨリ其期限ヲ起算ス
主刑ノ免除及ヒ不問宥恕ノ場合ニ於テ唯一ノ刑トシテ監視ヲ言渡シタルキハ裁判言渡ノ廢棄ス可カラサルモノトナリタル日ヨリ其期限ヲ起算ス

承前外國人ノ事放逐

草第五十一條 監視ニ附セラレタル外國人ハ政府ノ決定ニ因リ何時ニテモ帝國外ニ放逐セラレ、コトヲ得(刑、零○草、零○佛、千八百四十九年十二月三日ノ法律、第七條)

第四十一條 正文略之

承前停止再行

草第五十二條 監視ハ其情狀ニ依リ受刑者ノ行狀ニ從ヒ行政處分ヲ以テ停止スル

承前監獄則ニ關ル事

一ヲ得又再行スルコトヲ得(刑、第四十一條)
草第五十三條 監視ニ附着セル効力及ヒ之ヲ停止シ及ヒ再行スルノ諸條件ハ刑罰ノ執行ニ關スル一般ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム(刑、零)

第四十二條 正文略之

附加ノ罰金

草第五十四條 罰金ハ重罪刑ニ附加シテ言渡スコトヲ得但シ法律ノ特別ノ條例ニ據ルニ非スンハ之ヲ附加スルヲ得ス(草、第三百三十四條、第三百三十五條、第三百三十六條)其納完ナキニ於テハ第三十四條及ヒ第三十五條ニ依テ輕禁錮ニ換フコトヲ得(刑、第四十二條)

第四十三條 正文略之

沒收

草第五十五條 沒收ハ決シテ當然行ハル、モノニ非ラス左ノ物件ハ裁判所ヨリ宣告シテ之ヲ沒收スルヲ要ス

第一 其何人ニ屬スルヲ問ハス法律ニ反シテ製作造出又ハ占有シタル物件

第二 犯罪ヲ行フノ用ニ供シタル物件
第三 犯罪ニ因リ直接ニ得有シ又ハ獲得シタル物件但シ第二項及ヒ本項ノ場合ニ於テハ其所有權ノ受刑者ニ屬シ又ハ其所有者ノ分明ナラサルキニ非ラサレハ

刑例

沒收スルコトヲ得ス(草、零〇佛刑、第十一條、第四百七十條)
以上記スル所ハ總テ法律ノ別段ノ條項ニ於テ命シタル其他特別ノ沒收ノ妨ケト
ナル可カラス(刑、第四十三條、第四十四條〇草、第九十五條、第二百二十七條、第
二百九十四條、第三百二十三條)

第四十三條
第二百五十六條

一號

私擅營業
沒收セス
刑法第二百五十六條ノ罪ハ醫ヲ爲スヲ以テ犯罪トスルニアラスシテ官許ヲ得サル
ヲ以テ犯罪ヲ成立シタルモノナリ故ニ其施用ニ供シタル藥ノ關係アラサル
コト明ナレバ原裁判所カ之ヲ沒收シタルハ擬律ノ錯誤ナリトス(高知輕罪裁判所ノ言渡
上告事件明治十九年九月廿八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十三條
第七十一條

二號

家宅侵入
沒收セス
刑法第七十一條ノ兇器ヲ携帶シテ人家ニ侵入シタルカ如キハ其兇器ハ加重ノ事
實アル罪体ナリトス故ニ刑法第四十三條第三項ノ犯罪ノ用ニ供シタルモノト云フ
ヲ得サレハ沒收スルコトヲ得ス(名古屋輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ村上數馬上告事件
明治十九年十一月十七日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十四條

不當ノ沒
収ナルハ
被害ノ人
利害ニ關
セサルハ
ハ爭フコ
ト得ス

三號

今其刑法第四十四條ヲ適用シテ犯罪ノ用ニ供セサル物件ヲ沒收シタルハ不當ナル
コト免カレ然レモ差押物件中所有主ナキモノニ對シ沒收ノ處分ヲ爲シタルハ被
告人ノ利害ニ毫モ影響ヲ及ホス可キモノニアラサレハ被告人ノ論告ニヨリテ原裁
判ヲ破毀スルノ限リニアラス(橫濱輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ本間傳兵衛上告事件
明治廿二年一月三十日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十三條

四號

偽造ノ受取書ハ犯罪ノ用ニ供シタルニアラスシテ罪體ヲ爲ス原質ナレハ刑法第四
十三條ニ因リ沒收シタルハ錯誤ナリト論告スレトモ假令罪體ト認ムルモ不正ニ成
立タル應禁物ナレハ均シク刑法第四十三條ニ從ヒ沒收ス可キコト當然ニシテ敢テ不
當ナリトスルコトヲ得ス(富山重罪裁判所ノ言渡ニ對シ德田伊右衛門章間皆吉號井字三
郎等が上告事件明治二十一年二月三日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十三條

五號

偽造ノ証書ヲ行使シ財ヲ得タルハ該証書ハ犯罪ノ用ニ供シタルモノナレハ刑法
第四十三條第三項ニ依リ之ヲ沒收スルモノトス(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ龜井義人上告
事件明治十九年四月廿二日大審院ニ於テ破
棄ノ判決)

偽造ノ證
書ハアル
場合ニ沒
収ス

偽造證書
ハ應禁物
トシテ沒
収ス可シ

刑例

案スルニ前者ト后者ト判旨ノ相抵觸シタルモノ、如シト雖モ決シテ然ルニアラザルナリ何トナレハ前者ハ財ヲ得サルニ付テ判例ニシテ后者ハ財即チ詐欺取財ノ材料トナリタルノ區別アルモノナレハナリ併シ一括シテ應禁物ト看做ノ是ナルニ如カラサルナリ

第四十四條 治罪法第四百十條第十項

六號

被告人ハ無檢印ノ尺度ヲ偽造シ店頭ニ陳列シテ販賣ニ供シ内二本ヲ淺川幸太郎ヘ金拾壹錢ニテ販賣シタル者ト認メアリ已ニ販賣スル爲メ偽造シタル事實ヲ認メタレハ被告人ノ職業如何ニ論ナク均シク禁制物トシテ刑法第四十四條ニ依リ沒收ノ言渡ヲ爲サル可ラサルニ原裁判茲ニ出サルハ上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリ(長野縣裁判所本支廳ノ言渡シニ對シ吉野鐵重ノ上告事件明治二十一年七月十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十三條

七號

原判文ニ兩手ヲ以テ今朝次郎ノ咽喉ヲ押シタル處今朝次郎ハ八十余年ノ老人ナルヲ以テ直ニ死シタルヲ被告ハ猶自己ノ着用シタル褌ヲ以テ今朝次郎ノ首ヲ絞メ云々トアルニ因レハ死シタルモ仍ホ蘇生等ヲ慮リ褌ヲ以テ引キ絞メタル事實ノ説明

偽造ノ尺
物ハ禁制
ニ何人ノ
所有ヲ問
ス没收ス

殺害后ニ
褌ヲ以テ
首ヲ絞メ
タルハ尙
ホ沒收ス
可キ物件

ト解釋ス可ケレハ其褌ハ犯罪ノ用ニ供シタル者ト論セサル可ラス故ニ沒收スルハ當然ナリ第三點ハ原判文ニ野村角次ヲ曾テ恨ミノ筋アルヲ以テ共ニ殺害セシ犯人ナリト誣告シ云々ト明示アレハ誣告罪ヲ構成シタル事實ヲ明示シタルモノニシテ不法ト云フヲ得ス(宮崎重罪裁判所ノ言渡シニ對シ柏田若助上告事件明治二十一年十月五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十三條

八號

原判文ニ依ルニ同村加藤元次宅家外土間ノ席ニ入レアリタル小麥壹斗五升許ヲ手ヲ以テ所持ノ袋ニ入レテ窃取シ立歸ラントスル際云々トアリテ被告カ竊盜ノ目的ヲ以テ此袋ヲ窃取物ノ容器ニ供センカ爲メ携帶シ即チ其用ニ供シタル事實ハ一目了然タルハ宜ク沒收ス可キモノナリ然ルニ原裁判所カ還付ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律ノ錯誤タルヲ免レンス(福岡輕罪裁判所ノ言渡シニ對シ松尾タケ上告事件明治廿一年九月十八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十四條 第二百八條

九號

木判壹個朱肉少々ハ被告論告スル如ク金藤清太郎ヨリ渡サレタルモノニシテ被告カ所有ニ屬スル物件ニ非サルコトハ公判始末書ニ因テ明ラカナレハ宜ク金藤清太郎ニ還付ノ言渡ヲ爲スベキニ之ヲ被告ノ所有トシ沒收シタルハ不法ト云ハサル可

不當ノ沒
収

竊盜ノ用
ニ供シタ
ル袋ハ罪
ニテ没收
ス可キ物
件ナリ

刑例

カラス(福島輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ渡邊彦助上告事件)
明治廿一年十一月廿日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第四十三條

十號

豫審判事
ハ刑ヲ適
用スルモ
ノニアル
ス故ニ没
收ノ言渡
ヲ爲シタ
ルハ越權
ナリ

會議局ハ事實ノ覆審ヲ爲ス所ナルヲ以テ豫審終結言渡ニ對シ故障アリタル時ハ其
言渡ノ全体ニ付キ審理ヲ遂ケ判決ヲ爲ス可キハ論ヲ俟タサル所ナリ今豫審終結言
渡ヲ閱スルニ其但書ニ差押ヘタル鎗穗ハ所有主ナキヲ以テ刑法第四十三條第四十
四條ニ照シ沒收ストアリテ豫審判事カ職權外ニ屬スル沒收ノ刑ヲ言渡シタルハ越
權ノ處分ナルヲ明ラカナリ然ルニ會議局ハ此點ニ付毫モ審理ヲ遂ケス豫審終結言
渡ノ全部ヲ認可スト言渡シタルハ是亦越權ノ處分ニ出テタル不法ノ判決ナリ(私前
裁判所ノ言渡ニ對シ武田元吉上告事件明治
廿二年四月卅日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十三條

十一號

再貼用ノ
印紙

再貼用ニ係ル印紙ハ刑法第四十三條第一項ノ所謂禁制シタル物件ナルヲ以テ之ヲ
沒收ス可キモノナリトス(裁判所ノ言渡ニ對スル森山代五郎カ
上告事件明治二十年九月廿日大審院判決)

第四十三條第一項

十二號

偽造貨幣
ハ法律ニ
禁制シタ
ル物件ナ
リ

被告ノ所爲タル真正ノ銀貨ヲ烏賊ノ甲ニ寫シ其甲ニ錫ヲ鑄込ミテ銀貨ヲ偽造セシ
モノナレハ真正ノ銀貨ハ直接ニ犯罪ノ用ニ供シタルモノト云フヘカラス又偽造銀
貨ノ如キニ至リテハ元ヨリ犯罪ノ用ニ供シタルモノト云フヘカラス法律ニ於テ禁
制シタル物件ナルベキニ是等ノ物件ヲ犯罪ノ用ニ供シタルモノトシ沒收セシハ不
當ノ處分ナリ(名古屋重罪裁判所ノ言渡ニ對シ鈴木房太郎上告事
件明治二十年三月十九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十三條

十三號

無罪ノ言
渡ニ被告
人ノ上告
スルヲ得
スルナリ
無罪ト判
決シテ上
告セシカ
ラ没收セ
シテ言渡
裁判

被告人カ上訴ヲ爲スノ場合ハ有罪ノ言渡ヲ受ケタル時ニ限レルコトハ法理ノ原則ニ
シテ本件ノ如キ無罪ノ言渡シヲ受ケタル時ハ上告スルコトヲ得サル者トス又治罪法
第四百一條ニ定メタル証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲナストハ罪スヘキ所爲
ナレト罪譴スルニ足ラスト云フノ謂ヒニ非スシテ罪ナキ者ニ適用ス可キ律意ナレ
ハ原裁判所カ之ヲ適用シタルハ當然ナリ到底事實ノ認定法律ノ適用ニ就テハ上告
ノ趣旨不相立ト雖モ原裁判所カ但書ニ掲ケタル押收セシ書類ノ中云々沒收スト判
定シタルハ其沒收ス可キ法律ノ理由ヲ示サハルノミナラス被告人ハ罪ヲ構成セス
無罪ナリト判決シナカラ漫ニ沒收ノ言渡シヲ爲シタルハ擬律ノ錯誤タルヲ免カレ
スシテ上告ノ理由アルモノトス依テ治罪法第四百三十一條ニ原キ但書ノ一部ヲ破

刑例

毀シ本院ニ於テ直ニ裁判スルコト左ノ如シ
原判文但書押收セシ書類ノ中虛偽ニ成立タル證書ハ假令犯罪ハ豫備中ニ在リト雖
モ下付スヘキモノニ無之依テ沒收ストトノ言渡シヲ取消シ押收セシ書類ハ差出人ニ
還付ス(福岡重罪裁判所ノ言渡シニ對シ田川又次郎上告事件
件明治二十一年二月九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十三條

十四號

犯罪ノ用ニ供シタル小刀ハ刑法第四十四條ニ照ラシ沒收ストアリテ其前條即チ全
第四十三條ヲ揭ケサルハ其當ヲ得スト雖トモ已ニ犯罪ノ用ニ供シタル小刀ト云ヒ
且ツ刑法第四十四條ヲ適用シアル上ハ結局第四十三條ニ背キタルモノニ非レハ特
ニ其法條ヲ揭ケサリシトテ破毀スヘキ瑕瑾ニアラス(宇都宮重罪ノ言渡シ金子與惣次
上告事件明治廿一年七月七日棄却ノ
決判)

第四十三條
第四十四條

十五號

偽造銀貨并ニ犯罪ノ用ニ供シタル花鈔外六點ハ刑法第四十三條第四十四條ニ依リ
官ニ沒收シ犯罪ニ因テ得タル金五圓三拾八錢六厘ハ各被害者ニ還付シ被害者分明

偽造貨幣
全器械全
益ノ沒收

ナラサル者ハ之ヲ官ニ領置ス可キ者トス(新潟重罪裁判所ノ言渡シニ對シ佐藤佐喜藏上告事件
明治二十一年十二月廿五日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四節 徵償處分

第四十五條 正文略之

草第五十七條 總テ刑事ニ於テハ訴訟費用ノ全部又ハ幾部ヲ受刑者ノ負擔ト爲ス
(日本治罪法、第三百五十八條、第五百三十條、第五百八十條、第六百三十五條○佛治
罪法第六十二條、第九十四條、第二百六十八條)
其額ハ別ニ訴訟入費規則ヲ以テ之ヲ定ム(刑、第四十五條)

第四十五條

一號

被告人無罪ニ歸スレハ裁判費用ハ官費ニ相立ツヘキコトハ法規ノ定ムル所ナリ然
ルニ原裁判ハ無罪人ニ負擔セシメタルハ最モ不法ノ裁判ナリトス(札幌重罪ノ言渡シ
治二十一年二月廿一日大
審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十六條 正文略之

草第五十八條 處刑及ヒ放免ハ犯罪ノ正犯又ハ從犯ニ對シ或ハ民事担当者ニ對シ
被害者ヨリ贓物ノ返還損害ノ賠補及ヒ民事ノ賠補ヲ要求スルノ障礙ト爲ルコトナシ
(刑、第四十六條○草零○佛刑、第十條)

贓物ノ返
還及民事
ノ賠補

裁判ノ費
用

訴訟費用

刑例

重罪裁判所又ハ違警罪裁判所ハ民法ノ規則ニ照準シテ此點ヲ判決ス可シ(刑、第四十八條○治罪法、第七條、第三百五十三條、第三百五十七條、第三百八十九條)

第四十七條 正文略之

草第五十九條 總テ同一ノ犯罪、共犯又ハ從犯タルノ言渡ヲ受ケ若クハ該犯罪ノ民事擔當人タルノ言渡ヲ受ケタル諸人ハ當然言渡ノ一事ニ因リテ國庫及ヒ被害者ニ償還スヘキ裁判費用并ニ贓物ノ返還其他民事ノ賠償ヲ連帶シテ擔當ス可シ(刑、第四十七條○草零○佛刑、第五十五條)

承前連帶
裁判所ノ
權力

經濟ノ順
序

然レモ裁判所ハ罪責若クハ一身上ノ責任ノ差異ニ據リ受刑者若クハ民事擔當人ノ一人若クハ數人ニ對シ費用或ハ民事ノ賠償ヲ解除シ又ハ制限スルコトヲ得但シ(各人ノ部分及ヒ)此判決ノ理由ヲ指示スヘシ(刑、零) 草第六十條 受刑者或ハ民事擔當人ノ財産不足ノ場合ニ於テハ以下ノ順序ニ從ヒ犯罪ノ爲メ償還スヘキ金額ヲ辨濟ス可シ

- 第一 國庫ニ償還ス可キ裁判費用
- 第二 被害者ニ償還ス可キ裁判費用及ヒ其他民事ノ賠償
- 第三 罰金(刑、零○草零○佛刑、第五十四條)

第四十七條

共犯人ハ
私訴ヲ連
帶シテ償
却ス

一號 預リシ金四百五十一圓ハ差出シ其外一錢モ費消セシコナキニ付私訴裁判ニ服スル能ハスト云フモ原裁判官ニ於テ信之及ヒ上告人カ共犯者タル事實ヲ認メ連帶シテ償却スヘシト判定シタルハ失當ナリト云フヲ得ス(金澤重罪裁判所ノ言渡シニ對シ能路虎象於テ破毀ノ判決)

第四十八條 正文略之

第四十八條

一號 贓金ヲ以テ買得シタル毛布ノ如キハ禁制物ニ非ス若クハ犯罪ニ由テ得タルモノニ非レハ即チ其買得者ノ所有物ニ外ナラス故ニ之ヲ以テ損害ノ代償物トナシ被害者ニ下付スル場合ハ特別否ラサレハ其買得者ニ下付スヘキハ勿論ナリ(京都輕罪裁判所川口宇市郎上告事件明治二十一年四月二十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條

二號 贓物犯人ノ手ニアル時ハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ被害者ニ還付スヘキ言渡ヲ爲スヘキナレモ本按ノ如ク贓物轉シテ已ニ他人ノ手ニ在テ被害者ニ於テ之カ還

刑例

犯人ノ手
ニ存在セ
サル贓物

贓金ヲ以
テ買得シ
タル物件

付ヲ請求セサル場合ハ現保有者ニ還付スルハ當然ノコナリトス(甲府輕罪裁判所ノ言渡
彦右衛門上告事件明治廿一年七月廿日大審院ニ於テ棄却ノ判決)
第四十八條

三號 違法ノ還付處分
三號 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ請求ナシト雖モ直ニ之ヲ被害者ニ還付ス可キ事ハ刑法第
四十八條ニ規定シタル所ナレハ被告人共カ差押ヘラレタル薪ハ被害者ヘ還付ス可
キモノナルヤ論ヲ俟タス然ルニ原裁判所ニ於テ被告カ差押サヘラレタル薪ハ右被
差押人ニ還付スト言渡シタルハ失當ノ裁判ナリトス(松山輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ西田房太
院ニ於テ破
毀ノ判決)

違法ノ還付處分

第四十八條

四號

被害者ヨリ損害賠償ノ請求アリタル時ハ被告ノ所持品ヲ以テ其賠償ニ供スルハ當
然ナルモ贓金ヲ以テ請求セシ物品ナリトテ直チニ現在ノ贓物ナリト爲シ刑法第四
十八條ニ照シ被害者ノ請求ヲ待タスシテ還付ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律ノ錯誤タル
ヲ免カレス(千葉重罪裁判所ノ言渡ニ對シ小林政藏ガ上告
事件明治二十一年七月六日大審院ニ於テ破毀)

第四十八條

五號

凡ソ贓物ト稱スルモノハ單ニ強盜竊ニ依テ得タル物件ノミニ限ラス苟モ犯罪ニ關
スル物件アルキハ總テ贓物ト謂フヲ得ヘキモノナリ而シテ刑法附則第五十六條ニ
贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取リタル者其贓物現在スルトキハ還給ヲ拒ムコトヲ
得ス但典物トシテ受取タルモノハ典主ニ對シ賠償ヲ求ムルコトヲ得トアレハ則チ
被害者タル物件ノ所有者ハ其物件ノ現在スル質取主ニ對シ直チニ之カ還給ヲ請求
シ得ヘキトハ當然ナリ然ルニ原裁判所ハ公訴被告人與村孫作カ借用物費消ノ犯罪
ニ關スル贓物ノ質取主高橋五郎兵衛ノ手ニ現在スルノ事實ヲ認メナカラ盜罪ニア
ラサレハ贓物ト云フヲ得サルヲ以テ刑法附則第五十六條ヲ適用スヘキモノニアラ
ストシ民事原告人ノ請求ヲ排斥シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトス(新潟輕罪裁判所ノ言
渡ニ對シ與村孫作上
告事件明治廿一年十二月十四日
日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十八條刑法附則第五十五條

六號

刑法附則第五十五條ノ例ヲ援引シ假令無効ノ賣買ナルモ正當ノ規則ヲ領シタルモ
ノナレハ原價ヲ償ハサレハ物件ヲ返還セシムルコトヲ得スト云フニ在ルモ第五十五
條ハ上告人等ノ喋々スル如ク動產物ニ對スル規定ニシテ贓物輾轉シテ他人ノ手ニ

刑例

附則第五
十五條ハ
不動物ニ
適用スル
ヲ得ス

借用物費
消ノ物件
モ向ホ竊
盜罪ト均
トシタ均
物ト稱ス
可キナリ

贓金ヲ以
テ買得セ
ン物品ハ
決シテ贓
物ト看做
スモノニ
アラズ

在ル場合ニ於テ特ニ例外ノ規則ヲ制定シタルモノナレハ其動産上ニ係ル特例ヲ援引シ之ヲ以テ不動産タル山林田地ノ賣買上ニ推及スルコトヲ得サルハ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ(千葉重罪裁判所ノ言渡シニ對シ荒井嘉左工門荒井嘉三郎木崎太左衛門日暮茂十小川七兵衛等ノ上告事件明治二十一年九月二十九日大審院公廷ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條

七號

物品還給處分ニ付刑法ノ正條ヲ明示スルノ必要ナキノミナラス被告人ニ對シ罪ノ利害ニ影響ナケレハ以テ上告ノ原由ト爲スヲ得サルモノト(東京輕罪裁判所ノ言渡シニ對シ年十月廿二日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條

八號

山岡岩藏ニ木綿綿ヲ還付スト言渡シタルハ越權ノ處分ナリト云フモ岩藏ハ公商ニ依テ買取シ正當ノ所有權アルモノナレハ還付ノ言渡ヲ爲スハ當然ニシテ決シテ越權ノ處分ニ非ス(三次治安裁判所ノ言渡シ佐々木瀧藏上告事件明治二十一年九月十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條刑法附則第五十五條第二項

九號

原裁判所ニ於テ被告澤田安太郎カ第二ノ所爲ヲ冒認罪ナリト判定シタルハ從テ其

還給ヲ拒ムヲ得ス

贓タル小麥十七俵ハ現在スル今村馬之助ニ於テ公商ニ由リ買取シタルモノニアラサレハ民事原告人ノ請求ニ因リ還給ス可シト言渡シタルハ相當ニシテ決シテ不法ノ裁判ニアラス(高知輕罪裁判所ノ言渡シ澤田安太郎上告事件明治二十一年二月廿四日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條 刑法附則第五十四條第一項

十號

本件木下素慶ハ古物商ナルコトハ公判始末書ニ依テ明白タリ原文ニハ素慶ハ假ニ賣渡ノ姿ト爲シ云々アルモ意味明瞭ナラス去レハ上告人小林豊次郎カ素慶ヨリ金屏風ヲ買取シタルハ公商ニ依リ正當ニ買取ヲ爲シタルモノ、如シ被害者タル岡本喜七ヨリ原價ヲ償ナハサレハ直チニ還給セシムルコトヲ得サルモノトス然ルニ原裁判所カ刑法附則第五十五條第一項ノ規定ニ背キ直チニ還給ヲ命シタルハ越權ノ處分ニ出テタル不法ノ裁判ナリ(京都輕罪裁判所ノ言渡シ太田定七上告事件明治二十一年十月廿三日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十八條 刑法附則第五十條第二項

十一號

原判文ヲ閱スルニ生絲營業ヲ爲スモノハ蠶絲組合準則ニ從テ之ヲ爲スヘキモノナレハ理助ハ之カ組合員ニアラサルコトハ既ニ扣訴人モ認ムル所ナレハ之ヲ生絲公商ナリト云フヲ得ス云々公商ニ由ラスシテ買得シタルモノナレハ被害者タル被扣訴

刑例

人ノ要求ヲ拒ムコトヲ得サルモノト記載シアリテ其生絲公商ト稱スルニハ蠶絲營業組合准則ニ從カハサルヲ得サルハ當然ニシテ原裁判所カ細井理助ハ生絲公商ニアラスト認メ被害者タル被上告人ノ要求ヲ拒ムコトヲ得スト言渡シタルハ不法ノ裁判ニアラストス(大坂控訴院ノ言渡ニ對シ松本玄七上告事件明治廿一年十二月十五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條 刑法附則第五十四條

十二號

抑モ其義務ヲ盡了セサル限リハ現ニ所有スル凡テノ財産ノ引當ト爲シタルモノト假定スル者ナリ故ニ義務者ニ於テ身代限ノ裁判ヲ受ケタル以上ハ總テノ財産ヲ擅ニ賣買讓與スル權無キハ論ヲ待タス然レハ其權ナキモノ、賣買讓與ハ無効ナリト云ハサルヲ得ス而シテ本件原裁判所ニ於テ認メタル事實ニ依レハ被告カ所爲ハ身代限ノ裁判ヲ受ケ爾後上告人ニ不動産ヲ賣渡タル者ナレハ債權者タル民事原告人ハ其無効タル賣買讓與ノ物件ヲ有スルモノニ追及權アルハ勿論ナレハ之ヲ以テ對人權ト云フヲ得ス(鳥取輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ越野文太郎上告事件明治二十年十二月六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十八條 刑法附則第五十五條

十三號

本按岡田榮吉カ其養母岡田トク即チ上告者ヨリ窃取シテ井上保次郎即チ被上告者

所有權ニハ追及權アリ

所有權ニハ追及權アリ

へ賣渡シタル金祿公債證書ハ上告者カ所有ノ財産ナリ故ニトクニ於テ讓與若クハ賣却等所有權移轉ノ承諾ナキ以上ハ假令何人ニ於テ現有スルモ上告者ハ該物件ニ追隨シテ之カ返還ヲ請求スルノ權利アルモノニシテ之ニ反シ被上告者ハ岡田榮吉ノ詐欺ニ出テタルコトヲ知ラサリシ過失アリ結局所有者ノ正當ナル承諾ヲ得テ買得シタルモノニアラサレハ原裁判所カ直チニ返還ヲ請求スルヲ得サルモノ、如ク言渡シタルハ上告論旨ノ如ク不法ノ裁判ナリトス依テ治罪法第四百十條第十項第四百二十九條ニ從ヒ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲スコト左ノ如シ

原裁判カ認メタル事實ニ依リ民事原告人ハ井上保次郎ニ對シ直ニ返還ヲ求ムルノ權利アルモノトス然ルニ明治十九年十一月十五日大坂輕罪裁判所ニ於テ之ヲ贓物トシテ言渡シタル私訴ノ裁判ハ擬律錯誤ナルヲ以テ取消シ民事原告人岡田トクヨリ請求スル公債證書額面千圓ハ井上保次郎ヨリ民事原告人ニ返還ス可キモノト判決ス(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ井上保次郎上告事件明治廿年五月十二日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

刑法附則第五十四條

十四號

刑例

物權ニハ
追隨權アリ

第一控訴裁判言渡ヲ査閱スルニ(控訴人カ本訴公債証書ヲ抵當ニ收受ケタルハ全ク中村貞五郎ノ詐欺ノ手段ニ原由シタルモノニテ正當ニ得タルニアラサル)ト明示アリ然レハ原控訴人即チ上告人正邦正任等カ所持スル處ノ公債証書ハ民事原告人幾造ノ所有ナルヲ直五郎カ幾造ノ委任狀ヲ偽造シ詐欺ノ手段ヲ以テ上告人等へ抵當ニ交付シタルモノニテ已ニ直五郎ハ該犯罪ノ爲メ處刑ヲ受ケタルヲ以テ見レハ幾造カ該公債証書ノ融通使用ヲ許サ、ルモノナルヲ明確ナリ況ヤ幾造カ其所有權ヲ拋棄シタル事蹟ナキニ於テヲヤ故ニ控訴院カ初メ千村德松ニ融通ヲ許シタルト否ラサルトハ本件ニ關係ヲ生セサルモノト判定シタルハ毫モ不當ト認ムヘキ處ナシ第二控訴院カ認メタル事實ハ前掲ノ如ク幾造ハ直五郎ノ犯罪ニ因リ所有ノ公債証書ヲ失ヒタル者ニテ即チ被害者タルハ勿論正邦正任等カ該公債証書ヲ收受シタルハ直五郎ノ詐欺ニ出テ正當ニ保有セシユアラサレハ幾造カ其物件ノ所在ニ付還給ヲ求ムルハ正當ナルヲ以テ正邦正任ニ於テ其請求ヲ拒ムヲ得ストシ始審裁判所ヲ認可シタルハ刑法附則第五十四條ノ規定ニ則リ相當ノ裁判ヲ下シタルモノナレハ單ニ其法條ヲ掲ケタルヲ以テ破毀ノ原由ト爲スヲ得ス(横濱輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ中村貞五郎上告事件明治二十年十二月八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四十八條 刑法附則第五十五條第四百十條第九項

十五號

本訴ノ事實ハ乙者即チ岡本善七ハ甲者即チ市川又八カ所有ニシテ公訴被告人山本保之助等カ詐欺ノ所爲ヲ以テ手ニ入レタル公債証書詐欺ノ情ヲ知ラスシテ買取シ之ヲ丙者小菅榮修ニ賣與シ丙者ハ丁者山本義才ニ賣與シタルモノナリ而シテ乙者丙者間ノ賣買ハ公商ニ因ル賣買ニシテ正當ニ成立タルモノナリセハ刑法附則第五十五條初項ニ依リ甲者ハ丁者ニ對シ原價ヲ償ハサレハ直ニ還給セシムルヲ得サルモノナリ故ニ乙者ヨリ丙者丙者ヨリ丁者ニ輾轉スルニ當リ公商ニ因ルヤ否ヤハ最モ緊要ナル事實ナリトス然ルニ公訴判文ヲ閱スルニ説明ノ部前項ニ於テハ乙者ナル岡本善七ハ株式取引所仲買人ナルモ此賣買ハ市場外ニ於テ爲シタルモノナレハ公商ノ資格ヲ有セサルヲ論シ後項モ亦唯東京茅場町藥師ノ傍ニテ氏名知レサル一個人ノ家宅ニテ取引ヲ爲シタルハ公商人ノ賣買ト云フヲ得ストノ論ナレハ個ハ乙者ナル岡本善七ト山本保之助等トノ賣買ハ公商ニ因リタルト云フヲ得ストノ説明ニシテ乙者岡本善七カ丙者小菅榮修トノ賣買ハ善七ハ仲買人ノ資格ヲ以テ株式取引所ニ就キ相當ノ手續ヲ履行シテ爲シタルヤ丙者小菅榮修山本義才トノ間ニ成立タル賣買ハ公商ニ因リタルヤ否ヤノ事實ヲ説明シタルモノト見做ヲ得サル

公商ヨリ
買得シタ
ル物件ハ
賠償ヲ得
タル上ア
ラサレバ
還給スル
ニ及ハサ
ルモノト
ス

刑例

カ故其丁者ナル山本義才ニ對シ甲者ナル市川又八ニ直ニ還給ス可シト言渡シタルハ裁判ヲ認可スルニ當リ此緊要ナル事實ヲ漠然ニ付シ去リタルヲ以テ果シテ其刑法附則第五十五條ヲ適用シタルハ相當ナリヤ否ヲ監査スル能ハス即ハチ事實ノ理由ヲ明示セサル不法ノ裁判ナリ(東京控訴院ノ言渡シニ對シ山本保之助渡邊孝慈上告事)
(件明治二十年十二月十五日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第五節 刑期計算

第四十九條 正文略之

刑罰計算

草第六十一條 有期刑ノ期限ヲ計算スルニ日數又ハ月數ヲ以テ計算スヘキモノニ付テハ一日二十四時及ヒ一月三十日ノ割合ヲ以テス

年數ヲ以テ刑ヲ計算スルキハ適法ノ曆ニ從フ

刑ノ執行ヲ始メタル日ハ全一日トシテ算入ス

刑ノ最終日ハ正午ニ終ル(刑第四十九條○草零○佛刑第四十條)

(然レモ拘留一日ノ刑ハ二十四時ヨリ少ナカル可カラス又二日ノ刑モ四十八時ヨリ少ナカル可カラス)

拘留

第四十九條

被告ハ犯時十六歳未滿ナリト云フニアレモ刑法第四十九條ノ規定タルヤ刑期計算ノ法ニシテ年齡計算ニ適用スヘキ正條ニ非ラサルナリ故ニ年齡ヲ計算スルニハ必

一號

刑罰上ノ年齡ハ日數ヲ以テ

可シテス

ス月數ヲ以テスヘキコト當然ニシテ日數ヲ以テ計算スヘキモノニ非ス因テ上訴人カ論旨ハ其計算法ヲ誤リタルニ外ナラスシテ訴訟書類ニ錯誤アリト云フ可キモノニアラス加之戸長證明書ニ據テ計算ヲ遂クルモ被告ハ犯時即チ明治十六年七月滿十六歳ナルコト明確ナレハ原裁判所カ刑法第八十一條ニ照シ斷了シタルハ適法ナル裁判ナリ(佐賀重罪裁判所ノ言渡シニ對シ水町秀吉再審事件)
(明治二十二年九月二十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四十九條

二號其他直ニ治幾ハ明治五年改曆ノ際日數ニ不足アルヲ以テ犯罪ノ當時未丁年ナリト云フモ凡テ年齡ヲ算スルハ日ヲ以テスルモノニアラス生年月ヨリ起算シ犯罪ノ年月ヲ算入スルモノナレハ其間日數ノ不足アリトテ未丁年ト云フヲ得サレハ此論點ハ相立タス(大阪重罪裁判所ノ言渡シニ對シ佐藤義一吉村專太郎間直三下村治)
(幾等カ上告事件明治二十一年十月十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第五十條 正文略之

草第六十二條 何等ノ刑ト雖モ其言渡ノ廢棄ス可カラサルモノトナル前ニ執行スルコトヲ得ス(刑第五十條○治罪法第六百三十一條○草第十八條○佛治罪法第三百七十五條)

第五十一條 正文略之

第五十二條 正文略之

執行

年齡ハ日數ヲ以テ算スベカラ

刑例

刑罰起算ノ點
未決拘留アリタル事

草第六十三條 自由剝奪ノ刑期ハ確定裁判ニ據リ受刑者拿捕セラレ又ハ自カラ捕ニ就キタル日ヨリ始メテ起算スルモノトス
然レモ受刑者豫審中終始若クハ一時未決拘留ニ附セラレタルキハ左ノ區別ニ從テ其拘留日數ヲ本刑期限ヨリ減算ス可シ

第一 輕禁錮ニ該ルキハ一日ニ付キ一日又一月ニ付キ一月

第二 重禁錮ニ該ルキハ拘留日數ノ四分ノ三

第三 有期重罪刑ニ該ルキハ拘留日數ノ半

(反對刑、第五十一條○草、零○佛刑、第二十四條)

逃走停止

草第六十四條 若シ受刑者刑期間逃走シタルキハ其逃走ノ時日ヲ以テ刑期ニ算入セス(刑、第五十二條)

第六節 假出獄

第五十三條 正文略之

第六節 假出獄

草第六十五條 重罪若クハ輕罪ヲ犯シ自由剝奪ノ有期刑ニ處セラレタル者其刑期四分ノ三ヲ經過シ行狀方正ニシテ悔改ノ狀アル時ハ刑罰ノ執行ニ關スル一般ノ規則ニ依據シ行狀處分ヲ以テ假出獄ヲ許スコヲ得(刑、第五十三條)

假出獄

假出獄ヲ許サレタル者ハ其刑期ノ終ルマテ該規則ニ於テ特別ニ定メタル監視ニ附ス(刑、第五十五條)
本條ノ恩典ハ右ノ條件ニ從ヒ政府ノ決定ニ依リ無期ノ刑ニ處セラレタル者ニモ刑期二十年ノ後之ヲ施行スルコヲ得(刑、第五十三條)

第五十四條 正文略之

第五十五條 正文略之

第六十六條 (假出獄中ハ重罪刑ニ處セラレタル者ニ私權執行ノ全部又ハ幾分ヲ許スコヲ得)(刑、第五十五條○草、第四十六條)

私權執行

第五十六條 正文略之

第五十七條 正文略之

草第六十七條 假出獄ヲ許サレタル受刑者再ヒ重罪又ハ(重)禁錮ニ該ル輕罪ヲ犯スキハ當然假出獄ノ効ヲ失ヒ前後ノ刑期間再ヒ假出獄ヲ許サス(刑、第五十六條、第五十七條)

承前
刑再次ノ處

第七節 期滿免除

第五十八條 正文略之

第五十九條 正文略之

刑例

期滿免除

第七節 刑ノ消滅

草第六十九條 受刑者法律ニ定メタル時間中斷ナク其刑ノ執行ヲ遁レタルハ期

滿免除ヲ得ルモノトス(刑第五十八條)

承前
期限

草第七十條 期滿免除ハ完成ス

第一 死刑ニ係ルキハ三十年ニ依リ

第二 無期徒刑及ヒ無期流刑ニ係ルキハ二十五年ニ依リ

第三 有期徒刑及ヒ有期流刑ニ係ルキハ二十年ニ依リ

第四 重懲役及ヒ重禁獄ニ係ルキハ十五年ニ依リ

第五 輕懲役及ヒ輕禁獄ニ係ルキハ十年ニ依リ

第六 重輕禁錮及ヒ罰金ニ係ルキハ五年ニ依リ

第七 拘留及ヒ科料ニ係ルキハ一年ニ依リ(刑第五十九條○草零○佛治罪法第

六百三十五條第六百三十六條第六百二十九條)

第六十條 正文略之

承前
附加刑

草第七十一條 公權剝奪及ヒ公權停止ノ附加刑ハ期滿免除ニ因リ止息スルヲ得

ス(刑第六十條其他ノ附加刑ハ左ノ區別ニ從ヒ期滿免除ヲ得

第一 私權執行ノ禁止ハ其附從セル主刑ト共ニ期滿免除ヲ得(刑零)

第二 監視ハ當然行ハレタルキハ第四十七條及ヒ第四十八條ニ於テ定メタル其

期限ニ等シキ時間ニ依リ期滿免除ヲ得又禁錮ニ附加シテ裁判所ヨリ言渡サレタ

ル片及ヒ免刑若クハ不問宥恕ノ場合ニ於テ監視ノミヨリ言渡シタル片ハ法律ニ於

テ之カ爲メ定ムルヲ許シタル期限ノ最長期ニ等シキ時間ニ依リ期滿免除ヲ得

(刑零)

第三 重罪刑ニ附加シテ言渡シタル罰金ハ主刑タル罰金ト同様ニ期滿免除ヲ得

(反對刑第六十條)

第四 沒收ハ五年ニ依リ期滿免除ヲ得但シ法律ニ反シテ造出シ若クハ占有セル

物件ノ沒收ハ期滿免除ヲ得ス(刑第六十條)

第五 言渡書ノ公示ヲ爲サ、リシキハ其宣告書ヲ以テ言渡シタル主刑ト同一ノ

期限ニ依リ期滿免除ヲ得(刑零)

第六十一條 正文略之

草第七十二條 對質ニテ言渡シタル主刑若クハ附加刑ノ期滿免除ハ受刑者廢棄ス

可カラサルモノトナリタル裁判ヲ以テ言渡シタル刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ始メ

テ起算スルモノトス

闕席又ハ抗傳ニテ言渡タル處刑ニ付テハ其言渡サレタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

承前
起算ノ點

刑例

第六十二條 正文略之

承前
中斷
草第七十三條 主刑ノ期滿免除ハ自由剝奪ノ刑及ヒ監視ニ付テハ受刑者ノ拿捕ニ
因リ中斷ス(反對刑、第六十二條)

承前
費用賠償
及返還
罰金及ヒ沒收ニ付テハ受刑者ノ義務ノ認知又ハ差押其他執行ヲ目的トスル訴訟手
續ニ依リ期滿免除中斷ス(刑、零)

承前
受刑者ニ
利アルハ
已往ニ溯
ル事
國庫及ヒ被害者ニ償還スヘキ費用ノ言渡及ヒ贓物ノ返還并ニ民事ノ賠補ハ民法ノ
規則ニ依循シテ期滿免除ヲ得ルモノトス(刑、零○草、零○佛治罪法、第六百四十二
條)

承前
受刑者ニ
利アルハ
已往ニ溯
ル事
草第七十四條 (本法頒布以前ニ言渡シタル刑ニシテ期滿免除ヲ聽許セサルモノ又
ハ其期限ノ一層長キモノハ前條期滿免除ノ例ニ從フ新法ヲ以テ刑ノ期滿免除ノ條
件ヲ改正シタルハ總テ其條件中受刑者ニ利アル所ノモノヲ舊罪ニ適用ス可シ)

第八節 復權

第六十三條 正文略之

復權
草第七十五條 復權ハ主刑ヲ受ケ了リタル後又ハ恩赦若クハ期滿免除ニ因リテ其
止息シタル後公權剝奪又ハ公權停止及ヒ監視ヲ免スルモノトス

復權ハ左ノ年限ノ後請願スルコトヲ得

第一 重罪刑ニ處セラレタル者ハ刑ノ止息ヨリ五年ノ後

第二 監視ノミ附セラレタル者ハ確定裁判ヨリ二年ノ後

第三 禁錮ニ處セラレタル者ハ一年ノ後(刑、第五十六條)

復權ノ法式及ヒ其他ノ條件ハ治罪法ニ之ヲ規定ス(刑、零○日本治罪法草案、第六
百三十六條乃至第六百四十四條○佛治罪法、第六百十九條乃至第六百三十四條)

第六十四條 正文略之

第六十五條 正文略之

特赦
草第七十六條 特赦ハ(裁判前ニ行ハレタルハ公訴ヲ止息シ又言渡後ニ行ハレ
タルハ其効力ヲ絶滅シ且ツ)當然復權ヲ施スモノトス(草、第七條)

恩赦
恩赦ハ(言渡ノ確定後ニ非ラサレハ之ヲ行フコトヲ得ス又主刑執行ノ釋放ヲ爲スノ
ミニテ)恩赦狀ニ特ニ復權ヲ許與スルニ非ラスンハ之ヲ施サ、ルモノトス(刑、第六
十四條)

等減
勒裁
〔減等ハ廢棄ス可カラサルモノトナリタル刑ヲ減輕シ而シテ刑ハ裁判ヲ以テ言渡サ
レタルモノト看做サル可シ〕

草第七十七條 (復權)減等恩赦及ヒ特赦ハ勒裁ニ非ラサレハ之ヲ施行スルコトヲ得
ス(刑、第六十五條)

第三章 加減例

第六十六條 正文略之

第參章 刑ノ漸次ノ加重及ヒ減輕ノ事

草第七十八條 法律カ犯罪ノ特殊ノ情狀ニ因リ刑ノ一等若クハ數等ヲ減輕シ又ハ加重スルコトヲ裁判所ニ命シ又ハ允許スル種々ノ場合ニ於テ裁判所ハ以下ノ條例ニ從フコトヲ要ス(刑第六十六條)

第六十七條 正文略之

草第七十九條 通常ノ重罪刑即チ普通法ノ重罪刑ハ左ノ順序ヲ以テ減輕又ハ加重セラル可シ

第一 死刑

第二 無期徒刑

第三 有期徒刑

第四 重懲役

第五 輕懲役

然レトモ何レノ場合ニ於テモ死刑ハ漸次ノ刑ノ加重ノ効力ニ因リ言渡ス可カラス(故ニ死刑ハ明瞭ニ法律ニ揭示スルコトヲ要ス)刑第六十七條

刑事犯ノ

第六十八條 正文略之

草第八十條 國事犯ノ重罪刑ハ以下ノ順序ニ從ヒ減輕又ハ加重セラル可シ

第一 無期徒刑

第二 有期徒刑

第三 重禁獄

第四 輕禁獄

(刑第六十八條)

第六十九條 正文略之

草第八十一條 法律上命令シテ有期ノ重罪刑ノ最長期ヲ言渡シ又ハ其上ニ幾分ヲ加ヘテ言渡ス可キ一切ノ場合ニ於テ若シ其刑ノ一等又ハ數等ヲ減輕ス可キ場合アルキハ裁判所ハ一等ヲ減輕スル爲メ本刑ノ最短期ヲ言渡ス可シ(刑、零、〇草、第一百條)

輕懲役及
輕禁獄

最長期ニ
至リタル
刑

草第八十二條 輕懲役又ハ輕禁獄ノ刑ニ付テ一等又ハ數等ヲ減セラル、コトヲ要スルキハ裁判所ハ一等ノ減輕トシテ懲役ノ場合ニ於テハ二年以上五年以下ノ使役ニ附スル禁錮(以下重禁)又禁獄ノ場合ニ於テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ヲ言渡シ且右何レノ場合ニ於テ

加減例

モ二十拾圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス可シ(刑第六十九條)

第七十條 正文略之

草第八十三條 總テ禁錮及ヒ罰金ヲ數等輕減シ又ハ加重スルコトヲ要スル所ノ場合ニ於テハ増減共ニ法律上(本刑トシテ)定メラレタル是等兩刑ノ各自ノ最長期ト最短期トニ據リ一等ニ付キ四分ノ一ノ割合ヲ以テ計算ヲ爲ス可シ
然レトモ禁錮ノ最長期ヲ七年以上ト爲シ(又其最短期ヲ五年以上ト爲ス)能ハス
(刑第七條)

第七十條 一號

刑法第七十條ヲ揭ケサルモ減等ノ刑期ニ相當スレハ總則中ノ法條ハ敢テ明示スルヲ必要トセス
(金澤重罪裁判所ノ言渡ニ對シ小野喜久太郎上告事
件明治廿一年四月十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十條 二號

刑法第七十條ヲ揭ケスシテ單ニ一等ヲ減シトアルハ擬律錯誤ナリトノ言ハ本刑法第二百十條四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加シ全法第二百十三條六月以上二年以下ノ監視ニ付スヘキ輕罪ニシテ全法第八十五條

刑法第七十條ノ如キ政テ示スヲ要セス
四分ノ一ノ減刑法ヲ揭ケサルモ不當ニアラス

ニ依リ一等ヲ輕減シタルト明瞭ナリ全法第七十條ノ減等法ヲ引用セサルモ敢テ擬律ノ錯誤ト言フヘガラス
(大坂扣訴院ノ言渡ニ對シ稻田英慶上告事件明
治二十一年二月七日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第七十條 三號

加減例ヲ明示セサルハ擬律錯誤ナリト云フモ原判文ヲ閱スルニ刑法第百十二條第九十二條ヲ適用シ以テ本刑ヨリ一等ヲ減シ云々亦ハ一等ヲ加ヘ云々ト其加減シタル處テ刑ノ正條ニ就キ範圍ヲ示シアレハ四分ノ一ヲ加減シタルト明瞭ニシテ全法第七十條ニ依リ加減方法ヲ詳細ニ明示セサルモ敢テ擬律錯誤ナリト云フ可ラス
(和歌山輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ瀨川豊吉上告事件
明治廿一年九月廿八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第七十一條 正文略之

草第八十四條 若シ輕罪ノ禁錮及ヒ罰金カ四等ノ減輕ニ因テ減盡シタル片ハ裁判所ハ違警罪ノ拘留(三日以上十日以下)及ヒ科料(一圓以上一圓九十五錢以下)ヲ言渡ス可シ(刑第七十一條)

第七十一條 一號

禁錮ヲ減盡シタル片ハ刑法第七十一條ニ依リ拘留ニ處ス可キハ勿論ナルニ原裁判

加減例

禁錮ヲ減盡シタル

加減例ハ判決文ニ引用セサルモ不當ニアラス

續キ

キハ拘留ニ處ス

茲ニ出テス本刑減シ盡スヲ以テ其刑ヲ科セス放免スト言渡シタルハ擬律ノ錯誤ニ該ルモノトス因テ治罪法第二百廿九條ノ成規ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス左ノ如シ

原裁判所カ認ムル事實ニ依リ被告ノ所爲ヲ法律ニ照スニ刑法第三百六十六條第三百七十七條ニ該當スルモ犯時十二歳以上十六歳未滿ナルヲ以テ同第八十條第二項ニ依リ本刑ニ二等ヲ減シ尙ホ自首シテ贓物全部ヲ還付シタルヲ以テ同第八十五條第八十六條ニ依リ通シテ三等ヲ減シ以上本刑五等減ニ係リ減シ盡スヲ以テ刑法第七十一條第二十八條ニ依照シ被告秀吉ヲ拘留三日ニ處スルモノナリ(松江輕罪裁判所藤秀吉上告事件明治二十二年九月十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十二條 正文略之

草第八十五條 違警罪ノ刑ヲ加重シ又ハ輕減ス可キ場合ニ於テハ加減共ニ各刑ノ四分ノ一ヲ以テ一等トス

然レトモ裁判所ハ其各刑ノ一般ノ最長期ノ二倍以上ニ加重シ若クハ其最短期以下ニ輕減スルヲ得ス(刑第七十三條)

第七十三條 正文略之

第七十四條 正文略之

一日未滿ノ端數

草第八十六條 禁錮又ハ拘留ノ刑ノ漸次ノ加重又ハ減輕カ其最短期又ハ最長期ニ於テ一日ニ滿タサル端數ヲ生スルキハ言渡ス可キ刑中ニ此端數ヲ計算セス(刑第七十三條)

附加刑

草第八十七條 附加刑ハ直チニ加減セス然レトモ主刑ノ加減アリタル後チニ言渡サル、所ノ主刑ヨリ生スル附加刑ハ其儘適用ス可シ(刑、零、○草、第四十一條乃至第四十三條、第四十九條、第五十四條、第三百三十四條)

第七十四條

一號

附加罰金ハ刑法第七十四條ノアルアリテ主刑ト共ニ加減ス可キモノナレハ監視ヲ主刑ト共ニ加減ス可キヲ規定シタル法條アルヲ視サルノミナラス監視ノ如キハ假令本刑ヲ免スル場合ニアリテモ特ニ之ニ付スヘキモノニシテ決シテ主刑ノ加減ニ伴フヘキモノニ非ラサレハナリ(名古屋控訴裁判所ノ言渡ニ對シ林吉十郎上告事件明治二十年二月十七日大審院棄却ノ判決)

第七十四條

二號

刑法第七十四條ニ附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ云々トアルハ減盡シタル場合ヲ云フモノトス故ニ本件ノ如ク刑法第四百二十四條ノ附加罰金ヨリ二等ヲ減シ一圓

加減例

罰金ノ減盡

監視ハ附加罰金ノ如ク加減スルモノニアラス

五十錢以上十五圓以下ノ範圍トナルキハ未タ減盡セサルヲ以テ二圓以上十五圓以下ノ罰金ヲ附加セサル可カラス然ルヲ原裁判所ニ於テ附加ノ罰金ハ減盡シタルヲ以テ止タ主刑ヲ科スト言渡シタルハ全ク擬律ノ錯誤ニ該ル不法ノ裁判(松江輕非裁判所ノ言渡ニ對シ淺原初五郎上告事件明治廿二年十月十九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十四條

三號

主刑ノ禁錮ヲ減シテ拘留ニ處スル時ハ附加ノ罰金ヲ減シテ科料ニシテ附加スルヲ得

刑法第七十四條ニ附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲シ若シ減盡シタル時ハ止タ主刑ヲ科ストアリテ附加ノ罰金ヲ科スルハ主刑禁錮以上ニ該ル時ニ限ル故ニ主刑拘留ニ該ル時ハ罰金ヲ附加スルヲ得ス然ルニ本案禁錮ヲ減盡シテ拘留ニ處シナカラ尙ホ科料ヲ附加シタルハ非常上告論旨ノ如ク相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル違法ノ裁判ナリトス(谷村治安裁判所ノ言渡上告事件明治二十一年十二月二十七日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十四條 末項

四號

伊尾川架設假橋ノ板四枚ヲ取外シ川中ニ投棄セシ所爲ニ對シ原裁判所カ刑法第六十二條ヲ適用シ被告ハ十六歲未滿ノモノナレハ是非ノ辨別アリテ犯シタルモノ

スルヲ得

ト認メ刑法第八十條第二項ニ照シ本刑ニ二等ヲ減シ之カ範圍内ニ於テ被告ヲ重禁錮一月十五日ニ處シタルハ相當ナリト雖モ之ニ罰金トシテ附加セシハ擬律ノ錯誤ナリトス何者附加罰金ハ減シテ二圓以下ニ降ルキ之ヲ罰金トシテ附加スルヲ得サルヲ刑法第七十四條末項ニ則チ減盡シタルキハ止タ主刑ヲ科ストアルニ依リ明確タリ併シ又科料トシテ附加スルヲ得ルカト云ハハ科料ハ主刑ニシテ之レヲ附加刑トスルノ正條ナキニ付科料トシテ附加スルヲ得サルヲ勿論ナリ爰ヲ以テ右等ノ場合ニ於テハ二圓以上ノ罰金ヲ科スヘキヲ相當ナリ(高知輕非裁判所ノ言渡ニ對シ淺原初五郎上告事件明治廿一年三月廿九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四章 不論罪及ヒ減輕

第一節 不論罪及ヒ宥恕減輕

犯罪成立ニ必要ナル固有ノ元素ハ皆各本條ニ依リ知了スルヲ要ス然レモ犯罪成立ニ關スル一般ノ條件アリ即チ左ノ如シ

- 一 自由
 - 二 辨別
 - 三 故意
- 自由トハ他ノ強制ヲ受クルコトナク事ノ行否自己ノ意ニ隨フヲ謂ヒ又辨別トハ普通

不論罪及ヒ減輕

ノ知覺精神ヲ具有シ事ノ是非ヲ識別スル智能アルヲ謂ヒ又故意トハ法律規則ノ禁令アルヲ知ルト知ラサルトヲ分タス罪トナル事實ヲ知リテ之ヲ行ヒ若クハ行ハサルノ意アルヲ謂フ然レモ諸罰則違警罪及ヒ過失罪ニ付テハ法律ノ特例又ハ其犯罪ノ性質上其條件ヲ具備スルヲ要セス

不論罪ニ二種アリ各種ノ犯罪ニ適用ス可キモノヲ一般ノ不論罪ト謂ヒ特種ノ犯罪ニ適用ス可キモノヲ特別ノ不論罪ト謂フ

一般ノ不論罪ハ左ノ如シ一抗拒ス可ラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非ラスシテ爲シタル者二天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己又ハ親屬ノ身体ヲ防衛スルニ出テタル者(刑法第七十五條)三法律又ハ所屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者(同第七十六條)以上ハ自由ヲ欠キタルモノナリ四罪ヲ犯ス意ナキ者但シ法律規則ニ於テ特例アルモノヲ除ク五罪トナル可キ事實ヲ知ラサル者(全第七十七條)以上ハ意思ヲ欠キタルモノナリ六知覺精神ヲ喪失シタル者(全第七十八條)七罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿タサル者(全第七十九條)八罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿タスシテ是非ヲ辨別セサル者但シ違警罪ハ此限ニアラス(第八十條)九瘡啞者(第八十條)以上ハ識別ノナキモノナリ而シテ特別ノ不論罪ハ左ノ如シ一自己又ハ他人ノ身体生命ヲ正當ニ防衛シ已ムコ

ヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者但シ不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ヲ除ク(刑法第三百十四條)二財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スル爲メ已ムコヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者三盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スル爲メ已ムコヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者四夜間故ナク邸宅ニ入り若クハ門戸牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スル爲メ已ムコヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者(第三百十五條)五犯罪人ノ親屬ニシテ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者(第三百十三條)六祖父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ヒニ竊盜ノ罪(第三百十七條)遺失物理藏物ニ關スル罪(第三百十七條)詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪ヲ犯シタル者(第三百十八條)

第七十五條 正文略之

第四章 刑ヲ科セサル原由及ヒ之レヲ減輕スル原由

第一節 刑ノ免脱及ヒ法律上ノ宥恕

草第八十九條 被告人罪ヲ犯スノ意思ナクシテ罪ヲ犯シタルキ又ハ罪ヲ犯スモ害スルノ意思ヲ有セザリシキハ犯罪ナキモノトス但シ法律上不注意ニテ加ヘタル損害若クハ唯タ其條例又ハ制規ノ違背ヲ罰スル場合ハ此限ニ在ラス(草第三百五十三條以下第四百五十四條第四百六十條第四百六十四條)

不論罪及ヒ減輕

意思ノ無キ事

被告人犯罪構造ノ情狀ヲ知ラサルモ亦前ニ同シ

若シ唯被告人犯罪ノ加重ス可キ一又ハ數多ノ情狀ノミヲ知ラサルモハ之ニ該當ス

ヘキ刑ノ加重ヲ受ケス

法律又ハ制規ヲ知ラサル事ハ意思ノ無キヲ證明スル爲メニ申告スルヲ得ス(刑、第七十七條)

自由ノ無
トキ

草第九十條 (被告人罪ヲ犯サ、ルコトニ付キ自由ナラサリシモハ)重罪モナク輕罪モナク又違警罪モナキモノトス

(以下ノ場合ニ於テ此條例常ニ其適用ヲ爲ス可シ)

第一 被告人抗拒シ得サル所ノ有形ノ強令又ハ脅迫ヲ受ケタルニ因リ行爲シタルモ(刑、第七十五條)○草、零○佛刑第六十四條)

第二 抗拒ス可カラサルカ又ハ意外ノ變災ヨリ生スル切迫ノ危險ニ付キ犯人其身體又ハ其親族中ノ者ノ身體ヲシテ危險ヲ免カレシムルカ爲メニ(他人ノ損害ニ於テ)行爲シタルモ(刑、第七十五條)

第三 被告人法律又ハ其正當長官ノ命令ヲ執行スルニ付キ(其性質上)自己及ヒ長官ノ職務内ニ入ル可キ事實ノ爲メニ行爲シタルモ(刑、第七十六條)○草、零○佛刑、第二百二十七條)

刑、第二百二十七條)

第七十五條
第三百六十六條

一號

貧困ニ迫
ラレ殺人
罪ヲ犯ス
モ不論罪
ノ限ニア
ラス

刑法第七十五條ノ不論罪ハ抗拒スヘカラサル強制ニ遇ヒタルカ然ラザレハ天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル所爲ノミニ適用スルノ法條ナリ本按原判文ニ認メタル被告人所爲ハ身貧困ニシテ小兒ノ養料ヲ送ルニ苦ミ自己及ヒ他ノ小供二人カ糊口ノ窮ヲ免レン爲メ寧ロ預ケ置ク小兒ヲ殺サント決意シタル事實ニテ固ヨリ抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒタルニアラス天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危險ニ遇ヒタルニアラス豫メ知り得ヘキ事ニテ又他ニ避クルノ道ナキ事ニモアラサレハ刑法第七十五條ノ不論罪ヲ以テ論スヘキ事實ニアラス(廣島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ濱田直藏上告事件明

治廿一年三月六日大審
院ニ於テ棄却ノ判決)

第七十七條

二號

己レテ富
スノ意思
ヲ欠キタ
ル所爲ハ
窃盜ヲ以
テ論セス

原判文中嚴寒ノ肌ヲ侵スニ耐難ク並河村字荒内ト唱フル田地ト街道ノ境界ナル堤上ニ散亂セシ同村藤井トラ所有ノ藁四把ヲ拾取リ自己携帯セシ提灯ノ火ヲ移シ焚煖リタル際云々トアルヲ以テ原裁判官カ被告久米次郎ノ事實ヲ認メタル一段落トス而シテ文意ニ據レハ其窃取ノ意ナキヲ推知スルニ足ルト雖モ原裁判所ハ尙ホ之

不論罪及ヒ減輕

ヲ明カニ言ヒ顯ハサンカ爲メ後段ニ其所有主ノ許諾ハ得サレ自己ヲ利スル爲メ害ヲ他人ニ被ラシムルノ意ナクシテ云々ト記載シタルモノニシテ前後兩段ヲ通解スレハ被告久米次郎ハ寒氣ニ耐難キヨリ煖ヲ取ル爲メ堤上ノ藁ヲ拾取リタル事實ニシテ已ヲ富マスカ爲メ人ヲ害シテ取リタルノ意ニアラスト云フニアルモノナレハ彼是照應シテ毫毛齟齬シタルヲナシ凡刑法ハ或ル場合ヲ除クノ外ハ皆犯法ノ意思ヲ以テ犯罪構成ノ一要件トス而シテ原裁判官カ認ムル所ノ被告久米次郎ノ事實ハ竊取ノ意ナシ即チ犯法ノ意ナシト云フニアルモノナレハ犯罪構成ニ必要ナル條件ヲ闕キタルヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ至當

(京都輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ細久米次郎吉田辰之助上告事件明治十九年九月廿八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第七十八條 正文略之

草第九十一條 被告人行爲ノ時靈智ヲ喪失セシハ犯罪ナシ(刑)第七十八條○草
 零○佛刑第六十四條

〔本條ノ利益ハ罪ヲ犯ス目的ヲ以テ其準備ヲ整ヘタル者ヨリ之レヲ申告スルヲ得ス〕

第七十八條

一號

靈知無キ事

醉狂

亂醉ニ亦
 智覺精神
 ノ喪失ト
 ス

渡邊久藏ヲ毆打死ニ致シタル事實ニ對シ原裁判所ハ當時被告人ハ亂醉シ智覺精神ヲ喪失シ是非ノ辨別アラサリシ者ト認メ刑法第七十八條ヲ適用シ無罪ノ言渡シヲ爲シタリ果シテ被告人カ所爲ハ亂醉ノ爲メナリトシ輒チ科ヲ酒ニ嫁セシムルノ意ニ出テ原裁判官カ無罪ヲ言渡シタルモノナレハ檢察官論告ノ如ク原裁判所ハ刑法第七十八條ノ見解ヲ誤リタル不適法ノ裁判ナリトス若シ否ラズシテ全ク知覺ヲ失シモノトセハ附帶上告論旨ノ如ク法律上寬典ヲ受ク可キ知覺精神ノ喪失シタルヤ否ヤ理由ヲ附ス可キナリ

(札幌重罪裁判所ノ言渡ニ對シ佐々木久太郎上告事件) 明治二十一年二月二十一日大審院ニ於テ被毀ノ判決

第七十九條 正文略之

第七十八條

第一號

嗜好ノ酒
 量ヲ超過
 シタルノ
 ミナ以テ
 知覺精神
 ナ喪失シ
 タル者ト
 云フヲ得
 ス又犯罪
 成ニ關係
 ナキ事實

知覺精神ヲ喪失シ是非ノ辨別ナシト云フモ常ニ嗜ム酒量ヲ超過シタルトテ法律上見テ以テ知覺精神ヲ喪失シタル者ト論スルヲ得サレハ爲メニ無罪ヲ言渡ス理由トナスニ足ラス又タ嫂ヲ妹ト記載シタルハ不法ナリト云フモ這ハ原裁判所ノ認メサルノミナラス良シ嫂ヲ妹ト記シタルモノト假定スルモ被告カ犯罪構造ニ關係ナケレハ是亦相立サル論告アリトス又タ格子ハ家屋ニ付着セシモノニ非ズト云フモ原判文認ムル所ニ據レハ座敷ノ格子又ハ二階階子ノ欄干トアリテ即チ家屋ニ付着シ

九七

不論罪及ヒ減輕

ハ不備ナ
リト雖
上告ノ原
由トナラ
ス

所謂建造物ノ一部ニ外ナラサレハ刑法第四百十七條ヲ適施シタルハ相當ナリ(盛岡
輕罪
裁判所ノ言渡シニ對シ葡地己代五郎上
告事件明治二十一年二月大審院判決)

第七十八條第四百二條

第二號

精神病ノ
適用

上告ノ理由ハ被告カ精神病ニ罹リタルハ明瞭ナルモ該病ハ深淺厚薄ノ差等アリテ
被告カ放火ノ當時全ク知覺精神ヲ喪失シタル證ナク尙ホ幾多ノ精神アルハ被告ノ
答辨ヲ以テ證スルニ足ルト云フニアルモ原判文ヲ閱スルニ(事實參考人澁谷テツ
ヨノ豫審調書醫師市川元泰ノ鑑定書被告カ司法警察官ニ申立タル放火前後ノ狀況
ニ照シ之ヲ按スルニ被告ハ豫テ精神病ニ罹リ居リ登時病ノ發動ニ由リ精神錯亂ニ
テ前顯三回ノ放火ニ及ヒタルハ顯然ニシテ即チ犯罪構成ニ欠ク可カラサル知能ノ
一要素ニ喪失シ斯ル所爲ヲ爲シタルモノト確認ス)ト判定シアレハ之ニ對シ前掲
ノ如ク論告スルハ到底探證ノ當否事實ノ認定ヲ非難スルニ外ナラス(山形重罪裁判所
澁谷彌惣太上告事件明治廿一年十
一月廿二日大審院ニ於テ棄却判決)

第四百二條
第七十九條

草第九十二條 被告人行爲ノ時滿十二歲以下ナリシキハ犯罪ナシ

十二歲以
下ノ幼者

下ノ幼者

然レトモ裁判所ハ事實ノ模様ト輕重トニ循ヒ其幼者ヲシテ滿十六歲ヲ超過セザル
定期マテ特別懲治場ニ於テ留置ノ監禁ヲ受ケシムルヲ(其職權ヲ以テシテモ)命
スルヲ得可シ(刑第七十九條)

第七十九條

一號

原判文ニ被告ノ年齡ハ十二年五月生トアレハ被告ノ生日ハ明治十年五月生ニシ
テ犯時即明治廿一年二月ニアリテハ十年十月ナリトス然レハ未タ十二歲ニ滿
サルヲ以テ刑法第七十九條ニ依リ第一印紙再貼用ノ所爲ニ對シテハ罪ヲ問フヘキ
モノニアラス然ルチ原裁判所カ刑法第九十九條ニ依リ罰金ノ刑ヲ言渡シタルハ
非常上告論旨ノ如ク法律ニ於テ罰セザル所爲ヲ罰シタルモノニシテ破毀ノ理由ア
リトス(大坂輕罪裁判所ノ言渡シニ對シ磯野富三郎上告事件
明治廿二年五月廿八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十九條
第三百九十九條

二號

原會議局ハ十二歲未滿ナル荒井テフカ竊盜ノ所爲ハ其罪ヲ組成セス從テ寄藏者ナ
ル被告「シカ」カ所爲モ罪ト爲ラストシ豫審免許ノ言渡ヲ認可シタレトモ刑法七十
九條ハ其罪ヲ論セザルニ在テ犯罪ヲ組成セスト云フノ精神ニハ非ラサルナリ故ニ

不論罪及ヒ減輕

十二歲未
滿ノ幼者
カ盜取シ
タルモノ
ハ竊物
タルヲ免

レス

テウカ犯罪ニ因テ得タル金圓ハ即チ贓物ニシテ被告シカカ其贓物タル情ヲ知テ寄藏シタルハ乃チ犯罪ヲ構成シタルヲ勿論ナルニ會議局カ其事實ヲ看認ナカラ輒ク豫審終結言渡ヲ認可シタルハ越權ノ處分ナリ(安濃津輕裁判所會議局ノ言渡ニ對シ野呂院ニ於テ破毀ノ判決)

第七十九條

三號

原判文ヲ閱スルニ第一明治二十年五月十四十五日頃周防國云々銅貨拾四錢第二全月日頃云々紙幣銅貨取交七拾七錢六厘第三同年同月十六日午前十一時頃云々金拾九錢二厘ヲ竊取セリト記載シ又被告人ノ年齢ハ十二年六月ト記載セリ而シテ右年齡ハ原裁判所カ裁判ヲ言渡シタル即チ明治二十一年五月十九日ニ該ルヘシ然ラハ被告人カ犯罪ノ最終ノ日即チ明治二十年五月十六日迄ニ之ヲ算スレハ年齡十二歲未滿ニシテ刑法第七十九條罪ヲ犯ス時十二歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セズト云フニ該當シ之レカ罪ヲ科スヘキ者ニ非ラストス然ルヲ原裁判所カ被告人ニ對シ刑法第三百六十六條以下ヲ適用シ今第七十九條ヲ適用セザリシハ非常上告趣旨ノ如ク擬律錯誤アル不法ノ裁判ナリトス(山口縣裁判所ノ言渡ニ對シ西村榮吉非常上告事件明治廿一年十月十六日大審院ニ於テ無罪ノ判決)

第七十九條

第二期ノ幼者ニ對スル適用

滿八歲ニ至リタル者ハ留置スルヲ得

十六歲以下ノ幼者

五號

被告カネハ未タ滿八歲ニ至ラサルニ懲治場ニ留置スル裁判アリシハ不法ナリシト云フニ在レハ法律上年齡ヲ算スルハ月ヲ以テスヘキモノニシテ日ヲ以テ計算スヘキモノニ非ラス而シテ訴訟書類ヲ檢スルニ被告カネハ明治十二年七月廿八日出立ニシテ犯罪時ハ明治二十一年七月十一日ナレハ滿八歲以上ナルヲ明カナリ既ニ滿八歲以上ナレハ刑法第七十九條末項ニ依リ懲治場ニ留置スルモ不法ニアラス亦刑法第七十九條但書ニ所謂情狀トハ犯罪ノ情狀ヲ指スコト勿論ナリ(橫濱重罪裁判所澤かね上告事件明治二十一年十月廿二日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第八十條 正文略之

草第九十三條 被告人行爲ノ時滿十二歲以上十六歲以下ナルハ是非ヲ辨別シテ犯セシヤ否ヲ知ルノ點ニ付キ裁判所ハ特ニ之レヲ審案スルヲ要ス(治罪法第四百八十二條)佛蘭西治罪法第三百四十條

若シ其幼者「辨別ナク」シテ犯セシト明言セラレシハ何等ノ刑ヲモ之レニ適施スルヲ無シ然レトモ其者滿二十歲ニ至ルマテハ前條ニ照循シ之ヲ繫留スルヲ得(草)佛刑第六十六條

若シ其者「辨別アリテ」犯セシト明言セラレシハ唯タ法律上ノ宥恕ヲ受ケテ其犯不論罪及ヒ減輕

罪ノ刑ハ二等ヨリ三等迄ヲ減輕セラル可シ(刑第八十條○草、零○佛刑第六十七條)

第八十條

一號

刑法第八十條末項ニ據リ其罪ヲ論擬スヘキハ先ツ被告人カ是非辨別アリテ犯シ
 タリトノ認定ヲ下シ然ル后チ該條項ヲ施用スヘキモノニシテ其認定ハ被告カ罪ヲ
 論擬スルニ付必要欠クヘカラサル理由ナルヲ以テ刑ノ言渡シヲ爲スニ方リ之ヲ明
 示スヘキハ當然ナリトス然ルヲ原裁判言渡シ之ヲ明示セス止タ十六歳ニ滿タサル
 フ以テ全第八十條末項ニ依リ云々ト判決シタルハ即チ治罪法第三百四條ニ背戻シ
 タル不當ノ裁判ナリ又刑法第三百九十九條ノ本刑ヨリ二等ヲ酌減スルキハ第八十
 九條第九十條第七十四條ニ照ラシ十五日以上一年六月以下ノ重禁錮貳圓以上十五
 圓以下ノ罰金トナルヘキモノナルヲ原裁判所ハ第七十四條ニ據ラヌシテ其單ニ科
 スヘキ罰金ノ減法ヲ定メタル第七十一條ニ從ヒ寡數ヲ壹圓五十錢迄ニ引下ケ之ヲ
 科料トシラ附加セシハ是亦加減ニ背キタル擬律錯誤ノ裁判ナリ(山形縣裁判所ノ言渡
 兵衛上告事件明治十九年十月五日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第八十條

二號

年齡ハ日
ヲ以テ算
スベカラ
ス

二十歳以
下ノ幼者

瘡痂者

三期幼者
ノ減刑ノ
適用

其他直三治幾ハ明治五年改曆ノ際日數ニ不足アルヲ以テ犯罪ノ當時未丁年ナリト
 云フモ凡テ年齡ヲ算スルハ日ヲ以テスルモノニアラス生年月ヨリ起算シ犯罪ノ年
 月ヲ算入スルモノナレハ其間日數ノ不足アリトテ未丁年ト云フヲ得サレハ此論點
 ハ相立タヌ(大坂重罪裁判所ノ言渡ニ對シ佐藤一吉村專太郎間直三下村治幾
 等カ上告事件明治二十一年十月十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第八十一條 正文畧之

第八十二條 正文畧之

草第九十四條 若シ被告人行爲ノ時滿十六歳以上二十歳以下ナリシキハ亦法律上
 ノ宥恕ヲ受ク可シ然レトモ刑ハ一等ヨリ二等迄ヲ減輕セラル、ニ過キス(刑、第八
 十一條)

草第九十五條 生來又ハ幼稚ノ時ヨリ瘡痂ノ者ハ常ニ其刑ヲ免脫ス可シ
 然レトモ是等ノ者ハ事實ノ模様ト輕重トニ循ヒ五年ヲ超過セサル留置ノ監禁ニ附
 セラル、コアル可シ(刑、第八十二條)

第八十一條

一號

本按一件書類中原裁判所檢察官ノ照會ニ對スル戸長ノ回答書及ヒ之ニ添付シタル
 被告カ分家以前ノ戸籍寫等ニ依レハ曩ニ被告カ戸籍簿ニ安政六年十二月二日生ト
 不論罪及ヒ減輕

アリシハ被告カ不正ノ所爲ニ出テタル虚偽ノ登記ニシテ爾後訂正ニ係ル元治元年十二月生トアルハ眞實ノ生年ナルヲ明カナリ而シテ本按被告カ數多ノ犯罪ハ明治十六年三月中ニアルコトハ原判文ノ事實理由ニ依リ更ニ判然タレハ其眞實ノ生年ヨリ推算スルコトハ犯罪ノ當時ニ全ク十六歳以上二十歳未満ニ方ルヲ以テ刑法第八十一條ニ依リ當然宥減輕ヲ與ヘサルモノナルニ其處分茲ニ出テサリシハ畢竟訴訟書類即チ戸籍中偽造アリシニ職由セルモノニシテ即チ治罪法第四百三十九條第五項ノ原由アルモノトス(廣島重罪裁判所ノ言渡タシニ對シ立川盛次上告事件) 明治二十年五月二十一日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第八十一條

二號

被告峰次郎ノ所轄タル山梨縣西山梨郡甲府錦町外三十六ヶ町戸長役場ヨリ差出シタル戸籍簿寫ヲ閱スルニ被告ハ明治元年九月十九日出生ナレハ犯罪ノ當時即チ明治二十一年二月ニ在テハ十九年六月ノ未丁年者ナルヲ明確ナレハ刑法第八十一條ニ照シ減等ヲ爲スヘキニ原裁判茲ニ出テサルハ即チ相當ノ刑ヨリ重キ所ヲ言渡シタル者ニテ非常上告ハ其原由アル者ナルヲ以テ治罪法第四百三十五條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ減刑ス(福島輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ山田峰次郎非常上告事) 件明治廿一年五月三十日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第八十三條

承前
違警罪

草第九十六條 違警罪ノ事項ニ付テハ十六歳以上二十歳以下ノ幼者ニ對シテ刑ヲ減スルコト無シ十二歳以上十六歳以下ノ幼者ニ對シテハ一等ヨリ二等マテノ刑ヲ減輕ス可シ十二歳以下ノ幼者及ヒ瘡啞者ハ違警罪ノ刑ヲ免除セラル可シ(刑)第八十三條

第八十四條

草第九十九條 其他刑ノ免脫ノ場合及ヒ或ル重罪輕罪ニ設ケタル特別宥恕ノ場合ハ第二篇及ヒ第三篇ニ規定セラル可シ(刑)第八十四條

第二節 自首減輕

第八十五條 正文略之

草第九十七條 犯人自己ニ對シテ未タ何等ノ徵憑又ハ發覺ノ生セサリシ前ニ自カラ官廳ニ申告シ而シテ自カラ捕ニ就クハ法律上ノ宥恕アルヲ以テ刑一等ヲ減ス但シ第二篇ニ豫定シタル或ル重罪又ハ輕罪ノ發覺ニ付テ完全ノ宥恕アルハ此限ニ在ラス(刑)第八十五條第八十八條○草第三百三十一條第七項第四百十一條

第八十五條

一號

原裁判言渡書ヲ閱スルニ略(前)監視執行中明治廿一年二月中無斷家出シ爾來右執行ヲ

不論罪及ヒ減輕

監視規則

注意ノ申
告

送リノ事

第三期幼
者ノ減刑
ノ適用

犯ニハ自
首ヲ與ヘ
ス

遁レ居タル處云々トアリ抑監視執行者ハ刑法附則第二十七條ノ規定ニ遵ヒ毎月
所轄警察署ニ出頭シ謹慎ヲ表セサル可カラサルモノナレハ其執行ヲ遲カレ警察署
ニ出頭セサルヤ直ニ其犯罪タル事及ヒ犯人ノ誰タルコトヲ發覺スルハ論ヲ俟タス若
シ火災又ハ止ムヲ得サル事故アルニ依リ出頭シ能ハサル時ハ其事由ヲ証明セサル
可カラズ然ルニ被告ハ無斷家出シテ明治廿二年四月二十日首出スル迄一ケ年監視
ノ執行ヲ遁レ居テ其出頭シ能ハサル正當ノ理由モ証明セサレハ已ニ其犯人ノ被告
タルコト發覺シタルモノナル事實明白ナルニ其遁レタルハ天災又ハ其他意外ノ變ニ
原ツキタルヤ知レサルトノ理由ヲ付シ自首減等ヲ與ヘタルハ上告論旨ノ如ク擬律
錯誤ノ裁判(千葉輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ鈴木吉太郎上告事件明
治二十二年五月三十一日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第八十五條

二號

原判文ヲ閱スルニ被告増次郎ハ云々金錢ヲ賭ケ骨牌ヲ以テ博奕ヲ爲シ居ル現場巡
査ニ發見セラレシモ隙ヲ見テ其場ヲ逃走シ追テ自首シタル云々ト記載シアリ抑賭
博犯罪ヲ構成スルハ現行犯ニ限レル者ニシテ本件ノ如キハ其現場ヲ巡查ニ撞見セ
ラレタルキ已ニ賭博犯罪ヲ構成シタルモノナリ然ラハ遁走ノ後自首スルモ未發自
首ヲ以テ論ス可キ者ニアラス然ルニ原裁判所カ被告人カ賭博ノ現場ヲ巡查ニ撞見

賭博犯ハ
自首ヲ與
ヘス

セラレタルノ事實ヲ認メナカラ刑法第八十五條ヲ適用シ自首減等ノ處斷ヲ爲シタ
ルハ治罪法第四百十條第十項ニ該當スル破毀ノ原由アル不法ノ裁判ナリ(松山輕罪
言渡ニ對シ中増次郎上告事件明治廿二
年十月三十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

三號

自首減輕
ヲ與フル
ハ自首シ
タル犯罪
ニ止マル

抑自首減等ヲ與フルハ只其自首シタル犯罪ニ限ルモノニシテ假令之レニ附帶スル
モ其自首ニカ、ラサル限リハ只其附帶犯ノ故ヲ以テ自言ノ効ヲ生スルノ理ナシ故
ニ被告ハ監守盜ヲ自首スルモ其附帶ニシテ且ツ手段タル官文書偽造行使官印監用
ハ自首セサルヲ以テ自首減等ヲ與フ可キモノニアラサルナリ(大津重罪裁判所ノ言渡ニ
對シ代田正俊上告事件明
治十九年三月卅一日大
審院ニ於テ棄却ノ判決)

第八十六條

四號

贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シテ減刑ヲ受ルノ場合ハ刑法第八十六條ニ規定スル如ク
自首シタル上還給賠償シタル者ニ限リ本案ノ如キ發覺ノ后チ親屬代テ費消金ヲ賠
償シタル逆減等ノ利益ヲ受クルノ理ナキコト勿論ナレハ原裁判所カ減等セサルハ適
當ナリ(横濱輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ近藤錦之助上告事件
明治二十一年十一月二十五日大審院ニ於テ棄却判決)

不論罪及ヒ減輕

親屬贓物
ニ被害者
ニ價却ス
ノモ自首
ニ限ニア
ラス

第八十五條

五號

主任者ニ
對シテ自
首

戸長役場主任者ニ對シ官金竊取ノ始末内濟ヲ乞ヒタル書面ヲ送リタル以上ハ其官ニ自首シタルト一般ニシテ原裁判所カ刑法第八十五條ヲ適用シタルハ當然ナリ
(秋田重罪裁判所ノ言渡ニ對シ石川泰吉上告事件明治二十一年三月三十一日大審院公庭ニ於テ棄却ノ判決)

第八十五條

六號

強盜殺人
シテ自首セ
シハ謀
殺ト過
失殺トテ
區別シ以
テ減否ヲ
定ム可シ

抑強盜殺人ノ罪ハ殺意ノ有無ヲ問ハス刑法第三百八十條ノ支配ス可キモノナルヲハ多言ヲ俟タサル所ナリトス然レモ本按ノ如ク犯人ニ於テ自首シタル場合ニアリテハ其殺人ノ有意即チ謀殺故殺ニ出テタルカ將タ無意即チ過失殺ニ出テタルカ等ヲ審究シテ同第八十五條ニ照ラシ減輕ヲ與フルト否トヲ判定スヘキハ當然ナルニ原判文ヲ査閱スルニ被害者ニ傷ヲ負ハセ死ニ致シタル外部ノ所爲ハ之ヲ明示シタルモ其内部即チ犯意アリシヤ否ヤノ點ニ至リテハ毫モ之ヲ判示シアラサルヲ以テ果シテ自首減等ヲ與ヘタルハ當ヲ得タルヤ否ヤヲ鑑査スルニ由ナク到底代人カ附帶上告論旨ノ如ク治罪法第四百十條第九ニ所謂事實理由ノ不備アル不法ノ裁判タルヲ免ヌカレサルモノトス
(水戸重罪裁判所ノ言渡ニ對シ青木清松上告事件明治十九年七月九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第八十五條

七號

謀殺ニハ
自首ヲ許
ササルハ適
用

姦所ニ於テ姦婦ヲ負傷セシメタル者トシ且事實及ヒ證據ノ取捨ニ付論難スル所アルモ原裁判カ看認メタル事實ニ依レハ被告人ハ妻「キヨ」カ實家ニ至リ歸リ來ラサルハ姦夫ノアルニ依ルナラントノ疑心ヲ生シ「キヨ」カ薄情ヲ憤リ一度面會シテ歸家ヲ促シ彌聽カサレハ寧ろ殺害シテ其憤リヲ露サント豫メ所有ノ短刀ヲ携ヘ「キヨ」カ實家ニ至リ其寐所ニ忍入り「キヨ」ヲ呼起シ論スニ復歸スヘキ旨ヲ以テシタルニ應セサルヨリ殺意ヲ繼續シテ乃チ之ヲ殺サントノ意ヲ決シ短刀ヲ挺テ「キヨ」ノ面部ニ研付ケ負傷セシメタルモ其殺害ヲ遂ク得ストアリテ即チ其薄情ヲ憤リタル事實ヲ看認メタレハ之ニ對スル論旨ハ承審官ノ職權内ニ侵入シタル者ニシテ適法ノ原由ト爲スヲ得ヌ又擴張旨趣ハ殺意ノ繼續云々ニ付論究スルニ在ルモ前ニ掲ル判文ノ要旨ハ被告人カ意ニ應セサレハ殺害スルノ決意ニテ「キヨ」ニ面會シタルニ「キヨ」ニ於テ肯セサルヨリ其決意ヲ執行シタリト言フノ文詞ナルヲハ全文ヲ通讀シテ其豫謀ニ出タルヲ判然タリ而シテ本件ハ自首ヲ聽スヘキ限ニ非サルヲ以テ其論旨モ亦總テ相立タサル者トス
(廣島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ兒玉國次郎上告事件明治廿一年十二月十四日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第八十六條

自首減輕

勸解ハ辨
濟ニ均シ

事件ノ發
覺スルモ
其人ノ
發覺セサ
ル以上ハ
自首ノ効
アリ

訊問ヲ受
ケケルハ
シタルハ
自首ニア
ラス

八號

刑法第八十六條ニ所謂其財産ニ對スル罪ヲ犯シタルキ其贓物ノ全部償還ス可キニ
否ラスシテ幾分償還シ他ハ勸解ヲ得タルモノナル以上ハ全部ノ償還ト均シク自首
減ノ外尙二等減ヲ與フ可キナリ(東京知事院ノ言渡ニ對スル高山儀兵衛カ上告事
件明治十九年五月十一日大審院判決)

第八十五條

九號

既發自首トハ官及ヒ被害者ニ於テ犯人ノ誰タルコトヲ知ルカ若クハ發覺シアリタル
モノヲ云フニ在リ故ニ犯人ノ誰タルコト未タ知レサル以前(假令事件ハ)官若クハ被
害者ニ自首シタルキハ刑法第八十五條全第八十六條ニ依リ減等ヲ與フ可キモノナ
リ(山形縣裁判所ノ言渡ニ對シテ渡邊慶次郎カ上
告事件明治十九年六月廿三日大審院判決)

第八十五號

十號

被告カ中ノ島屯所へ自首シタル豫審終結言渡中第二ノ所爲ニシテ第三ノ所爲ハ當
該官ノ訊問ヲ受ケ初メテ其罪狀ヲ自白シタルモノ(大坂縣裁判所會議局ノ言渡ニ對シテ野
定吉上告事件明治廿年五月十日大審院ニ
於テ棄却
ノ判決)
自首ノ爲メ刑ヲ全免ス可キ場合アリ左ノ如シ

一貨幣偽造變造ノ情ヲ知り雇ヲ受ケタル職工雜役及ヒ房室ヲ給與シタル者其貨幣
行使前ニ自首シタル時(第九十二條)二偽証又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲シタル者其事件ノ裁
判宣告前ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時(第九十二條)三誣告ヲ爲シタル者被告人ノ
推問ヲ始メサル前ニ於テ自首シタル時(第九十五條)四地租條例ニ違犯ノ自首シタル時
(明治十七年三月
月第七號布告)五竊ニ米穀金銀貨株式及ヒ諸物品ノ限日賣買等ヲ爲シタル者自首シ
タル時(六富鐵賣買ニ關スル犯罪者自首シタル時但シ沒收ス可キ物件アル
場合ヲ除ク)
(明治十五年五月
第二十五號布告)

第八十六條 正文略之

第八十七條 正文略之

第八十八條 正文略之

草第九十八條 前條ニ同一ナル隨意ノ申告ノ場合ニ於テ他人ノ所有權即チ他人ノ
財産ニ對スル重罪又ハ輕罪ニ關シテ犯人其盜奪又ハ欺取シタル一切ノ物件ヲ隨意
ニ返還シ若クハ財産上ニ加ヘタル諸般ノ損害ヲ賠償シタルキハ前條ニ於テ一等ノ
減輕ヲ受クルノ外ニ刑二等ノ減輕ヲ受ク可シ
若シ其犯人物件ノ半分又ハ半分以上ノ返還又ハ賠償ニ非サレハ爲シ得サリシキハ
刑一等ノ減輕ノミ受ク可シ(刑第八十六條)

酌量減輕

承前返還
賠償

第三節 酌量減輕

第八十九條 正文略之

第二節 減輕情狀(酌量減輕)

減輕情狀

草第百條 總テ重罪輕罪又ハ違警罪ノ事項ニ於テ假令ヒ被告人ノ爲メニ一又ハ數多ノ法律上ノ宥恕アルキ又ハ被告人ノ負債ニ於ケル加重情狀アルキト雖モ常ニ裁判所ハ其有罪人ト認定セラレタル被告人ノ爲メニ減輕ス可キ情狀アルコトヲ明言スルコトヲ得(刑第八十九條○治罪法第四百八十九條○佛蘭西治罪法第三百四十一條)

第八十五條

一號

官印盜用ト公證文書偽造行使ノ罪ト俱發シ一ノ重キニ從フタル官印盜用罪ノミニ付二等ノ酌減法ヲ適用シ却テ其輕シトシ酌減セサル公證文書偽造ノ罪ヲシテ重罪ノ刑トナシ現存セシメタル筋合ナレハ付帶上告論旨ノ如ク其當ヲ得サル擬律ニシテ破毀ノ原由アルモノト裁定ス(浦和重罪裁判所ノ言渡ニ對シ市川喜太郎ノ上告事) (件明治廿一年二月十六日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第八十五條

二號

原裁判所カ借用金證書ヲ詐爲シ之ニ公證文詞ヲ偽造シタル事實ヲ以テ私文書偽造

數罪俱發ノ酌量法

數罪俱發例ノ酌量

官文書偽造ノ二罪ト爲シ論決シタルハ擬律錯誤ト云ハサルヘカラス何トナレハ戶長カ契約證書ニ與書割印ヲ爲スハ其證書全部ニ對シ公證スルモノニシテ既ニ公證スレハ則チ公證文書ニシテ別ニ私證書ナルモノアラサルナリ故ニ私證書ヲ偽造シ尙ホ之ニ公證ヲ偽造スル場合ニ成立スルハ獨リ公證文書偽造ノ罪ノミニシテ私證偽造ノ罪ハ其跡ヲ停メサルモノナレハナリ又忠平ハ原諒スヘキ情狀アルヲ以テ酌量減輕シタルハ數罪ニ付爲シタルモノナルヘシ然ルニ原判文ヲ觀ルニ前文ニハ一ノ重キ官文書變換ノ所爲ニ從ヒト爲シ后文ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減シト爲シ唯一ノ重キ官文書變換ノ罪ノミニ付減等シ他ノ罪ニ及ハサルハ是亦擬律錯誤タルヲ免レス(德島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ龜井嘉五郎山田忠平等ガ上) (告事件明治二十一年二月十七日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第八十九條

三號

又刑法第八十九條第九十條ハ刑法ノ總則ニシテ原判官カ情狀ヲ酌量シテ本刑ニ一等ヲ減シタルハ該條ノ法規ニ則リタルコト明カナレハ之ヲ明記セサルモ罪ノ有無ニ關係ナキヲ以テ敢テ破毀ヲ要スル限ニ非ス(千葉重罪裁判所ノ言渡ニ對シ山崎紋藏上告事) (件明治二十一年七月七日大審院ニ於テ棄却判決)

第八十五條

四號

酌量減輕

總則ハ判文ニ明示セサルモ不當ニアラス

情狀原諒
トテ上告
ト理由ト
ナスヲ得
ス

情狀原諒セサルハ不法ナリト云フニアレハ之レヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得ス何
トナレハ酌量減輕ヲ與フルト否トハ裁判官ノ特有スル職權ナレハ之ヲ與ヘサル
テ他ヨリ彼此容喙スルコトヲ得ザレハナリ(千葉縣裁判所ノ言渡ニ對シ花島清助上告事件
明治廿年五月十四日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第八十九條

五號

數罪俱發トシ一ノ重キ公證偽造行使ノ罪ニ從ヒ情狀ヲ酌量シ輕懲役ノ本刑ニ一等
ヲ減シテ官印盜用罪ノ刑期ヲ依然トシテ存シ置キ之ヲ併テ減等セサルハ是亦擬律
錯誤アル不法ノ裁判ナリトス(安濃津重罪裁判所ノ言渡ニ對シ藤田三郎平上告事
件明治二十一年六月廿二日大審院ニ於テ破毀判決)

第九十條 正文略之

草第一百一條 裁判官ニ於テ減輕スヘキ情狀ヲ認定シタルハ本刑ヲ少ナクモ一等
多クハ二等ヲ減ス可シ但シ卑族親其尊族親ニ對スル重罪及ヒ輕罪ニ關シテハ此限
ニ在ラス(刑第九十條○草第四百八條○佛刑第四百六十三條第四百八十二條)

第五章 再犯加重

第九十一條 正文略之

第九十二條 正文略之

第五章 刑ヲ加重スル理由

第一節 再犯

草第一百二條 既ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者更ニ重罪ヲ犯スハ之ニ負ハシム可
キ有期ノ重罪刑ハ其最長期ヲ言渡シ若シ又法律上既ニ最長期ニ處セシキハ刑一等
ヲ增加ス(刑第九十一條○草第八十一條○佛刑第五十六條)

(此增加ハ常ニ三犯ノ場合ニ言渡サル可シ)

若シ其者輕罪ノ刑ニテ罰ス可キ重罪又ハ輕罪ヲ犯スハ輕罪ノ刑一等ヲ增加ス

(刑第九十二條○草零○佛刑第五十七條)

草第一百三條 既ニ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタルニ因リ禁錮ニ處セラレタル者輕罪又
ハ輕罪ノ刑ニテ罰ス可キ重罪ヲ犯スハ該當ス可キ刑ニ一等ヲ加フ可シ(刑第九

十二條○草零○佛刑第五十八條)

第九十條

一號

煙草稅則ノ如キ專ヲ納稅上ニ關シ其規則ヲ設ケタルモノナレハ即チ同稅則第三十
一條ニ特定シアル如ク假令初犯該稅則ニ依リ處斷セラレ再犯尙ホ同稅則ヲ以テ處
斷スヘキニ該當スル場合ハ勿論再犯普通刑法若シクハ他ノ單行法律中刑法ノ再犯
加重例ヲ用ヒスト特記シアラサル規則ニ照ラシ處斷スヘキ時トヲ問ハス煙草稅則

酌量減輕

古例ハ商
例ハ刑加
ノ再犯引
用スルモ
初犯煙草
稅則犯ナ

同罪ノ再
犯

承前

三犯
重罪ノ再
犯初メ重
罪ヲ犯シ
後輕罪ヲ
犯ス

承前

數罪俱發
セシ犯罪
ノ減輕法

ルハ加
重ノ限ニ
アラス

違犯ノ罪ニ就テハ普通刑法ノ總則ニ定メタル再犯加重例ヲ適用スヘカラサルハ明瞭ナルヲ以テ本按古物商取締條例中ニ刑法ノ再犯加重例ヲ用ヒスト特記シアラサルモ初犯煙草稅則ニ依リ處斷セラレタルモノニ付原裁判所カ再犯加重例ヲ用ヒスシテ處斷シタルハ相當ノ裁判ナリトス(長野輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ中島仙吉上告事件 明治廿二年四月十一日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第九十二條

二號

再犯加重
ヲ適用セ
ザリシ裁

原裁判所ハ其判文前段ニ被告ハ明治十七年七月三日詐欺取財未遂ノ科ニ因リ重禁錮一月十五日罰金三圓監視六月ノ處刑ヲ受ケナカラ猶改悛スル所ナク云々ト再犯ノ事實ヲ認テナカラ后段擬律ノ點ニ至リ刑法第三百九十五條第一項ヲ適用シタルノミニシテ再犯加重ヲ用ヒサルハ不當ナリ(長野輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ丸山淺之丞上告事件 明治二十一年七月十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第九十一條

三號

誤テ再犯
加重例ヲ
適用スル
モ敢テ生
サレ上ハ
破毀ノ限
ニアラス

原判文ヲ閱スルニ被告嘉四郎カ第三ノ所爲ハ明治二十一年二月十一日ニシテ竊盜事件ニ付處斷ヲ受ケタルハ全年三月三日ナレハ之ヲ再犯トスルコトヲ得サルハ勿論ナルニ其法律適用ニ至リ岡田嘉四郎カ第三ノ所爲ハ全第三百九十九條ニ照シ再犯ニ係ルヲ以テ全第九十二條ニ依リ一等ヲ加ヘ云々トアルハ全ク錯誤ニ出タルモノ

同上
再犯

トス然レモ此點ハ結局一ノ重キ強盜罪ニ從ヒ處斷シタルモノナレハ刑ニ影響ナキ耳ナラス末段但書ニ依レハ刑法第二百二條ヲ適用シ前發ノ刑ヲ本刑内ニ通算シアリテ別ニ何等ノ利害ヲ及ボサ、ルヲ以テ破毀スルノ限リニ在ラストス(大阪重罪裁判所 金正嘉吉川直太郎岡本惣次郎杉本八百藏岡田嘉四郎等上告事件明治二十一年十月六日棄却ノ判決)

第九十三條 正文畧之

草第四百條 違警罪ノ再犯ノ場合ニ於テハ該當ス可キ刑ニ一等ヲ增加ス

然レトモ更ニ犯シタル違警罪ハ初犯ノ年内ニ係リ且初犯ノ時ト同一ノ違警罪裁判所ノ管區内ニテ犯セシキニ非サレハ刑ヲ增加セス(刑第九十三條○草零○佛刑第四百七十四條第四百七十八條第四百八十二條第四百八十三條)

第九十四條 正文畧之

草第四百八條 初次ノ處斷再犯ノ犯罪ノ時ニ廢棄ス可カラサルモノトナリタルニ非サレハ再犯ノ爲メノ増加ヲ用ユルコトナシ(刑第九十四條)

第九十五條 正文畧之

草第一百五條 初犯ノ刑期中ニ更ニ罪ヲ犯セシキハ左ニ掲クル諸刑ヲ受ケシム可シ第一 若シ刑ノ一カ(初犯若クハ再犯ヲ云フ)無期ノ徒刑ナルキハ實際此徒刑ノミヲ受ケシム可シ但シ刑ノ一般ノ規則ニ因テ允許シタル懲戒ノ處分ヲ爲スハ此限ニ在ラス

刑ノ合併
ニ付キ服
從ス可キ
順序

酌量減輕

第二 若シ二刑中ノ一無期ノ流刑ニシテ其他ノ一ハ有期ノ流刑又ハ禁獄ノ二種ノ一ナルキハ實際無期ノ刑ノミヲ受ケシム可シ(若シ此同一ノ場合ニ於テ二刑中ノ一カ懲役ナレハ國事犯ノ刑ヲ科スル前ニ其懲役ノ刑ヲ受ケシメ然ル後チ國事犯ノ刑ヲ科ス可シ)

第三 其他重罪輕罪又ハ違警罪ニシテ自由剝奪ノ刑ニ該ルキハ先ツ其使役ニ服スル刑ヲ執行シ而ル後チ漸次其他ノ刑ヲ受ケシム若シ二ツナカラ(初犯再犯トモ)使役ニ服ス可キモノナレハ受刑者ハ先ツ其最モ重ク最モ長キ期限ノ刑ヲ受ク可シ若シ又何レモ使役ニ服セサルモノナレハ受刑者ハ先ツ期限ノ最モ長キモノヲ受ク可シ

第四 罰金科料ハ合併シテ科ス可シ(刑第九十五條)

第九十六條 正文略之

第九十七條 正文略之

第九十八條 正文略之

草第六六條 陸軍又ハ海軍ノ裁判所ニテ宣告シタル刑ハ普通法ニ從フテ處斷ヲ經タル重罪又ハ輕罪ニ非サルキハ通常裁判所ニテ裁判シタル再犯ノ犯罪ニ付キ刑ヲ增加スルコトナカル可シ(刑第九十六條○草、零○佛刑第五十六條第八項)

陸海軍ノ法

外國ノ裁判言渡

特赦ノ刑ヲ廢止スルコト

加重及ヒ減輕ノ原由ノ合併

草第六七條 外國ノ裁判所ニテ言渡シタル處斷ハ此法典第四條ニ豫定シタル重罪又ハ輕罪ノ一ニ係ルキニ非サレハ再犯ノ爲メ加重スルコトナシ(刑、零)
草第九九條 最初ノ犯罪ニ特赦ヲ爲セシカ又ハ法律上之ヲ罰スルコトヲ廢止セシキハ再犯ノ爲メノ加重ナルコトナシ
(若シ新法ニテ該犯罪ノ刑ノ減輕ノミヲ爲セシキハ該犯罪ハ再犯ニ關シテ刑ノ減輕ト同一ノ影響ヲ及ホスモノナリ(刑、零))

第六章 加減順序

第九十九條 正文略之

草第八十八條 犯罪ノ模様ニ因リ刑ノ漸次ノ加重若クハ減輕ス可キ情狀ノ數多ノ原由アリテ其原由ノ一ハ特別ニシテ其他ハ一般(普通)ノモノタルキハ其特別ノ原由ヲ最初ニ適用ス可シ

若シ又同時ニ加重及ヒ減輕ス可キ情狀ノ原由ノ存スルキハ先ツ其(一般又ハ特別)ノ原由ノ同一アルヤ否ヲ考査シ以テ加重ス可キモノ、一等ト減輕ス可キ情狀ノ一等トノ相殺ヲ爲ス可シ(刑第九十九條)

第九十九條 一號

加減順序

特別ノ加重ノ適用

被告ハ二人以上共ニ犯シタルモノニシテ特別ノ加重ナレハ其加ヒタルモノヲ以テ本刑ト爲スヘキニ其茲ニ出テサルノミナラス刑法第九十九條ヲ引用セザリシハ違法ノ裁判ナリトス仍テ破毀更正ス可キモノナリ(松江輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ森山午太郎上告事件廿一年九月十八日大審院ニ於テ毀棄ノ判決)

第九十九條
第二百九十八條

二號

加減法ノ解釋

刑法第二百九十八條ノ誤殺犯ハ乙者ヲ殺スノ意思ニテ丙者ヲ以テ乙者ナリト誤認シ殺傷シタル場合ニシテ今原判文ヲ見ルコト被告カ卯三郎ヲ傷シタル事實ハ乙吉ヲ差押ヘタル際卯三郎カ馳セ來リシニ乙者ニ切リ掛ル及先キ觸レ過チテ卯三郎ニ負傷セシメタルモノニシテ其人ヲ誤認シ負傷セシメタルモノニアラス過失ニ出テタルヲ明瞭ナレハ故殺ヲ以テ論ス可シトノ論旨ハ理由ナキモノトス然レトモ刑法第三百十一條ノ宥恕減輕ハ犯罪ノ種類ニ依リ特別ニ定ムル所ノ減輕ニシテ一般ノ犯罪ニ適用ス可キ總則ノ減輕ニアラサルヲ以テ其減等ヲ爲シタルモノヲ本刑ト爲シ而シテ後ヲ總則ノ酌量減輕ヲ爲ス可キモノナルコトハ刑法第九十九條但書ノ法文ニ明確ナリ然ルニ未遂犯ノ減等ヲ爲シテ本刑ト定メ而シテ特別ノ宥恕減輕ト總則ノ酌量減輕トヲ通減シ處斷シタルハ減輕法ヲ誤マリタル擬律錯誤ノ裁判ナリトス

(熊本重罪裁判所ノ言渡タシニ對シ植原庄太郎上告事件)
明治二十二年三月二十四日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第九十九條

三號

加減ノ順序ハ從犯未遂犯ノ減等其他各本條ニ記載シタル特別ノ加重減輕ハ其加減シタルモノヲ以テ一等トナスト故ニ二人以上竊盜ヲ犯シタルハ其加重ヲ本刑トシ其他ニ減刑ノアル如キハ更ラニ減ス可キモノトス(秋田輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ熊谷嘉平上告事件明治十九年十月二十八日大審院判決)

第九十九條

四號

再犯加重宥恕減輕ノ如キ總則ノ加減法ハ本刑ヲ基礎トシ其四分ノ一ヲ加減スルモノニシテ其加ヘタル所ノ刑期ヲ基礎トシ其四分ノ一ヲ一等トナシ減輕スルモノニアラサルナリ(罪裁判所ノ言渡ニ對シ野澤辰吉上告事件明治二十年 月 日大審院判決)

第九十九條

五號

賭博犯ノ如キハ更ラニ行政處分ニ屬スルモ其所屬以前刑法ノ下ニアリテ處斷ヲ受ケタルニ於テハ之ヲ再犯トシテ論ス可シ例ヘハ初犯賭博犯ニシテ再犯失火ノ如キ

加減順序

加減例ノ適用

加減例ノ適用

再犯加重ノ適用

是レナリ(罪裁判所ノ言渡ニ對シ三井田彌左衛門上告事件明治二十年三月二十九日大審院判決)

第七章 數罪俱發

第一百條 正文略之

第六章 一人ノ所犯ニ係ル數罪ノ俱發

刑ヲ併科セサル事最モ重キ刑

承前

最下點最高點

草第一百十二條 同一ノ起訴中一人ニシテ未タ處斷ヲ受ケサル數罪ノ犯者ナリト認メラレタル時ハ其數罪ニ該ル可キ刑中ニテ最モ重キ刑ノミヲ宣告ス可シ但シ最モ期限ノ長キモノヲ以テ常ニ刑ノ最モ重キモノト看做ス可シ

若シ其刑ノ一ハ禁錮ニシテ他ノ一ハ罰金ナル時ハ禁錮ヲ以テ常ニ最モ重キ刑ト看做ス可シ

若シ其科ス可キ禁錮又ハ罰金ノ諸刑ノ最下點ト最高點トニ差異アル時ハ處斷ハ最モ重キ最下點以下ニ降ルヲ得ス併シ最モ重キ最高點ニ達スルヲ得(刑)第一百條
○草、零〇佛治、第三百六十五條第二項

第一百條

一號

上訴中ニ處斷スル犯罪ハ數罪俱發例

前發ノ罪ニ對スル裁判言渡ハ上告中ニ係リ未タ確定ニ到ラサル内餘罪發覺シタル片ハ數罪俱發例ニ處ラス其犯罪ニ相當ノ刑ヲ言渡ス可キモノトス何トナレハ前發

ヲ適用スルニ及ハス

ノ罪上告ニ依リ免訴又ハ無罪トナル片ハ單ニ後發ノ罪ニ從ヒ其刑ノ執行ヲ爲サ、ルヘカラサレハナリ然而シテ前發後發ノ罪各々俱ニ確定シタルカ如キ場合ニハ執行命令官ニ於テ刑法第百條若クハ第百二條ノ規定ニ從ヒ區處スヘキモノナルヲ以テ本按事件ヲ單ニ刑法ノ正條ニ問擬シ俱發例ヲ用ヒサリシハ適法ノ裁判ナリトス(宮崎輕罪裁判所ノ言渡ニ對スル追田市五郎上告事件) 明治十九年十月廿九日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第一百條

二號

數罪俱發一ノ重キニ從テ處斷スル場合ニ於テ其重トナシタル刑ノ範圍ヲ出テ處斷スルカ如キハ判官ノ權内ニアラサルナリ故ニ本件ノ如ク其最短期ヲ私重偽造ノ最短期タル六月ヲ下リテ五月ニ處シタルハ擬律ノ錯誤ナレハ於本院之ヲ更正ス(富山裁判所ノ言渡ニ對スル稻垣完吉藏野間太郎上告事件) 明治十九年十一月十九日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第一百條

三號

明治十四年第七拾貳號布告ニ依リ鳥獸獵規則ヲ犯シタル罪ハ他罪ト俱發セシキ刑法第百條ニ依リ處分スヘキモノニ非ラストス然ラハ原始審官カ被告ノ第二第三ノ所爲ヲ刑法第百條ニ依リ處分セシハ上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ナリトス(京都輕罪裁判所ノ數罪俱發)

鳥獸獵規則ハ他ノ罪ト俱發スルモ刑罰第百條ニ適用セ

刑ノ範圍ヲ出テタル處斷ハ判官ノ權

鳥獸獵規則ハ他ノ罪ト俱發スルモ刑罰第百條ニ適用セ

言渡ニ對シ蔽内甚吉上告事件明治二十一年六月廿九日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第三百九十九條第二項

四號

各本條ニテ論ス云々
特例ニハ更ニ數ハ俱用ス可キモノニテ

原判文ヲ檢スルニ被告ハ詐欺取財ノ目的ヲ以テ私書ヲ變造シタリトノ事實ヲ認メナカラ刑法第百條ニ照シ數罪俱發ノ例ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤タルヲ免レス何トナレハ詐欺取財ノ手段方法トシテ文書ヲ偽造變造シタルモノハ刑法第三百九十九條第二項ニ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ストノ特例ヲ定メタルヲ以テ此ノ場合ニ於テハ刑法第百條ノ例ヲ適用スヘキモノニ非サレハナリ
(岐阜輕罪裁判所ノ言渡シ事件明治二十一年十一月二十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)
第三百九十九條第三項
治罪法第四百十條第十一項

五號

輕罪ノ所犯情狀重キ者ハ刑ヲ重シメテ
刑期モ重シメテ
長短相錯綜スルヲ以テ犯情ノ重キニ從フヘク其犯情ノ重キ者ハ刑期モ亦重キ固ヨリ論ヲ俟タス然ルニ原裁判ハ一ノ犯情最重キ監禁ノ罪ニ從ヒ處斷シタルニ却テ他ノ一罪ニ適用スヘキ刑ヨリ輕キ刑ヲ言渡シタル上告第一ノ論旨ノ如ク越權ノ處分

數罪俱發一ノ重キニ從フハ其刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲スヘキモノニシテ刑法第百條末項ニ輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ストアルハ禁錮刑期ノ範圍長短相錯綜スルヲ以テ犯情ノ重キニ從フヘク其犯情ノ重キ者ハ刑期モ亦重キ固ヨリ論ヲ俟タス然ルニ原裁判ハ一ノ犯情最重キ監禁ノ罪ニ從ヒ處斷シタルニ却テ他ノ一罪ニ適用スヘキ刑ヨリ輕キ刑ヲ言渡シタル上告第一ノ論旨ノ如ク越權ノ處分ナリ
(鹿兒島輕罪裁判所ノ言渡シ對スル柴田銀三郎上告事件)
明治二十一年三月十五日大審院ニ於テ破毀ノ判決
第三百九十九條第二項

六號

各本條ニテ論ス云々
重キ者ハ刑ヲ重シメテ
刑期モ重シメテ
長短相錯綜スルヲ以テ犯情ノ重キニ從フヘク其犯情ノ重キ者ハ刑期モ亦重キ固ヨリ論ヲ俟タス然ルニ原裁判ハ一ノ犯情最重キ監禁ノ罪ニ從ヒ處斷シタルニ却テ他ノ一罪ニ適用スヘキ刑ヨリ輕キ刑ヲ言渡シタル上告第一ノ論旨ノ如ク越權ノ處分

刑法第三百九十條第二項ニ因リテ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタルモノハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ストアリテ文書ヲ偽造シテ詐欺取財ノ手段ト爲シタルモノハ二罪中ノ重キニ從フヘク即チ文書偽造詐欺取財ヲ併セテ一罪ト爲シテ論ス可キ特例ヲ設ケタルモノニシテ詐欺取財ト文書偽造トヲ區別シテ二罪ト爲シ數罪俱發例ヲ適用スヘキモノニ非ラス本按事件ハ民事原告人ニ於テ被告二名ハ公証文書ヲ偽造シテ金圓ヲ騙取シタル罪アリトシ官文書偽造及ヒ詐欺取財ノ告訴ヲ爲シタルモノナレハ被告二名ノ所爲果シテ告訴狀ニ記載スル如キ犯罪アリトセハ公証文書偽造ノ本條ニ照依シ處斷ス可キモノニシテ別ニ詐欺取財條ニ問擬ス可キモノニ非ラス而シテ民事原告人ハ其犯罪ヨリ生スル損害賠償ヲ請求スル爲メ官文書偽造罪ノ公訴ニ附帶シ私訴ヲ爲シタルヲ以テ其民事原告人タルノ資格アルハ固ヨリ論ヲタサルナリ然ルニ原會議局ハ故サラニ文書偽造ト詐欺取財トヲ區別シテ二罪ナリトシ其詐欺取財事件ハ已ニ期滿免除ヲ得私訴權消滅シタルモノトシ公証文書偽造事件ハ其被害者ニ非ラサレハ私訴權ヲ有セサルモノトシ精ニ民事

數罪俱發

原告人タルノ資格ナシト断定シ其故障論旨ノ當否如何ヲ判決セスシテ直チニ棄却ノ言渡ヲ爲シタルハ越權ノ處分アル不法ノ判決ナリトス(德島輕罪裁判所會議局ノ言渡ニ對シ大道淺次郎山田多右衛門上告事件明治廿一年十月十一日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第百條

七號

刑法第三百九十條ヲ適用シナカラ同第三百九十四條ヲ適用セサルハ不法ナリト云フモ原判文ヲ閱スルニ本按被告ノ所爲ハ詐欺未遂及ヒ印影盜用私書偽造ノ三罪俱發セルモノトシ一ノ重キ印影盜用ノ罪ニ從ヒ處斷シタルモノナリ然ラハ其ノ輕キ詐欺未遂ノ所爲ニ對シ刑法第三百九十四條ヲ適用セサルモ刑ニ影響ヲ及ホスベキ者ニ非ラサレハ以テ破毀ノ理由ト爲スニ足ラス(大坂扣訴院ノ言渡ニ對シ川上藤左衛門上告事件明治廿一年五月三十日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

刑法第百條

八號

爲換券偽造行使郵便局印盜印ノ罪輕減シテ輕罪ノ刑ニ入タルニ附加刑ノ法條ヲ適用セサルハ擬律錯誤ナリト陳辨スレトモ本件ハ數罪俱發一ノ重キ爲換報知書偽造行使ノ罪ニ從テ論シ而シテ此重ト認メタル罪ニ付テハ刑法第二百七條ヲ適用シ監

他ノ輕キ罪ニ附加刑ヲ適用セザルニシテ

刑ニ影響ヲ及ボサハル者ハ之ヲ適用セザルモ破毀ノ原由トナラズ

視一年ニ付シタレハ其輕ト認メタル他ノ二罪ニ付附加刑ノ法條ヲ適用セサルモ刑ノ結果上別ニ支障ヲ生セサレハ破毀ノ原由ト爲スニ足ラス(東京重罪裁判所ノ言渡ニ對シ飯久保長爲次郎ノ上告事件明治二十一年二月二十五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

明治十四年七十二號布告 刑法第百條

九號

本按被告ノ所爲ハ一ツハ刑法第九十九條ニ該ルモノト認メ一ハ賣藥印紙稅則第六條ニ當ルモノト認メナカラ刑法第百條ニ依リ一ツノ重キニ從ヒ處斷セシハ上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤ナリトス何トナレハ其罪質異ナリ一ハ規則犯ナルヲ以テ明治十四年七十二號布告ニ依リ數罪俱發ノ例ヲ用ユルヲ得サレハナリ依テ原裁判ハ治罪法第四百十條ニ該當スル瑕瑾アルモノナリ(和歌山輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ川西龜太郎上告事件明治廿一年五月廿二日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第百條

十號

被告カ外數名ト共ニ大平惣太郎ヲ毆打シタルハ唯タ其場所ヲ異ニスル迄ニシテ其所爲始終繼續シテ被害者ノ迹クルヲ追跡シ毆打シタル事實ナレハ即チ一個ノ犯罪ナリトス故ニ數罪俱發例ヲ適用ス可キモノニアラス(弘前輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ木立惣太郎上告事件明治二十一年十二月七日

數罪俱發

明治十四年七十二號布告ノ適用

毆打ノ續ハ一罪トシテ看做ス可

大審院ニ於テ棄却ノ判決

第一百條

十一號

數罪俱發例ヲ適用セハ必ず重キ罪ヲ示ス可シ

原判文中二箇ニ認メタル所爲ハ等シク二人以上持兇器強盜ノ罪ナレハ一ノ重キニ從テヘキハ勿論ナルニ原裁判ハ以上ノ事實ヲ認メ刑法第百條ヲ適用シナカラ其重キ罪ヲ指定セサルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十二適合スル破毀ノ原由アル者トス(大坂重罪裁判所ノ言渡シニ對シ加藤兵部森弁藏等カ上告事件明治二十一年十月十六日大審院ニ於テ破毀判決)

刑法第百條

十二號

當時上告中ノ事件ヲ數罪俱發例ニ依テサリシハ失當ニアラズ

被告人明治二十一年五月廿一日ノ犯罪ニ付同年六月廿五日大坂輕罪裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ對シ被告人ハ當時上告人中ナレハ該事件ハ未タ罪ノ有無ニ付確定セサルヲ以テ原裁判カ右事件ヲ數罪俱發ノ例ニ依テサリシハ當然ノコナリトス(大坂輕罪裁判所ノ言渡シ對シ田中喜三郎上告事件明治二十一年十月十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

刑法第百條

十三號

刑法第百條ヲ擧ケ

大津輕罪裁判所カ罪ノ輕重ヲ比照スルニ當リ刑法第百條ヲ擧ケサリシモ其ノ輕重

サリシモノ一ノ重キニ從テ處斷セシモノナレハ該條ノ掲否ハ何タル影響ナキニ付斷シタルハ控訴院カ之ヲ認可シタルハ職權ナシ違背罪

第一百一條 正文略之

草第十三條 數多ノ違背罪ノミノ俱發ノ場合ニ於テハ該ツ可キ諸刑ハ併合シテ宣告ス可シ(刑第百一條)

第一百二條 正文略之

最高點ヲ補充スル事

草第百十四條 (若シ種々ノ犯罪ヲ別々ノ公訴ニ因テ裁判シ而シテ既ニ最モ重キ刑ヲ適用セシ時ハ其他ノ刑ハ毫モ之ヲ宣告セス然レトモ同一ノ刑ヲ負ハシム可キ時ハ裁判所ハ其刑ノ最高點ヲ科スルヲ得)

最モ輕キ刑ノ混同及ヒ差引

既ニ宣告シタル刑ヨリ最モ重キ刑ヲ第百十二條ニ從ヒ適用ス可キ時ハ最モ輕キ刑ハ混同ニ依テ消滅ス可シ、自由剝奪ノ刑ニ付キ實際負ハシメタル時日ハ一日ヲ以テ一日ニ數ヘ之ヲ最モ重キ刑ヨリ差引ス可シ、實際拂フタル罰金アリテ而シテ(新刑ニ)毫モ之ヲ負ハシメサル時ハ其罰金ヲ返還スルカ又ハ新タナル罰金一層高額ナル時ハ此罰金ヨリ差引ヲ爲ス可シ(刑第百二條○草、零○佛治、第二百七十九條)

數罪俱發

犯罪

ハ其最モ重大ナル罪ノ刑ノミヲ宣告ス(刑、零)

第二百二條

一號

刑法第二百二條ハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ其裁判確定シタル後餘罪ノ發シタルモノニ適用スヘキ律意ニシテ未タ確定セサル判決ニ關係スル餘罪ハ全法第百條ニ依リ處分スルヲ相當ナリトス今原判文ヲ閱スルニ監視規則違犯ノ罪ニ依リ欠席ノ儘重禁錮二月ノ刑ニ處セラレ其裁判未タ確定セサルモノナリトアリテ即チ前ニ受ケタル判決ノ確定セサル事實理由明白ナレハ之ニ對シ刑法第百條ヲ適用シタル原裁判ハ相當ニシテ擬律錯誤ト云フヲ得ス(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ狩野熊之助上告事件) 明治廿一年十月廿六日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第二百二條

二號

刑法第二百二條ハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ確定ノ後餘罪後ニ發シタル時適用ス可キ法條ニシテ被告カ論スル如キ疑キニ一罪發シ裁判ヲ受ケタルモ其裁判ニ對シ扣訴中ナレハ未タ確定セサルニ付假令本件被告事件ハ餘罪ニ該ルモ同第二百二條ヲ適用スルモノニ非ラサルナリ(廣島輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ三村文助久保田鶴次森重九) 耶上告事件明治二十年四月三十日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第二百二條第二項

刑法第百二條ノ釋

余罪ノ釋

監視規則ノ再犯加刑ノ重ハ其刑加中ナルヲ要スル特別加刑ナルモ重ナルモ余罪トシタルハ猶再犯ト看做ス

再犯ノ罪處斷後ニ發シタル初犯ノ包藏罪ト比較ス可キ者ニ對シテ東京控訴院ハ之ヲ同條第一項ニ依據シ再犯ト初犯ト包藏罪トノ刑期ヲ比較シテ是亦第一項ノ比較法ヲ誤レル者ナル可シ何トナレハ第一項ニ所謂一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ云々トハ其餘罪トハ前發罪判決ノ刑期ト比較シ處斷ス可キモノニシテ其緣故ナキ再犯ノ刑比較スヘキモノニアラサレハ

三號

刑法第二百二條第二項ノ再犯ノ罪トアルハ何ソ必スシモ加重スヘキ場合ノミヲ指シタルニ非ラズシテ其加重セサルノ再犯ト共ニ發シタル場合モ尙ホ適用スヘキ者トス故ニ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪ト再犯トシテ加重セサル犯カ監視規則違犯ノ罪ト共ニ發シタルカ如キハ其監視規則違犯ハ特別ノ加重ニシテ刑法第百五十六條ニ定ムル如ク其刑期中ノ再犯ナルニ非スシテ再犯トシテ加重セサル者ナルモ尙其監視規則違犯ノ罪ト發シタルモ亦適用スヘキ者トス(高知輕罪裁判所ノ言渡) 上告事件明治十九年四月廿九日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第二百二條第一項

四號

刑法第二百二條第二項ハ第一項ニ關係ナキ一種ノ特別法ニシテ再犯ノ時ニ限り適用ス可キ法律ニシテ異時即チ再犯ノ罪處斷後ニ發セシ初犯ノ包藏罪ト比較ス可キ者ニアラス而シテ東京控訴院ハ之ヲ同條第一項ニ依據シ再犯ト初犯ト包藏罪トノ刑期ヲ比較シテ是亦第一項ノ比較法ヲ誤レル者ナル可シ何トナレハ第一項ニ所謂一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ云々トハ其餘罪トハ前發罪判決ノ刑期ト比較シ處斷ス可キモノニシテ其緣故ナキ再犯ノ刑比較スヘキモノニアラサレハ

數罪俱發

犯罪

ハ其最モ重大ナル罪ノ刑ノミヲ宣告ス(刑、零)

第二百一一條

一號

刑法第百
二條ノ解

刑法第百二條ハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ其裁判確定シタル後餘罪ノ發シタルモノニ適用スヘキ律意ニシテ未タ確定セサル判決ニ關係スル餘罪ハ全法第百條ニ依リ處分スルヲ相當ナリトス今原判文ヲ閱スルニ監視規則違犯ノ罪ニ依リ欠席ノ儘重禁錮二月ノ刑ニ處セラレ其裁判未タ確定セサルモノナリトアリテ即チ前ニ受ケタル判決ノ確定セサル事實理由明白ナレハ之ニ對シ刑法第百條ヲ適用シタル原裁判ハ相當ニシテ擬律錯誤ト云フヲ得ス(大坂輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ野熊之助上告事件) 明治廿一年十月廿六日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第二百一一條

二號

余罪ノ解

刑法第百二條ハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ確定ノ後餘罪後ニ發シタル時適用ス可キ法條ニシテ被告カ論スル如キ爰キニ一罪發シ裁判ヲ受ケタルモ其裁判ニ對シ扣訴中ナレハ未タ確定セサルニ付假令本件被告事件ハ餘罪ニ該ルモ同第百二條ヲ適用スルモノニ非ラサルナリ(廣島輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ三村文助久保田鶴次森重九) 耶上告事件明治二十年四月三十日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第二百一一條第二項

三號

監視規則
ノ再犯加
重ハ其刑
期中ナル
ヲ特別加
重ナルモ
余罪ト發
シタルハ
ハ猶再犯
ト看做ス

刑法第百二條第二項ノ再犯ノ罪トアルハ何ソ必スシモ加重スヘキ場合ノミヲ指シタルニ非ラズシテ其加重セサルノ再犯ト共ニ發シタル場合モ尙ホ適用スヘキ者トス故ニ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪ト再犯トシテ加重セサル犯カ監視規則違犯ノ罪ト共ニ發シタルカ如キハ其監視規則違犯ハ特別ノ加重ニシテ刑法第百五十六條ニ定ムル如ク其刑期中ノ再犯ナルニ非スシテ再犯トシテ加重セサル者ナルモ尙其監視規則違犯ノ罪ト發シタルモ亦適用スヘキ者トス(高知輕罪裁判所ノ言渡) 上告事件明治十九年四月廿九日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第二百一一條第一項

四號

刑法第百二條第二項ハ第一項ニ關係ナキ一種ノ特別法ニシテ再犯ノ時ニ限り適用ス可キ法律ニシテ異時即チ再犯ノ罪處斷後ニ發セシ初犯ノ包藏罪ト比較ス可キ者ニアラス而シテ東京控訴院ハ之ヲ同條第一項ニ依據シ再犯ト初犯ノ包藏罪トノ刑期ヲ比較シタリ是亦第一項ノ比較法ヲ誤レル者ナル可シ何トナレハ第一項ニ所謂一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ云々トハ其餘罪トハ前發罪判決ノ刑期ト比較シ處斷ス可キモノニシテ其緣故ナキ再犯ノ刑比較スヘキモノニアラサレハ

數罪俱發

再犯ノ罪
處斷後ニ
發シタル
初犯ノ包
藏罪ト初
犯ト比較
ス可シ再
犯ト比較
ス可ラス

ナリ(東京控訴院ノ言渡ニ對スル矢田仙松上告事件明治十九年十二月廿四日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第二百一條第二項

五號

監視規則ノ如キ特別ノ加重ハ刑犯ノ別ノ再犯ニ對シテ適用セ

監視規則違犯ノ罪ハ其期限内再ヒ犯シタル場合ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得サルハ刑法第五百十六條ニ特定スル所ナルヲ以テ假令先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ更ニ監視規則違犯ノ罪アリトスルモ尋常ノ再犯ト全稱シ刑法第五百二條末項ヲ適用スル限リニアラストス故ニ原裁判所ニ於テ包藏ニ係ル竊盜罪ニ付全法第五百二條初項ニ依リ前發ノ刑ト比較シ輕キヲ以テ之ヲ論セス監視規則違犯ノ罪ニ對シテハ單ニ全法第五百十五條ニ依リ重禁錮一日ニ處スト言渡シタルハ適法ノ裁判ニシテ決テ擬律ノ錯誤ナリト云フヲ得サルモノトス(松江輕罪裁判所ノ言渡ニ明治廿一年十二月廿八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百一條第二項

六號

原裁判所檢事カ上告ヲ爲シタル要旨ハ被告利作カ明治廿一年九月廿七日ノ竊盜罪ト同廿二年四月六日ノ同罪ト共ニ同廿二年五月四日ノ三犯ナル言渡ヲ受クル際ニモ發覺セス又第一ノ罪ハ再犯ナル廿一年十月廿五日ニモ發覺セサルノ事實ニシテ

數次ノ余罪カ再犯ニシタルハ

之ヲ處斷スルニハ宜シク刑法第五百二條第二項ニ依リ再犯處分ノハ發覺シタル處分法ニ從フ可キハ當然ナルニ否ラスシテ同第百條ヲ適用シ一ノ重キヲ取り更ニ同第百二條第一項ニ通算シテ處斷シタルハ法律ノ解釋ヲ誤リタルナレハ破毀ヲ求ムルト云々ニアリ又其判決ニ曰本按被告カ二次ノ竊盜事件ハ其一明治廿一年十月中竊盜罪ニ因リ重禁錮五月監視六月ニ處セラレタル以前ニ在テ明治廿一年九月中犯シタル餘罪ト其二明治廿二年五月中監視違犯ノ罪ニヨリ重禁錮一ヶ月ニ處セラレタル以前ニ在テ明治廿二年四月中ニ犯シタル餘罪トヲ併セテ明治廿二年七月中發覺シタルモノナリ此場合ニ於テハ明治廿一年十月中ノ裁判ヨリ同年九月中犯シタル第一ノ竊盜罪及ヒ明治廿二年五月中ノ裁判ヨリ全年四月中ニ犯シタル第二ノ竊盜ヲ見ルキハ何レモ餘罪ナリト雖モ明治廿一年十月中ノ裁判ヨリ第二ノ犯罪ヲ見ルキハ餘罪ニアラスシテ再犯ナリトス何トナレハ廿一年十月中判決後ニ係ル犯罪ナレハナリ故ニ之ヲ判決スルニ當リ本按被告カ第一ノ所爲及ヒ最終裁判ヨリ第三ノ所爲ヲ見ルキハ俱ニ刑法第五百二條初項ニ又明治廿一年十月中ノ裁判ヨリ第二ノ所爲ニ對シテハ同條末項ニ照シ數罪俱發ニ付仍ホ刑法第五百條ヲ適用シ一ニ從テ科スヘキモノナルヲ原裁判茲ニ出テサルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十項ニ該當ス上告ノ原由アルモノトス仍テ同第四百廿九條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ

數罪俱發

本院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲スノ如シ
 原裁判所カ認メタル事實及ヒ證據ニ因リ被告カ處爲ヲ法律ニ照スニ第一竊盜ノ罪
 ハ刑法第三百六十八條同第三百六十七條同第三百七十六條ニ該リ第二竊盜ノ罪ハ
 刑法第三百六十六條同第三百七十六條ニ該ルモ俱ニ三犯以上ニ係ルヲ以テ同第九
 十八條同第九十二條ニヨリ各本刑ニ一等ヲ加ヘ而シテ第一ノ所爲タル明治廿一年
 十月中處斷ヲ經タル重罪ト第二ノ所爲タル再犯ノ罪ト俱發シ且其第二ノ所爲ハ明
 治廿二年五月中處斷ヲ經タル餘罪ニ該ルヲ以テ第二ノ罪ヲ刑法第百二條末項ニ又
 二次ノ餘罪ハ同第百二條初項ニ照シ二罪俱發スルヲ以テ同第百條同第百二條ヲ適
 用シ其再犯ト比較シ重キ第一ノ罪ニ從ヒ被告利作ヲ重禁錮八月ニ處シ監視六ヶ月
 ヲ附加スルモノナリ但明治廿二年五月中ノ裁判ヨリ之ヲ見ルトキハ餘罪ニ該ルヲ
 以テ前ニ判決ヲ經タル重禁錮一ヶ月ノ刑ヲ本刑内ニ算入ス(大分輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ
 十月三十日大審院
 ニ於テ破毀ノ判決)

第三百三條 正文略之

草第百十六條 特別ナル沒收(物件)ハ何レノ場合ニ於テモ合併ス可シ(刑第百三條)

第八章 數人共犯

第一節 正犯

特別ノ沒
收

數人共犯ニ三個ノ体様アリ二人以上合同シテ現ニ罪ヲ犯ス者人ヲ教唆シテ罪ヲ犯
 サシムル者及ヒ人ノ罪ヲ犯スヲ知リ豫備ノ所爲ヲ以テ幫助スル者はナリ現ニ罪
 ヲ犯ス者及ヒ犯罪ヲ教唆スル者ハ正犯トシ犯罪ヲ幫助スル者ハ從犯トス
 教唆者及ヒ從犯ヲ罰スルハ重罪輕罪ニ止リ違警罪ニ付テハ之ヲ罰セス
 二人以上合同シテ現ニ罪ヲ犯ス時ハ情ノ輕重所行ノ異同ニ拘ラス各自同一ノ罪ア
 ルモノトス然レモ二人以上合同シテ罪ヲ犯スノ際其一人又ハ數人臨時ノ罪ヲ犯シ
 タルハ其罪ヲ他ノ犯人ニ及ホス可キモノニ非ラス但シ本罪ニ關係シタル事件ニ
 シテ他ノ犯人ノ豫知シタルハ格別ナリトス又二人以上合同シテ罪ヲ犯シタル
 中其一人又ハ數人幼者若クハ知覺精神ノ喪失等ニ因リ減免ヲ得ルト雖モ他ノ共犯
 人ハ其利益ヲ得ヘキモノニ非ラス
 教唆者ノ罪ハ脅迫贈與威權結約其他被教唆者ヲシテ犯罪ノ意ヲ決定セシムルニ足
 ル可キ方法ヲ用ヒ且被教唆者其事ヲ實行スルニ因テ成立ス故ニ被教唆者ノ犯シタ
 ル罪全ク異質ニシテ教唆ヨリ出テタルモノニ非ラサル時ハ教唆者ノ罪成立セサル
 ナリ從犯ハ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシムル者ニシテ器具ヲ給與シ又ハ誘導指
 示スル等ノ別アリト雖モ其所爲ハ毎子ニ犯罪ノ着手前ニ在リ若シ犯罪ノ當時直接
 ニ幫助スル者ハ即チ正犯ニシテ從犯ト爲ス可カラズ而シテ從犯ノ罪ハ正犯ノ罪ト

數人共犯

同時ニ成立ス故ニ正犯既ニ其事ヲ行ハヌ又ハ之ヲ行フモ罪ト成ラサル時ハ從犯亦罪ナシトス然レモ正犯ノ身分ニ因リ不論罪ト爲ル場合ハ罪ナキノ限リニ在ラス又犯罪ヲ容易ナラシムル爲メ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示スト雖モ正犯其器具ヲ使用セス又ハ其誘導指示ニ從ハサル時ハ正犯ノ罪成立スルモ從犯ノ罪成立セス正犯其器具ヲ使用シ其誘導指示ニ從フト雖モ全ク異質ノ罪ヲ犯シ從犯其事實ヲ豫知セサル時モ亦其罪組成セス

第四百四條 正文略之

第四百五條 正文略之

第七章 一箇ノ犯罪ニ數人合併スル事

第一節 共犯人

共犯ノ罪
教唆者ノ

草第一百七條 二人又ハ數人一致シテ重罪輕罪若クハ違警罪ノ執行(又ハ其執行ニ附從シタル必要ノ所爲)ニ直接ノ關係ヲ有セシキハ各共犯人ハ犯罪ノ尋常ノ刑ニテ罰セラル可シ但シ共犯ノ數人ナルニ因リ法律ニテ刑ヲ増加スル場合ハ此限ニ在ラス(然レモ其共犯人中ニ身分ニ因リ其刑ノ加重減輕免除ヲ爲スノ妨害トナル可カラス)(刑第四百四條○佛刑第六十條ヲ比較ス可シ)
草第一百八條 贈與約束脅迫威權ノ濫用又ハ凡テ其他有罪ノ手段ニ因リ人ヲシテ

實際罪ヲ犯シ又ハ未遂ノ罪ヲ犯スコトヲ教唆シ且之ヲシテ決意セシメシ者ハ共犯人ト見做シテ罪セラル可シ(刑第五百五條○草零○佛刑全上)

公然ノ演說又ハ廣告或ハ配達文ヲ以テ公益ニ對シ若クハ一私人ニ對スル罪ヲ犯スコトヲ教唆シ且之ヲ判定セシメシ者モ亦同一ナリ但シ法律上煽動者又ハ教唆者ニ對シ刑ヲ加重スル特別場合ノ妨害トナルコトアラサル可シ

若シ右ノ方法ヲ以テスル教唆其實効ヲ生セザリシ時ハ出版及ヒ演說ノ罪ニ付テ設定セル特別規則ノ刑ヲ科スヘシ(千八百八十一年七月二十九日ノ佛蘭西法律第二十三條乃至第二十五條)

一號

刑法第四百四條中皆正犯トアルハ共ニ謀リ共ニ犯スニ際シ恰カモ分身一体ノ如ク之レカ手足トナリ或ハ器械ノ如クナリテ其目的ノ事ヲ共ニ行フ者ヲ云ヒタル者ニシテ即チ數人共謀シ共ニ強盜ヲ犯スニ當リ一名戸外ニ瞭望シ一名ハ家人ヲ縛シ他ノ數名ハ財物ヲ搜索奪取シ又其一名カ人ヲ殺傷スル等ノ如キハ一身分手ノ所爲ト同一ナレハ其共犯者中ノ一名カ人ヲ殺傷スルニ於テハ假令他ノ數名ハ之ヲ知ラサルモ皆正犯ト爲シ刑法第三百八十條ノ制裁スヘキハ論ヲ俟タズト雖已ニ其事ヲ止メ共犯ノ場所ヲ立去リタル後ニテ其中ノ一名又ハ二名カ殘留シテ爲ス所ノ罪ノ如キハ

共犯ヲ組
成シタル
ノ解釋共
犯ヲ分難
シタルノ
解釋

數人共犯

既ニ分身分体ト爲リシ後ナルヲ以テ其犯罪ヲ知ラサル者迄ヲシテ共犯トナシ論斷
 ス可キモノニアラス然ルニ原判文^上其第二ノ所爲ハ被告ニ於テハ其共犯山田常吉
 カ遠山倉吉ニ創傷ヲ負ハセタル事實ハ既ニ被告カ逃去リタル後ニアルヲ以テ之ヲ
 知ラスト雖^凡云々トアリテ此事實ニ於ケル強盜ノ共犯タル山田常吉カ人ニ傷ヲ
 負ハシメタルノ所爲ハ被告系吉カ已ニ分身分体ト爲リ其犯所ヲ離レタル後テニ在
 リタルコト明確ニシテ系吉ハ其創傷ニ毫モ關係ナキヲ以テ之ヲ強盜創傷ノ共犯者ト
 爲ス可キモノニ非サルニ之ヲ常吉ト同ク刑法第三百八十條ヲ當行處斷シタルハ法
 ノ解釋ヲ誤リタルモノナリ(千葉重罪裁判所ノ言渡ニ對シ山本系吉上告事件
 明治十九年三月廿一日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四百四條

二號

共犯例ヲ適用セサリシ云々ニアレ^凡該例ヲ適用セサレハトテ被告ノ不利益トナラ
 サルニ付治罪法ニ定ムル上告ノ理由トナスヲ得ス(大坂控訴院ノ言渡ニ對シ竹内庄次郎淺井
 却ノ判決
 第三百七十七條第一項)

三號

刑法第三百七十七條第一項ニ掲クル配偶者互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以

親族相盜
 ナ教唆ス
 共犯例ヲ
 適用セザ
 リシトテ
 被告ノ不
 利益トナ
 ラサルニ
 付上告ノ
 理由トナ
 シ

ルモ主タ
 ル犯罪ノ
 以テ亦教
 唆者モ罪
 ナキニテ
 サルナリ

テ論スルノ限ニ在ラストアリテ本案ノ如キ中村ミノカ其夫喜十郎ノ病氣危篤中其
 所有ナル無記名公債證書五千五百圓ヲ竊取シタリトスルモ法律ハ之ヲ竊盜トシ論
 セス其刑法ノ支配ヲ受ケサル人ニ對シ被告人カ竊盜ノ所爲ヲ教唆シタリトテ刑法
 第三百五條ノ例ヲ用ユル罪ヲ組成シタリト爲ス可カラス又共謀シタル事實ナキ者ニ
 對シ刑法第三百七十七條第二項ヲ適用スルコトヲ得サルハ勿論ニシテ到底罪ノ成立
 タサル者ナリ加旃本件ハ原控訴院カ認メタル事實ニ因テ之ヲ見レハ被告長兵衛ハ
 中村ミノト叔姪ノ間柄ニシテ且ミノ、夫喜十郎存生中被告人ト家計上親密ノ相談
 ヲ爲シ來リ喜十郎ノ病ニ罹ルヤ被告人ハミノト俱ニ看護ニ盡力シ其病危篤ニ迫ル
 ヲ見テ被告人ハ喜十郎死後必ス中村家ニ一大紛議ヲ生センコトヲ豫知シ於茲ミノニ
 説クニ所有公債證書悉皆竊ニ取出シ置遺子等ノ爲メ宜シク後圖ヲ爲スヘシト教唆
 シ之レヲシテ喜十郎所有ノ無記名公債證書額面五千五百圓ヲ竊ニ取出サシメ喜十
 郎死後之ヲ自宅ニ持歸リ其内額面八百圓ヲミノヨリ分配ヲ受ケ六百圓ハ已ニ他ニ
 賣却シタル所爲アル者ト明示シテ此所爲タル被告人ハ中村家將來ヲ慮リ保護主
 義ニ出テタル事實甚タ明瞭ニシテミノモ亦之ニ同意シ其所置ヲ爲シタリト云フ
 ニ外ナラス此ノ如キ場合ニ於テ臨機保護ノ手段ヲ施スハ親戚間往々アルヘキ事實
 ニシテ固ヨリ原判文上ニ於テモ被告人及中村ミノヲ惡意アリタルコト及ヒ當時利益

數人共犯

ヲ共謀シタルハ之ヲ認メサレハ竊盜罪ヲ構成スヘキ原由ナシ喜十郎死後公債證書額面ハ百圓ヲ分配シタリトアルハ豫約豫防ノ分配ニアラスシテミノカ故ナク贈與シタルト云フニ止マリ是亦犯罪ヲ構成スヘキ事實ニ非ス原控訴院カ被告人ニ對シ刑法第五百條同第三百七十七條第二項ニ原キ竊盜ノ刑ヲ適用處斷シタルハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第十項ニ相當スル上告ノ原由アル者トス(大坂院ノ言渡ニ對シ安藤子長兵衛上告事件明治廿一年十月三十日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四百四條

四號

爲吉ノ所爲ハ從犯ナリト云フモ原判文ヲ閱スルニ共謀一致ノ事實明カナルノミナラス此實行者ナレハ從犯ナリト云フ可ラス又正犯トセハ刑法第二百四條ヲ適用セサルハ不法ナリト云フモ總則中ノ法條ハ犯罪ノ法條トハ異ナリ敢テ明示スルノ必要ナク被告人ノ利害ニ影響ナケレハ上告ノ理由トナスヲ得ス(福島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ齋藤熊藏齊藤爲吉上告事件明治二十一年五月四日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

五號

金剛忠吉カ強盜人ヲ傷シタルハ教唆指定外ノ事ナリトノ論旨ハ已ニ暴行脅迫ヲ以

總則中ノ法條ハ判文ニ示サズニモ罪トナラ

強盜ヲ教唆シタル

上ハ正犯カ人ヲ傷シタルモ亦包含ス

共犯例ハ引用セサルモ失當ナリトスルヲ得ス

竊盜共謀者ノ一人ハ強盜ヲナスモ之ヲ共謀者ナリトスルヲ得ス

テ財物ヲ強取スルノ目的ニ出テ其結果人ヲ傷シ人ヲ殺スハ兇暴ノ勢免レ難キノ數ニシテ指定外ナリト云フヲ得ス依テ原裁判所カ正犯ト爲シ刑法第二百八十條ヲ適用シタルハ相當ナリトス(廣島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ金剛忠吉德永三郎等カ上告事件明治二十一年二月十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四百四條

第六號

刑法第四百四條ハ二人以上現ニ罪ヲ犯シタルモノハ正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ストノ總則ニシテ犯罪ノ適條ニアラサレハ既ニ二人以上犯シタル事實ヲ認メ各自ニ其刑ヲ科シタル上ハ之レヲ揭カケサルモ擬律錯ト云フヲ得ス(宮崎輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ村上松次郎上告事件明治廿二年十月四日大審院於テ棄却ノ判決)

第四百四條

第七號

原判文ヲ閱スルニ第一被告兩名竊盜ヲ爲サンコトヲ共謀シ小泉トヨ宅ニ於テ安右衛門獨リ宅内ニ忍入り臨時暴行ヲ加ヘ衣類ヲ強奪シタル事實ヲ示シ此際藤吉ハ戶外ニ見張ヲ爲シ強盜ノ情ヲ知ラス宅内ニ入りトヨノ居間ニ於テ白米若干ヲ盜ミ去リタル事實ヲ示シアレハ原來ノ目的ハ竊盜ニシテ安右衛門一人臨時暴行ヲ加ヘタリトテ情ヲ知ラサル藤吉ヲ強盜ノ共犯者ト爲スコトヲ得ス又鑿ノ如キハ用法ニ因リ兇

數人共犯

器ヲ名クヘキモノニテ原判文ニトヨニ夜具ヲ冠セ鑿ノ柄ヲ以テ頭部ヲ四五度毆打シトアリテ兇器ノ作用ヲ認メサレハ刑法第三百七十九條ヲ適用セサルヲ以テ擬律錯誤ト云フ可ラス(甲府重罪裁判所ノ言渡シニ對シ伊藤安右衛門村松藤吉等ガ)

第二百五條
第二百九十三條

第八號

原判文中(被告マツハ鈴木マキト共謀シスミヲ教唆シテ多三郎ヲ殺サシメント決意シ云々)モルヒテ「茶碗ニ入レ酒ヲ其上ニ混和シ云々此藥ヲ多三郎ニ飲マセテ殺セト神ノ授ケタル如クナシ云々」ハマツカ恠異ノ術ニ心醉シ夫多三郎ヲ殺スノ自己ニ利アル者ト妄信スルヨリ殺意ヲ決シ云々竊カニ其毒藥ヲ多三郎ノ燭瓶ノ酒ニ入レ之ヲ多三郎ニ飲マシメ云々)トアリテ被告マツハスミヲシテ多三郎ヲ殺サシメント謀リ毒藥ヲ調合シテスミニ與ヘタルモ其實行ハスミ一人ノ所爲ニシテ被告カ手ヲ下シタル者ニ非ラサレハ純然タル共犯者ト云フヘカラス故ニ原裁判所カ以上ノ事實ヲ以テ教唆者ナリト判定シタルハ相當ナリトス(札幌重罪裁判所ノ言渡シニ對シ藤井マツ上告事件明

治廿一年六月十二日
大審院棄却ノ判決
第二百五條
第三百七十七條

第九號

教唆ノ解
釋
身分ニヨ
リ罪ヲ論
セサルモ
ノヲ教唆
スルモ罪
ヲ免ル
ヲ得ス

刑法第一百五條ニ人ヲ教唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタルモノハ亦正犯ト爲スト特定シタルハ教唆者ハ犯罪ヲ實行セスト雖モ犯罪ノ意思ナキ者ヲシテ罪ヲ犯サシムル即チ造意者ニシテ現ニ罪ヲ犯シタルモノト其實異ナル所ナケレハ皆以テ正犯ト全シク論スヘキ律意ナリトス故ニ本案ノ如キ全居ノ妹ヲ教唆シテ其兄ノ財物ヲ竊取セシメタルニ於テハ妹タル被教唆者ノ罪ハ刑法第三百七十七條ニ據リ之レヲ論セスト雖モ被教唆者ノ身分ニ依リテ罪ナシトノ理由ヲ以テ他人ナル教唆者ニ其影響ヲ及ホス成法ナシ然ラハ原裁判所ガ被告ニ對シ刑法第三百七十七條末項第五百條第三百六十六條第三百七十六條ニ依リ竊盜罪ニ問擬シタルハ適法ノ裁判ニシテ毫モ擬律ニ錯誤アルコトナシ已ニ原裁判ノ正當ナリト認メタル上ハ地券證ヲ燒弄滅盡シタル所爲ハ竊盜ノ結果ニ過キスシテ別罪ヲ組成スヘキモノニアラサルナリ(名古屋重罪裁判所ノ言渡シニ對シ齋藤三衛上告事件明治廿二年三月三十日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百五條
第三百三十一條

第十號

原判文ヲ閱スルニ被告德郎「チヨウ」ハ嘗テ私通ノ末懷胎セシモ云々被告德郎ノ教唆ニ因リ被告「チヨウ」ハ墮胎スルニ決シ云々トアリテ被告カ教唆ノ爲メ墮胎ノ決心ヲ爲シタル「明瞭ナレハ如何ナル手段ニテ決心セシメタルヤ」ノ明示ヲ要セス

數人共犯

教唆ニ因
リ決心シ
タルノ理
由アルハ
敢テ教唆
ノ手段ヲ

示スヲ要
セズ

妊娠中ノ
子ニ對シテ
謀殺教唆
ハ罪トナラズ

（神戸輕罪裁判所本支廳ノ言渡ニ對シ吉住徳郎カ上告事）
（件明治二十一年十二月二十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決）
第二百五條
第二百九十二條

第十一號

刑法第二百九十二條ニ規定シタル謀殺罪ノ組成センニハ一個人ニ對シテ豫謀殺害ノ所爲ヲ行フタルヲ要ス然ルニ母ノ胎内ニアリテ社會ニ生出セサル者ハ未タ完全一個人ト稱ス可ラサレハ假令出産前殺害セント謀リタルモ之レヲ以テ謀殺豫備ト爲シ難ク即チ出産ノ當時始メテ殺意ヲ生シタルモノナリト看做サ、ル可カラズ又被告周二郎カ（キヌ）妊娠中分娩セハ其兒ヲ殺スヘシトヤ勸メタル如キハ社會ニ生存スル人ニ對シテ教唆シタルニアラサルヲ以テ謀殺教唆ノ罪ヲ構成セサルヲ論ヲ俟タス故ニ（キヌ）ノ所爲ニ對シテ刑法第二百九十四條ヲ適用シ周二郎ノ所爲ニ對シテ治罪法第四百一條ニ依リ無罪放免シタルハ相當ナリ（神戸重罪裁判所ノ言渡ニ對シ西田月十七日大審院ニ）
（キヌ）外一名上告事件明治廿二年一月十七日大審院ニ於テ棄却ノ判決）
第二百五條
第三百八十條

第十二號

教唆者ノ
豫知シ得
可キ結果

持兇器強盜罪ヲ教唆シタルモノハ其結果タル尙ホ之ヲ詳言セハ其勢力ヲ示シテ財物ヲ強取スルニ當リテ人ヲ死傷ニ致スカ如キハ教唆者ノ之ヲ明言セサルモ豫知シ

タルノ結果トスルヲ得可シ（裁判所ノ言渡ニ對シ和田源三郎カ上）
（小畑淺吉上告事件全年四月廿八日大審院判決）

第四百四條

十三號

一人ノ對
審判ナリ
レハ共犯ナ
例ヲ引用ス
ルナシ

被告ヲ確次郎トノ共謀者ト認メナカラ刑法第四百四條ヲ適用セサリシハ事實理由ノ不備ナリト云フモ本案ハ被告一人ノ對審裁判ナルヲ以テ該條ヲ引クノ必要ナシ殊ニ該條ハ總則中ノモノナレハ之レヲ引カサリシトテ敢テ妨ケアルコトナシ（横濱重罪渡ニ對シ山崎勇吉上告事件明治廿一年三月廿一日大審院ニ於テ棄却ノ判決）

第六條 正文略之

第七條 正文略之
草第百十九條 教唆者及ヒ其他ノ犯人ニシテ執行ニ直接ノ關係ヲ有セサリシ者ハ執行カ刑ノ加重ヲ惹起スル場合ニ於テ犯人ノ多數ヲ組成スルカ爲メニハ通算セラレズ（刑第百七條）

事實ヨリ
加重シタル
加重情狀

草第百二十條 執行ノ景狀ニ基キタル刑ノ加重ハ一切ノ共犯人及ヒ教唆者ニ適用ス可シ而シテ假令ヒ此等ノ人ノ中ニテ該景狀ニ關係セサル者アルモ之ヲ知了シ又ハ豫見シタル時ハ都テ右ノ加重ヲ適用スヘシ

數人共犯

身分ニ關
スル加重
減輕

共犯人又ハ教唆者中ノ一人ノ身分ニ基キタル刑ノ加重(減刑又ハ免刑)ハ決シテ其
他ノ者ニ適用ス可カラス(刑、第百六條)

第百六條第二十七十八條
第百一一條

一號

教唆者官
吏ニシテ
受教唆者
一私人ナ
ルハ

教唆者逮捕者官吏ニシテ受教唆者一私人ナルトキハ其教唆者タル逮捕官吏ハ刑法
第百七十八條第百八十條第百一一條第百五條ニ處シ一私人ハ身分ヲ有セサル
ニヨリ之ヲ第百六條第百一一條ニノミ問擬ス可キモノトス(裁判所ノ言渡ニ對シ村
年四月廿二日) 上長ノ助上告事件明治二十
大審院判決)

第百七條

三號

法律ノ制
規ヲ免ル
、幼者ハ
尙ホ犯人
ノ多數ヲ
組織ス

抑々二人以上竊盜罪ヲ犯スカ如キハ單身罪ヲ犯スニ比スレハ之ヲ犯スニ容易ニシ
テ且ツ社會ニ危害ヲ加フルヲ又大ナルヲ以テノ故ニ其刑ヲ加重スルニアリ而シテ
其共犯人中法律ノ制裁ヲ免カル、十二歳未滿ノ幼者アリト雖モ猶ホ加重ノ原因ト
ナルモノナリ其故何トナレハ假令幼者タリト雖モ其犯罪ニ預リテ力アリタルニ於
テハ丁年者ト徑庭ナキヲ以テナリ(裁判所ノ言渡ニ對スル片原傳藏カ)
上告事件明治廿年五月三日大審院判決)

第百八條

教唆又ハ
協議セシ
決意ヨリ
異別ノ執
行

草第百二十一條 若シ實際既遂ノ罪「又ハ未遂ノ罪」ハ嘗テ教唆セラレ又ハ豫見セ
ラレタル犯罪ト(其性質ノ同一ナルモ)其輕重ノ點ニ於テ異ナル時ハ教唆者ハ左ノ
如ク罰セラル可シ
若シ既遂又ハ未遂ノ罪一層重キ時ハ教唆者ハ其教唆セシ罪ノ刑ノミヲ受ク可シ
若シ其教唆セシ犯罪一層重キ時ハ教唆者ハ既遂又ハ未遂ノ罪ノ刑ノミヲ受ク可シ
若シ其教唆シタル件ト既遂又ハ未遂ノ件トノ間ニ存スル異別カ執行ノ方法ノミニ
存スル時ハ前同一ノ區別ヲ以テ刑ヲ科ス可シ(刑、第百八條)
協議シタル決意外ノ執行ニ間接ニ關係シタルニ過キサル犯者ニモ同一ノ區別ヲ以
テ本條ヲ適用ス可シ

第二節 從犯

第百九條 正文略之

第百十條 正文略之

第二節 從犯

草第百二十二條 左ノ犯罪ハ重罪輕罪(又ハ違警罪)ノ從犯即チ助力者ト見做シ其
既遂(又ハ未遂)犯ノ刑ニ一等ノ減輕ヲ施シテ罰ス可キモノトス

第一 主犯又ハ共犯ノ一人ヲシテ犯罪ヲ遂ケ又ハ之ヲ行フニ容易ナラシメムル

數人共犯

一四七

カ爲ノ要用ニシテ且ツ實行シタリシ惡法ヲ指示シ器具ヲ供給シ又ハ或ル手段ヲ垂示シタル者

第二 豫備ノ所爲(又ハ附從ナルモ必要ナラサル所爲)ヲ以テ(又ハ法律上若クハ職業上ノ本分ヲ缺キテ)他人ノ犯罪ノ執行ヲ補助シ又ハ容易ナラシメタル者

第三 重罪又ハ輕罪ノ執行後ニ其執行ノ實効ヲ奏センカ爲メニ企ル所爲ニ付キ其犯人ヲ補助セシ者

以上掲ケタル者ハ(第一項第二項ノ場合ニ於テハ犯罪ノ意思ト豫見トヲ以テ行爲シ第三項ノ場合ニ於テハ)事ヲ知了シテ行爲スルヲ要ス(刑、第九九條○草、零○佛刑、第五十九條乃至第六十三條)

普通及ロ身分ニ關スル加重減輕承前

草第百二十三條 共犯人ニ付テノ刑ノ加重(減輕又ハ免刑)ノ影響ニ關スル第百十九條第百二十條及ヒ第百二十一條ノ條例ハ從犯ニモ適用ス

若シ犯罪ノ主犯(又ハ教唆者)ナリシ時身分ノ故ニ因リ刑ヲ加重ス可キ場合中ニ在ル者ハ從犯ニ過キサル時ト雖モ主犯ノ時ト同一ニ加重セラル可シ但シ前條ニ述ヘタルカ如ク一等ノ減輕アルハ此限ニ在ラス(刑、第一百十條)

第百四十六條 第百九條

一號

各本條ニ從犯例ノ規定アルハ總則ノ從犯例ニ適用ス可キモノニアラス

刑法第百九條ハ總テノ犯罪ニ適用スヘキ法條ナルモ之レニ對シ特別ニ設ケタル法條アルハ其特別法條ニ依リ處斷スヘキモノナルヲ一般ノ通則ナリトス本按囚徒ノ逃走方法ヲ指示シタルモノ、如キハ何人ノ所爲タルヲ問ハズ特別ニ規定シタル即チ刑法第百四十六條ニ該當スルヤ論ヲ俟タス然ルニ原裁判所カ刑法第百四十二條ノ從犯トシ全第百九條ヲ適用シ處斷シタルハ擬律錯誤ノ裁判タルヲ免レヌ

(安濃津輕罪裁判所ノ言渡ニ對スル三林仙吉カ上告事件) 明治二十一年十月二十三日大審院ニ於テ破毀ノ判決

二號

從犯ノ豫知シ得可キ

刑法第百九條ヲ案スルニ同條末項ニ正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ストアルハ例ヘハ竊盜ヲ爲スノ情ヲ知テ之ヲ幫助シタルニ若シ正犯カ意外ニ強盜又ハ傷人ノ所爲アルハ上告ノ如シト雖モ本案ノ如キ被告人カ初吉等ノ竊盜ヲ爲スヲ知リタル上ハ其初吉等カ竊盜ヲ爲スニハ必ス門戶墻壁ヲ踰越シ鎖鑰ヲ損壞スル等ノ行爲ニ出ルヲ自ラ豫知シタル事柄ナリトス然ラハ原裁判所カ被告人ニ對シ刑法第三百六十七條以下ヲ適用シタルハ失當ニアラス(廣島重罪裁判所ノ言渡ニ對シ寶橋彌助上告事件) 明治廿一年十月十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第百九條 第百四條

數人共犯

強盜ノ正犯ニ
望ハ正犯
ナリ
ニアリ
ルナリ

三號

藤兵衛ハ宅外ニ瞭望シ從犯ノ所爲ナリト云フモ從犯ハ刑法第百九條ニ規定シタル如ク重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ニ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ云々トアリ本按ノ如ク宅外ニ瞭望シタルハ共謀一致ノ所爲ナレハ從犯ト云フ可カラス(京都重罪裁判所ノ言渡シニ對シガ上告事件明治二十一年三月十六日大審院ニ於テ)
岡田政吉上田大吉北川藤兵衛等

第百九條

四號

刑罰ノ從
犯例ヲ適
用セシ

稅則ノ如キハ其營業者ヨリ其稅額ヲ徵收ス可キ取締規則ナレハ專ラ其營業者ノミヲ支配ス可キモノニ之ヲ營業外ニ及ホスヲ得ス故ニ從犯一私人ナルトキハ刑法ノ從犯例ヲ用ユルモノニアラス(罪裁判所ノ言渡ニ對シ石黒八郎上告事件明治廿一年三月廿二日大審院判決)

第百九條

第二百六十一條

刑法第百九條ニ重罪輕罪ヲ犯スヲ知テ器具ヲ給與シ其他正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタルモノトアリ本件ニ付原判文上認メタル事實ヲ監査スルニ(前政太郎宅ニ於テ金錢ヲ賭シ骨子ヲ弄シ博奕ヲ爲シ被告荒吉ハ右政次郎ノ依頼ヲ受ケ門先ニテ見張ヲ爲シ居ル現場巡查ニ逮捕セラレ)トナリテ被告ノ所爲ハ右法條ニ適合

正犯從犯
ノ解釋

スル事跡アルヲ見ス却テ賭博ヲ爲スノ情ヲ知テ政次郎ノ依頼ヲ諾シ賭博ノ見張ヲ爲タルモノナレハ則チ犯罪ノ施行ニ加功シタル分身同体ノ事實ナルヲ以テ原裁判所カ正犯ヲ以テ論斷シタルハ至當ノ裁判(松山輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ谷荒吉上告事件明治廿二年十二月廿五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第九章 未遂犯

法律ニ於テハ總テ已遂犯ニ付キ刑名ヲ定メタルモノニテ其犯罪ノ原素タル可キ事實ニ着手スルモ意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ行ヒ遂ケサルハ未遂犯罪ナリ而シテ犯罪ニ着手スト雖モ事理ニ於テ其目的ヲ遂ケ得ヘカラサルモノハ不能犯ニシテ未遂犯ト爲ス可カラス不能犯ハ法律上之ヲ罪セスト雖モ其行爲ニ依リ或ハ別罪ヲ構成スルコトアリ例ハ人ヲ毒殺セントシタルモ其藥質人ヲ殺害スルニ足ラサルハ其人ノ健康ヲ害スルニ至ルノ類是レナリ
又犯罪ニ着手シテ自ラ其事ヲ中止シタルハ未遂犯ニアラスシテ中止犯ナリ而シテ其中止ノ爲メ別罪ヲ生シタルハ其生シタル點ニノミ刑ヲ科スルナリ
未遂犯ハ法律上罰スルト罰セサルトノ區別アリ

重罪ノ未遂ハ總テ之ヲ罰スレモ輕罪ノ未遂ハ法律ニ明文アルニ非ラザレハ之ヲ罰スルコトナシ其明文アルモノ、概略ヲ舉グレハ第一内亂ニ關スル罪(第百二條)第二囚徒逃走ノ罪(第百四條)第三私ニ軍用ノ銃礮彈藥ヲ製造スル罪(第百五條)第四往來ノ通信ヲ妨

未遂犯罪

害スル罪(第百七)第五官印ヲ偽造スル罪(第百二)第六私印私書ヲ偽造スル罪(第百二)第七死屍ヲ毀弄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪(第百六)第八竊盜ノ罪(第百七)第九詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪(第百九)第十火藥取締規則(第百五)第十一郵便條例(第百三十三條第)第十二電信條例(第百四十八條第百六十二條第)第十三海底電信保護萬國聯合條約罰則第一條ノ罪等是レナリ又豫備ノ所爲ハ法律上之ヲ罰セスト雖モ内亂ニ關スル罪貨幣ヲ偽造スル罪ハ其陰謀ト豫備トヲ例外シテ罰スルナリ

第百十一條 正文略之

第百十二條 全上

第百十三條 全上

第八章 未遂犯罪

決意ノ事 草第百二十四條 一人又ハ數人ニテ組成シタル犯罪ノ決意ニシテ其實行ヲ爲サ、ルキハ法律ニ豫見シタル場合ニアラサレハ之ヲ罰スルコトナシ

豫備ノ行 唯犯罪ノ豫備ヲ爲シタル行爲亦之ニ同シ(刑、第百十一條)

重罪ノ未 草第百二十五條 執行ノ端緒ニ因テ顯ハレタル重罪ノ未遂犯ニシテ本犯ノ意欲ニ係ハラサル情狀ニ因ルニ非サレハ中止セザリシモノハ既遂犯ノ刑ニ二等又ハ三等ヲ減シテ罰ス可シ(刑、第百十二條○草、零○佛刑、第二條)

關効ノ重

草第百二十六條 重罪執行ノ諸般ノ行爲ヲ終成セシモ本犯意外ノ情狀ニ因リ其罪ノ實効ヲ闕キタルキハ已遂ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス(刑、零○草、零○佛刑、第二條)

本犯ノ意
ニテ執行
ヲ中止ス
ル事

草第百二十七條 重罪ノ本犯其執行中自己ノ意欲ニテ中止スルカ又ハ總テ其執行ニ關スル行爲ヲ終成セシモ本犯ノ意欲ニテ實行ヲ勵闕セシメタルキハ其罪ニ因テ實際生シタル害ニ付テノミ罰セラル可シ(刑、零)

不能犯

草第百二十八條 行爲ノ性質ニ因リ又ハ使用セル方法ニ因リ之カ爲メ何等ノ害ヲモ生スルコト能ハサリシキハ本犯ハ其意思ノ何タルヲ問ハスノ刑ヲ免カル、者ナリ、若シ其行爲又ハ使用セル方法ハ本犯ノ見込ミシ害ヨリ少ナキ害ニ非サレハ生スルコト能ハサリシキハ其實際生シタル害ニ付テノミ之ヲ罰ス可シ(刑、零)

輕罪ノ未
遂犯

草第百二十九條 輕罪ノ未遂犯及ヒ輕罪ノ關効犯ハ法律上明記シテ罰スル所ノ輕罪ニ非サレハ前條々ニ豫定シタル規則ト區別トニ從フテ罰スルヲ得ス(刑、第百十三條○草、零○佛刑、第三條)

此場合ニ於テ輕罪ノ關効犯ヲ罰スルカ爲メニハ法律上輕罪ノ未遂犯ヲ罰スト明記スレハ充分ナリトス(刑、零)

違警罪

草第百三十條 違警罪ノ未遂又ハ關効犯ハ決シテ罰ス可キモノニ非ス(刑、第百十

未遂犯罪

三條

第一百十一條
第二百九十二條

一號

豫備決行ノ解
被告カ所爲ハ故殺ナリト云フニ在レモ抑モ故殺トハ外面ノ感觸ニ乘シテ直チニ怒氣ヲ生シ熱慮スルノ暇アラスシテ犯シタル場合ヲ指稱スルモノニシテ而シテ今本件ニ付原裁判所カ認メタル事實ヲ監査スルニ被告ハ溜池ノ畔ニ至ルニ及ヒ寧ロ竊ニ該女ヲ池水ニ投シ當面ノ煩累ヲ拂フニ如カスト決意シトアリテ之即チ外面ノ感觸ニ非ラスシテ腦裏ニ熟考ヲ遂ケタルモノナリ加フルニ幼女ノ上着ヲ脱シ自己ノ携ヘタルモノト取換ヘ荒繩ヲ以テ幼女ノ胴腹ヲ縛シ云々之ヲ池中ニ沈メ死ニ致シタルモノト在ル事實ヲ通觀スレハ謀殺罪組成ニ必要ナル豫備決意實行ノ第二百九十二條ヲ適用シ斷了シタルハ相當ニシテ決テ不法ノ裁判ト爲スヲ得ス(大分重罪裁判所部武上告事件明治廿一年八月廿五日大審院ニ於テノ判決)

二號

第二百九十三條

未遂犯
原裁判言渡ヲ查閱スルニ前同席者ノ仲裁ニ仍リ一旦引別レタルモ被告元次郎ハ尙憤怒ノ情止ミ難キ折柄云々寧ロ同人ヲ追跡シ殺害シテ其遺恨ヲ露サント決意シ其儘自宅ニ立歸リ兼テ所持ノ短刀ヲ携ヘ出立途中ニ於テ云々トアレハ其間靜思熟慮ノ暇ナク初メ憤怒ノ情止ミ難ク殺意ヲ決シテヨリ引續キ其所爲ノ實行ニ及ヒタルヲ知得スルニ足ルヘケレハ此點ハ敢テ理由ノ不備ト云フ可カラサルモ後段ニ至リ(直チニ該家ニ闖入シ携ヘタル短刀ヲ以テ醉臥シ居ル龜太郎ニ切付ケ頸部及ヒ咽部其他數ヶ所ニ重傷ヲ負ハセタル者)トノミアリテ如何ナル意外ノ障礙又舛錯ニ因リ其目的ヲ遂ケサルモノナルカ又ハ被告自ラ中止シタルモノナルカ未遂犯ト中止犯トハ法律ノ適條ヲ異ニシ緊要ノ事實ナルニ毫モ之カ事實ノ理由ヲ付セサルハ擬律ノ當否ヲ鑑査スルニ由ナキ治罪法第四百十條ニ該ル破毀ノ原由アル不法ノ裁判ナリトス(神戸重罪裁判所ノ言渡ニ對シ土尾元次郎上告事件) 明治廿一年五月八日大審院ニ於テ破毀ノ判決

第一百十二條

三號

未遂犯ノ適用
原判文第二ヲ閱スルニ明治二十一年二月十四日午後八時頃強盜ヲナスヘキ目的ニテ丑之助ハ刀ヲ携ヘ勝次郎ハ庖丁ヲ持チ中丑之助ハ藤吉妻ヲ引テ手ヲ捕ヘ發聲スレハ客舎(原)ナラスト勝次郎ト共々脅迫シタルニ他ノ物音ニ驚キ云々トアリテ其前後ノ文字ヲ參照スレハ被告カ暴行脅迫シテ財物ヲ強取セントシタルモ意外ノ障礙ニ因リ其目的ヲ遂ケサリシ事實明ニシテ原裁判所カ強盜ノ未遂犯ヲ以テ論斷

未遂犯罪

シタルハ相當ニシテ擬律錯誤ト云フヲ得ス(大坂重罪裁判所ノ言渡シニ對シ金島勝次郎上告事件明治二十一年八月七日大審院公廷ニ於テ棄却ノ決判)

第一百十二條

四號

偽造變造
罪ニ付テ
ハ別ニ未
送犯例ア
ル

變造紙幣行使未遂罪ニ對シテハ特別ノ未遂例ノ設ケアルモノナレハ宜ク其適條タル刑法第八十六條ヲ適用ス可キニ全第八十二條第八十三條ヲ適用シタルハ即チ上告論旨ノ如ク擬律ノ錯誤アル違法ノ裁判ナリトス(京都重罪裁判所ノ言渡シニ對シ常盤木亮慎上告事件明治二十一年三月六日大審院ニ於テ)

第一百十二條

五號

未遂ノ原
則ヲ引用
セハ定ル
ナリ

放火未遂ノ所爲ニ刑法第一百三條ヲ適用セスト云フモ犯人意外ノ障礙ニ依リ其目的ヲ遂ケサリシモノト判定シ同法第一百十二條ヲ適用シタル上ハ第一百三條ヲ適用セサリシモノヲ以テ破毀ノ原由ト爲ヌヲ得サルモノトス(松山重罪裁判所ノ言渡シニ對シ三十九日大審院ニ於テ)

第一百十二條

六號

不能犯ノ
解釋

上告ノ理由トスル處ハ凡ソ不能犯ナルモノハ器械ノ精粗方法ノ巧拙ニ拘ハラヌ其器械方法等ニ不能ノ性質ヲ有スル場合ヲ云ヒ其方法ノ拙劣ナルヲ以テ不能犯ト爲スヘカラス然ルニ原裁判官ハ器械方法等ニ不能ノ性質ナキニ拘ハラヌ單ニ拙劣ナリトノ理由ヲ以テ不能犯ト斷定シタルハ不法ナリト云フニ在レトモ原判文ニ依レハ右偽造方法ノ拙劣ナル到底貳拾錢銀貨ヲ偽造スル能ハサル者ナルヲ以テ云々トアリテ其器械方法等拙劣ニシテ銀貨偽造ノ目的ヲ達スル能ハサル者ナリト認定シタリ果シテ然レハ不能犯ニシテ必スシモ其器械方法ノ性質如何ニノミアルヘキモノニ非ラス故ニ原裁判官カ以上ノ事實ヲ認メ刑法第八十六條第二項第八十七條ニ依リ處斷スヘキ限リニ非ストシ無罪ヲ言渡シタルハ相當ナリ(廣島重罪裁判所ノ言渡シニ對シ堀要平富田寅吉上告事件明治二十年六月二十日大審院公廷ニ於テ棄却判決)

第一百十二條

七號

上告ノ理由トスル所要スルニ八月七日ヲ十七日ト掲ケタルハ事實理由ノ齟齬ナリ又ハ被害者ノ咽喉ヲ刺シタル度數及ヒ犯罪ヲ中止シタルハ眞心悔悟ニ出テタルヤ否ヤヲ判定セサルハ事實理由ヲ付セサルモノト云フニアルモ原裁判官言渡ノ事實ヲ閱スルニ寢室ニ至リ携フル所ノ短刀ヲ以テ「ヨシ」ノ咽喉部ヲ刺シタルニ「ヨシ」カ高

中止犯ハ
眞心悔悟
ナルト哀
情ナルト
要ス

未遂犯罪

聲ヲ發シタルニ驚キ自ラ中止シ事ヲ果サスシテ云々ト認メアル理由ニ依レハ被告自ラノ意中ヨリ犯罪ヲ中止シタルモノニテ意外ノ障碍若シクハ舛錯ニ依リ目的ヲ遂ケサル事實ニ非サル事明確ナリ已ニ被告自カラ意思ニ依リ犯罪ヲ止メタル事實明カナル上ハ其中止ノ真心悔悟ニ出テタルヤ將タ被害者ノ發聲ヲ聞キ衰情ヲ起セシニ出テタルモノナルヤ否ヤノ意思如何ハ犯罪構成ニ影響ナキヲ以テ之ヲ判明スルノ必要ナシ(山形重雄裁判所ノ言渡ニ對シ劍持タカ上告事件 明治十九年十二月十五日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百十二條
第二百十條

八號

附帶上告論旨タルヤ被告ノ所爲ハ傳造ヨリ金員ヲ騙取センカ爲メ傳造ヨリ被告ニ宛タル金拾壹圓ノ借用證書等ヲ偽造シ且ツ之レニ全人ノ偽造印ヲ押捺シテ勸解廷へ之レヲ提出シタル處傳造ニ發顯セラレ全人カ告訴スル所トナリシヲ以テ一時願下ヲ爲シタル事實ナレハ詐欺取財未遂犯ナリト論シ之レニ相當ノ刑ヲ適用スヘキト當然タルニ原裁判官ハ其所爲ヲ詐欺取財ノ豫備ナリトシ之レヲ無罪トセシハ擬律ノ錯誤ナリト云フニアレハ蓋シ原判文事實ノ部ニ明治二十年三月二十二日傳造ニ係リ福岡治安裁判所ニ貸金催促ノ勸解事件ヲ出願シ出廷ノ上該偽造證書ヲ提出シ以テ傳造へ示シタルニ全人ハ該證書差シ入レタルコナリ又其印影ハ實印ニ相違

未遂犯ノ
中止犯ト
區別

スル旨抗辨シ果シテ傳造ノ實印ニ相違スルヲ以テ全月二十八日該件ノ願下ヲ爲シタルモノナリトアルニ由テ其事實ヲ考查スレハ右願下ヲ爲セシハ原檢事ノ論スルカ如ク傳造ノ告訴カ原由トナリシモノニモアラサルカ如ク原承審官カ認メタル所ニ依レハ却テ其願下ヲ爲セシハ好意ノ中止ナルモノ、如シ果シテ然ラハ無罪ナルヘント雖トモ之レカ事實理由ノ明示ナキヲ以テ其所爲有罪ナル歟將タ無罪ナル歟明瞭ナラス(福岡輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ佐田實上告事件明 治二十一年四月二十一日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第二百十二條
第二百十六條

九號

凡ソ竊盜ハ其物品ヲ竊取スルヲ以テ目的ト爲スモノナレハ其物品ヲ持出シタルニアラサレハ其目的ヲ遂ケタリト云フ可ラス故ニ本件ノ如ク木綿蚊帳等ハ已ニ戸棚ノ内ヨリ取出シ風呂敷ニ包ミタルモ將ニ持去ラントスル際即チ未タ持去ラサル際取押ヘラレタル事實ナレハ目的ヲ遂サルコト明ナリ故ニ未遂犯ナリ(松山輕罪裁判所ノ言 告事件明治十九年十一月十六日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

十號

刑法第三百七十六條ノ罪ハ竊取ノ事實ヲ具備シテ已遂ト爲ス可キモノニシテ止タ伐採セシト云フヲ以直ニ已遂犯ト速斷スルヲ得ス何トナレハ其伐採トハ即チ竊盜

未遂犯罪

未遂犯

未遂犯ノ
解釋

ノ手段中ニ過キスシテ毫モ事後ノ目的ニ着手シタリト云フ形跡ナケレハナリ(臨岡
裁判所ノ言渡ニ對シ安高與九郎上告事件明治
十九年十一月九日大審院ニ於テ棄却ノ判決)
第三百十二條

第三百十條

十一號

原檢察官ノ意見ハ証書行使已遂ナリト云フモ偽造証書ヲ債主ニ交付シタルニ其抵
當不足ナリト云フヲ以テ受取ラサリシハ即チ意外ノ障礙ニ因リ其目的ヲ遂ケサリ
シモノナレハ之ヲ未遂犯トナシタルハ相當ノ裁判ニシテ擬律ノ錯誤ナリト云フヲ
得ス(熊本重罪裁判所ノ言渡ニ對シ甲斐國藏上告事件)
第三百十二條
第三百十條

十二號

被告カ證書ヲ作爲シ印影ヲ盜用シタルハ詐欺取財ノ念慮ニ成立シタルモノニシテ
已ニ證書ノ權利ヲ充足セシメ追テ使用セントシタルハ即チ詐欺ノ豫備ナルモノニ
シテ偽書行使ノ未遂ナリトノ論旨ハ不可ナリ抑モ未遂犯トハ豫備ヨリ追テ實行ニ
着手ノ際障礙若シクハ科錯ニ因リ事ヲ遂ケサル場合ヲ指シタルモノニシテ未タ内
部ノ手段ニ止マリ外部ノ所爲ニ發セサルモノハ豫備ノ部内ニ屬シ敢テ未遂ト云フ
得ス故ニ本件ノ如キハ尙ホ進シテ其證書ヲ以テ勸解ヲ出願スルカ若シクハ其他ノ

未遂犯ノ
豫備ト未
遂トノ區
別

方法ヲ以テ使用セント試ミサレハ未遂ニアラサルナリ(岩國治安裁判所ノ言渡ニ對シ原田
日大審院ニ於テ)
第三百十二條
第三百九十二條

十三號

原裁判言渡書ヲ查閱スルニ前寧口慶七夫婦ヲ殺害シ己レモ自殺セント決心シ云々
被告ハ誰レ彼レノ見定メナク眞ニ脇差ヲ以テ慶七カ左腕過半ヲ斬リ下ケタリ慶七
ハ行燈ヲ右手ニ持チ防禦セシモ左右手足胸部面部ノ嫌ヒナク無暗ニ斬リ付ケ都合
十二ヶ所ノ傷ヲ負ハス内妻「シゲ」モ起キ出テ慶七ト共ニ人殺々々ト呼ハリタルヨ
リ「シゲ」ニハ傷ヲ負ハスルノ間ナク其場ヲ逃レ出テ云々トアリテ以上ノ事實ニ依
レハ被告人ハ慶七「シゲ」ノ二人ヲ殺害スルノ目的ヲ以テ已ニ慶七ヲ殺害シタルモ
「シゲ」ニ對シテ未タ其事ヲ行ハス即チ豫備ニ止マルモノナルニ原裁判所ニ於テ門
岡「シゲ」ニ對スル所爲ヲ謀殺未遂犯トナシ刑法第二百九十二條第三百十二條第二十
三條ヲ適用シタルハ上告論旨ノ如ク擬律錯誤ノ裁判ナリトス(熊本重罪裁判所ノ言渡ニ
對シ宮崎常八上告事件明
治廿二年十二月廿五日大
審院ニ於テ死刑ノ宣告)
第三百十二條
第三百一十二條
第三百一十二條
第三百一十二條

未遂犯ノ
解

十四號

未遂犯罪

未遂犯ノ
中止犯ノ
區別

刑法第百十二條ノ所謂未遂犯トハ罪ヲ犯サントシテ已ニ其施行ニ着手スルモ未タ其事ヲ行ヒ終ラサル前犯人意外ノ情況ニヨリ障碍セラレ其目的ヲ遂ケ得サル場合ト已ニ其事ヲ行ヒ了リタルト雖モ意外ノ升錯ニ因リ遂ケ得サリシ場合ヲ云フモノニシテ彼ノ罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行ヒ始メタルモ未タ之レヲ行ヒ盡サハルニ方テ自ラ其事ヲ中止シタルハ意外ノ障碍ニ因リ遂ケ得サルモノニアラサレハ該條ノ所謂未遂犯ニアラサルナリ故ニ原會議局ニ於テ被告半平ハ姦夫喜三郎ヲ殺害セントシテ誤テ其長女テイヲ刺シタルモ其叫聲喜三郎ノ音聲ト異ナルヨリ頓ニ殺意ヲ止メ豊田源吾ニ治療方ヲ委託シ雀宮警察署へ自首シタルモノニシテテイノ負傷ハ十五日目ニ全癒シタルモノト認メ唯現ニ生シタル創傷ノ罪ヲ問フヘキモノトシ刑法第百一條第二項ニ該ルヘキ輕罪犯ナリトシテ宇都宮輕罪裁判所ニ移シタルハ頗ル當テ得タル判決ニシテ檢察官ノ上告論旨ハ頗ル當テ失シタルモノト云ハサルヲ得ス(宇都宮輕罪裁判所會議局ノ言渡ニ對シ半平上告事件)

第百十三條
第百十條第百九十條

十五號

偽造證書
行使既遂
ト詐欺取

證書偽造ノ所爲ニ對シ未遂犯ナリト云フモ已ニ偽造證書ヲ以テ裁判所ニ提出シ權利義務ノ爭訟ヲ起シタル上ハ私書偽造行使ノ罪ハ成立シタルモノトス因テ原裁判

財未遂ト
ハ同一ニ
アラヌ

所カ既遂ヲ以テ論斷シタルハ相當ニシテ其目的ヲ遂ケサル詐欺取財ノ所爲ハ未遂ニ係ルヲ以テ刑法第百九十七條第百十二條ニ照シ所斷シタルハ不當ニアラス(京都輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ西村利右衛門上告事件)
(明治二十一年六月二十二日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第百十三條
治罪法第百四條

十六號

今原判文ヲ查スルニ第四全夜全府南區大寶寺町淺野源三郎方ニ於テ全機ノ紙幣ヲ以テ餅ヲ買求メントシタルモ源三郎ガ立出タルヲ以テ發露センコトヲ恐レ行使ヲ遂ケサル事第六全夜全區長堀橋通一丁目小瀬清七方ニ於テ全機ノ紙幣ヲ以テ枇杷ヲ買求メントスル際全人妻イワカ立出タルヨリ發露センコトヲ恐レ行使ヲ遂ケサル事トノミ掲ケテ被告ガ其罪ヲ犯サントシテ如何ナル障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサリシヤノ理由ヲ明示セサルニ付未遂犯ナルヤ中止犯ナルヤヲ知ルニ由シ無シ(大坂重罪裁判所ノ言渡ニ對シ常盤木亮慎上告事件)
(明治二十年三月十八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第百十三條
第百九十三條

十七號

假令被害者ノ苦惱ヲ見テ殺意ヲ中止シ消毒藥ヲ施シタルニモセヨ毫モ其効ナク現ニ毒藥ノ爲メ死シタル上ハ即チ最初ノ目的ヲ遂ケタルモノニテ決テ殺人罪ノ區域

未遂犯罪

其事ヲ行
ヒ了リテ
中止スル

モ其効ナ
キハ本
罪ヲ免
ス

人ノ内部
ニ係ル働
キハ判文
ニ示スノ
要ナシ

決行後ノ
首出ト中
止犯トハ
其趣ヲ異
ニス

ヲ脱シタリト云フ可カラサレハ此點ハ無用ノ事實ナルヲ以テ之ヲ掲ケサルハ當然
ナリ(弘前重罪裁判所ノ言渡ニ對シ新岡トメ上
告事件明治廿一年二月廿一日大審院判決)

第一百十一條

十八號

犯罪ノ起因ヲ明示ス可シト云フモ其起因トハ罪ヲ犯シタルノ思考企圖決定ノコナ
ルヘシト雖モ此等内心ノ所爲ハ人間ノ能力ヲ以テ察知シ得ベキ者ニアラサルニ付
被告ニ於テ吐露セサル限りハ何人ト雖モ之レヲ知ルニ由ナク其起因ヲ明示セント
スルモ到底爲シ得ヘキコトニアラサルヲ以テ外部執行ノ所爲即チ謀殺既遂ノ事實ヲ
明示スレハ充分ナリトス(千葉重罪裁判所ノ言渡ニ對シ伊藤文藏上告事件明
治二十一年三月十五日大審院ニ於テ
ノ判決)

第一百十一條

十九號

原判文ヲ閱スルニ明治廿年七月十日新田慶次郎等ヨリ云々且直助ニ對シ怨恨憤怒
頓ニ激發シ再ヒ孝治ヲ刺シテ直助ニ不吉ヲ與ヘント決意シ孝治ヲ抱キ所持ノ小刀
ヲ携ヘ直助カ居室ニ到リ店前板間ニ孝治ヲ措キ右小刀ヲ以テ孝治ノ腹部ヲ一刺シ
直助ニ引渡スト言放チ云々首出シタルモ孝治ハ幸ニシテ死ニ至ラザリシヲ以テ犯
罪ノ目的ヲ遂ケサリシ者ナリトアリテ孝治ヲ刺殺ノ決意ハ繼續シ已ニ兇行ヲ加ヘ

去テ警察署ヘ自首シタルニ孝治ハ幸ヒニ死ニ至ラサル事實ヲ明示シアレハ之ヲ以
テ中止犯ノ事實ヲ認メタル者トハ解釋シ難シ(仙臺重罪裁判所ノ言渡ニ對シ後藤倉治上告事
件明治廿一年三月十五日大審院ニ於テ
ノ判決)

第一百十一條

廿號

上告ニ因リ原判文ヲ閱スルニ被告篤藏ニ於テ「カク」ヲ殺害シ尋テ「ヤウ」モ殺害ス
ベキノ決意ヲ爲シ云々「シャウ」ハ突然窓ヨリ飛下リ逃走シタルヲ以テ篤藏ハ直ニ
其斧ヲ携ヒ同ク窓ヨリ飛下リ之ヲ追蹤シタルモ暗夜ニシテ其踪跡ヲ失シ云々「ト
事實記載アリテ已ニ其所爲ニ着手シタル「ト明瞭ニシテ犯罪豫備ニ止ムルモノト爲
ス可ラス抑犯罪着手トハ已ニ其所爲ニ取掛リ意匠全ク外形ニ露ハレタルモノヲ云
フ者ニシテ被告ノ如キ已ニ兇器ヲ弄シタル以上ハ假令未タ一撃ヲ試ミサルモ其着
手タルヲ免カレス(高知輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ山本篤藏上告
事件明治十九年五月五日大審院ノ棄却判決)

第一百十一條

廿二號

偽造ノ證書ヲ行使シ被害者ヲ欺罔シテ其證書ノ金員ヲ詐取セントシ之ヲ裁判所ニ
供出シテ以テ權利ヲ爭ハントセシモノハ人ヲ欺罔スルノ手段ニ着手セシ「ト明了ナ

未遂犯罪

偽造ノ証
書ヲ裁判
所ニ供出
タル以

人ヲ殺害
セシト其
兇器ヲ弄
シタル以
上ハ未ダ
一撃セサ
ルモ着手
アリタル
モノトス

上ハ犯罪
ニ着手シ
タルモノ
トス

リ(神戸重罪裁判所ノ言渡ニ對シ大森序助上告事件)
明治二十年三月廿九日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第百十一條

第廿二號

中止犯

奸夫ト誤認シ奸所ニ於テ刺サントシテ誤テ長女ヲ傷シ泣聲ニテ初メテ心付後自首
シタルモノニシテ被告カ所爲ハ意外ノ障礙ニアラスシテ中止犯ナルヲ明瞭ナリト
ス(罪裁判所ノ言渡ニ對シ平田半平上)
告事件明治廿年一月廿九日大審院判決

第百十二條

第廿三號

山林盜伐
ノ未遂犯

山林盜伐既遂未遂ヲ判別スル要點ハ斫倒シテ尙ホ進テ之ヲ運搬スルノ準備ヲ爲ス
場合ニ至リタルモノナラサル可カラズ唯之ヲ斫倒シ幹根ヲ分離シタルノ場合ハ是
レ竊盜ノ方法施行中ニ在ルモノニシテ既遂犯ニハ猶ホ一段階ヲ隔ツルモノナリ

(罪裁判所ノ言渡ニ對シ中川宇八上)
告事件明治二十年五月六日大審院判決

第百十一條

廿四號

未遂犯

盜竊既遂トハ金錢珠玉ノ如キハ之ヲ手ニ握取スルヤ直ニ成立ス可キモ函中ニアル
全部ニ目的アリテ單ニ二三箇取リタル片障礙ノ生シタル如キハ未遂犯ナリトス

(罪裁判所ノ言渡ニ對シ大槻福上)
告事件明治二十年九月卅日大審院判決

第百十一條

第廿五號

欠効犯ト
不能犯ト

藥品取扱規則第一條ニ其性効峻烈ニシテ僅少ノ分量ト雖モ直ニ性命ヲ傷害スルニ
足ルヘキモノヲ第二類毒藥トナストアリテ「モルヒネ」ハ第二類ノ毒藥ナルヲ明瞭
ナリ故ニ苟モ惡意ヲ以テシナラ毒殺セント謀リ「モルヒネ」ヲシナニ飲マシメ「モル
ヒネ」ノシナヲ殺ス能ハサリシ所以ハ「モルヒネ」ノ人ヲ殺ス性質ナキニ非ラス其人
ニ對シ分量ノ足ラサルニ依リシモノナレハ不能犯ト稱スヘキモノニアラス欠効犯
ト云フ可キモノニシテ即チ刑法第百十二條ニ所謂舛錯トアルニ該當ス可キモノナ
リニ原裁判所ニ於テ被告ノ所爲ニ對シ刑法第二百九十三條同第百十二條等ヲ通用
シタルハ相當ニシテ擬律錯誤ニ非ラサルナリ又第二ハ理由ノ不備ナリト云フニア
レモ抑モ鍼ヲ使用スルハ決シテ人ヲ殺スニ足ラスト確言シ得可キモノニ非ラサレ
ハ原裁判官ニ於テ鍼ハ人ヲ殺スニ足ルヘキモノト認メ而シテ被告カ所爲即チ被告
ハ甚四郎ト謀リ鍼ヲ以テシナヲ刺シ殺サンヲ決シ甚四郎ハシナヲ欺キ其胸部等
ニ鍼治用ノ銀鍼ヲ六回試下シタルモ其術拙劣ニシテ之ヲ殺害シ得サリシモノト認
メ謀殺未遂ヲ以テ論シタルハ相當ニシテ毫モ理由不備ト云フヲ得ス(千葉裁判所ノ言
渡ニ對シ金木タ

未遂犯罪

ツ上告事件明治二十年五月三
日大審院ニ於テ棄却ノ判決

第一百十二條

第廿六號

烟草稅則
第卅四條
ハ販賣ノ
既遂未遂
ヲ問フ者
ニアラス
又從犯例
ヲ適用ス
ヘキモノ
ニアラス

烟草稅則第三十四條ハ販賣ノ未遂犯ヲ罰スル精神ニアラスト云フモ該法條ハ營業
鑑札ヲ受ケスシテ烟草營業ヲ爲ス者ニ當行スルモノニシテ販賣ノ既遂未遂ヲ論ス
ヘキ法意ニ非サルコトハ該明文ニ就テ知ルヲ得ヘシ又第三點ニ於テ被告茂市ノ所爲
ハ被告權右工門ノ從犯ヲ以テ罰スヘキニ刑法第二條ニ依リ無罪ヲ言渡シタルハ不
法ナリト云フモ烟草稅則違犯ノ如キハ刑法第九條ヲ適用スルノ限リニ非ス(治安
裁判所ノ言渡シニ對シ石飛權右工門船木茂市等が上告
事件明治二十一年一月十八日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第十章 親屬例

第一百十四條 正文略之

第一百十五條 正文略之

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第一百十六條 正文略之

比照(再開刑
法草案)第一章 天皇陛下等ノ身體ニ對スル重罪及ヒ輕罪

本條揭ク
ル所ノ重
罪ニ一
般ニ適用
スル刑罰

草第三百三十一條 日本ノ天皇皇后皇太后皇太子即チ帝位ヲ繼クヘキ者ニ對シテ犯
シタル總テノ重罪又ハ輕罪ハ左ニ掲クル變更ヲ以テ第三章第一章第十三節ニ循
ヒ皇族親其尊族親ニ對シテ犯シタル重罪又ハ輕罪ト同一ニ罰セラル可シ(刑、第百
十六條○草、零○佛刑、第八十六條第一項第二項第三項)

(附言) 此變更ハ第一款乃至第九款司法省刑法編纂委員ノ少數ニテ主張シ元

老院ノ審査委員ニ呈供セシモノニシテ該委員ノ認定セザリシ所ノモノナリ

第一款 天皇等(即チ天皇皇
后皇太后)又ハ皇太子ニ對スル重罪又ハ輕罪ヲ犯ス爲メニ二人

若クハ數人ニテ協議シタル陰又ハ同謀決心アリテ而シテ犯罪ノ時犯人意外ノ情狀

ニ因リ犯罪ノ効力虧缺セシ時ハ刑一等ヲ減スルト否トハ裁判所ノ適宜ニ委ス

(刑、第百十六條○草、零○佛刑、第八十八條)

第二款 前述ノ陰謀ノ場合ニ於テ前款同様ノ方法ニ因テ中止セル未遂犯(即チ犯
罪ノ着手
中ニ止セ
ルヲ云フ)アルキハ刑一等ノミヲ減ス(刑、第百十六條○草、零○佛刑、第八十八條)

第三款 若シ其陰謀ニ付キ或ル豫備ノ所爲ノミヲ行フニ過キサリシハ刑二等

ヲ減ス(刑、零○草)(佛刑ノ誤リ)第八十九條第一項

第四款 若シ其陰謀ニ付キ未タ何等ノ豫備ノ所爲ヲモ行ハサリシハ刑三等ヲ

減ス(刑、零○草、零○佛刑、第八十九條第二項)

皇室ニ對スル罪

未遂犯
豫備ノ所
爲
陰謀ニ豫
備ノ所爲
ナキ事

陰謀
重罪輕罪
ノ關係

共謀ヲ爲
サスシテ
一人ノ決
意ニテ豫
備ノ所爲
ヲ爲ス事
陰謀ノ發
言ニ承諾
ヲ得サル
事
何等ノ搜
索モ之無
キ前ニ告
發スル事

既ニ搜索
ヲ始メタ
ル後メタ
テ告
發
監視

皇陵ニ對
スル不敬
ノ所爲ハ
草案第二
百九十七
條ニ依リ

ヲ發見ス
ヘシ

監視

帝權ニ對
スル犯罪

第五款 一人ノ決心ヲ以テ豫備ノ所爲ヲ行ヒシキモ亦同シ(刑、零〇佛刑、第九十條)

第六款 第三百一十一條ニ豫定シタル重罪ノ一又ハ輕罪ノ一ヲ犯サンカ爲メ陰謀

ヲ組成スルノ發言アリテ此發言ニ承諾ヲ得サリシキハ其發言シタル重罪又ハ輕

罪ノ刑ニ四等ヲ減シテ之ヲ其發言者ニ科ス可シ(刑、零〇草、零〇佛刑、第八十九條

第四項)

第七款 前數款ニ掲ケタル陰謀ノ一ニ干與シテ犯罪執行ノ端緒アラザリシ前及

ヒ其事件ニ付キ何等ノ搜索モアラザリシ前ニ最初自カラ縛ニ就キ官廳へ陰謀ノ

アルコトヲ告發シ而シテ其同謀人名ヲ指示スル者ハ完全ノ宥恕及ヒ免刑ヲ受ク可

シ(刑、零)

第八款 犯罪執行前ナルニ於テハ搜索ノ始マリシ後ノミナラス就縛ノ後ト雖モ

官廳ヲシテ陰謀ノ主タル犯人ノ捕縛ヲ得セシメタル者モ亦右ニ同シ(刑、零)

第九款 告發人タル犯者ハ五年以上十年以下ノ監視ニ附セラル可シ(刑、零)

第一百十七條 正文略之

第一百二十二條 天皇陛下等及皇太子ニ對シ且其御座前ニ於テ公然加ヘタ

公然ノ不敬無禮ノ行ハ三月以上五年以下ノ重禁錮及ヒ十

圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處セラル可シ

若シ右ノ輕罪ヲ公然ト印刷演說ノ手段ヲ以テ(又ハ其他ノ手段ヲ以テ)天皇陛下等

又ハ皇太子ノ御坐前外ニ於テ犯シタルハ二月以上二年以下ノ重禁錮及ヒ五圓以

上百圓以下ノ罰金ニ處セラル可シ(刑、零〇佛刑、第八十六條第四項)

第一百十八條 草次

第一百十九條 草案第三百二十二條ヲ比照ス可シ

第一百二十條 正文略之

第三百三十三條 天皇陛下等又ハ皇太子ノ身體ニ對スル犯罪ニ付キ禁錮ノ刑ヲ言

渡シタル總テノ場合ニ於テハ其犯人ヲ禁錮ノ外ニ一年以上三年以下ノ監視ニ附ス

ルコトヲ得可シ(刑、零〇佛刑、第八十六條)

第二章 國事ニ關スル罪

第一節 内亂ニ關スル罪

第二百一十一條 正文略之

第二章 國ノ内部ノ安寧ニ關スル重罪及ヒ輕罪

第三百三十四條 日本ノ皇統ヲ顛覆シ又ハ帝位ヲ嗣クノ適法ノ順序ヲ變更シ若ク

ハ日本國又ハ其屬國ノ一部分ヲ天皇ノ權威ヨリ潛領シ若クハ國政ニ關スル天皇ノ

權利及ヒ特權ヲ減少スルヲ目的トシタル内亂謀反又ハ兵器ヲ携ヘタル一揆ニ與ミ

國事ニ關スル罪

一七一

シタル總テノ有罪者ハ其犯罪加効ノ度ニ從ヒ左ノ如ク處斷ス

第一 犯罪ノ煽動者タリシ者及ヒ其内亂謀反又ハ一揆ニ付キ巨魁トナリテ指揮ヲ爲セシ者ハ無期ノ流刑及ヒ四百圓以上四千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二 總テ其他ノ指揮又ハ威權アル事務即チ職務ヲ爲セシ者ハ有期ノ流刑及ヒ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三 謀反ニ與ミシテ(兵器ヲ携ヘサリシト雖モ)前項ニ掲ケタル何等ノ指揮又ハ何等ノ職務ヲ行ハサリシ者ハ重禁獄ニ處ス(刑)第百二十一條○草○佛刑、第百八十七條)

中央官廳ニ對スル犯罪

草第百三十五條 内亂謀反又ハ兵器ヲ携ヘタル一揆ノ目的ハ一箇又ハ數箇ノ中央官廳又ハ其長官ノ職掌ヲ紊亂シ或ハ變更スルニ在ルカ若クハ其官廳ニ於テ爲シタル一箇又ハ數箇ノ政策上又ハ施政上ノ處分ヲ廢止シ若クハ中止スルニ在ルキハ左ノ如ク處斷ス

第一 謀反ノ煽動者及ヒ其巨魁ハ有期ノ流刑及ヒ二百圓以上二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二 其副魁ハ重禁獄及ヒ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三 其他ノ干與者ハ輕禁獄ニ處ス(刑、零○草、零○佛刑、第九十一條第九十六條)

縣多ノ府廳ニ對スル犯罪

(協議シテ一時ニ二箇又ハ數箇ノ府縣ノ官廳ニ對シ謀反ヲ爲セシキハ前ト同様ニ處斷ス可シ)(刑、零)

數多ノ町村ノ官廳ニ對スル犯罪

草第百三十六條 前條ニ豫定セル目的ヲ以テ一府縣ノ官廳ニ對シ又ハ一箇若クハ數箇ノ町村ノ官廳ニ對シ謀反ヲ爲セシニ過キサリシキハ左ノ如ク處斷ス

第一 煽動者及ヒ巨魁ハ重禁獄及ヒ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二 副魁ハ輕禁獄及ヒ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三 總テ其他ノ干與者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス(刑、零)

草第百三十六條第二(謀反又ハ兵器ヲ携ヘタル暴動ハ日本政府ニ於テ認知シ若クハ認知セサル宗教上ノ講説ヲ有効ナラシメントシ又ハ設置セシメントスル目的ヲ有セシキハ有罪者ノ干與ノ度ト妨害ヲ蒙リタル府縣ノ數トニ從ヒ前二箇條ニ掲ケタル刑ヲ適用ス可シ)(刑、零○草、零○佛刑、第九十一條第九十六條)

中央官廳ニ對スル暴行又ハ脅迫

草第百三十七條 兵器ヲ携ヘ又ハ兵器ヲ携ヘスシテ集合セル暴徒第百三十五條ニ豫定セル官廳ノ一ニ對シ其集會及ヒ其議事ヲ妨ケンカ爲メ又ハ強テ其意ニ反スル決議ヲ爲サシメンカ爲メ暴行又ハ脅迫ヲ行ヒシキハ其犯人ニ對シ行爲ニ干與スルノ度ニ從ヒ第百三十六條ニ記載セル刑ヲ適用ス可シ

其他ノ官廳ニ對ス

(第百二十六條ニ豫定セル官廳ノ一ニ關スルキハ其場合ハ第百六十七條及ヒ第百

國事ニ關スル罪

ル犯罪ニ付テハ他ノ條ニ送リテ爲ス事

六十八條ニ現定ス(刑、第三百三十六條、第三百三十七條、第三百三十九條○草、零○佛刑、第九十七條、第九十八條、第二百九條以下)

第百二十二條 草案第三百三十八條第一項ヲ比照スヘシ

第百二十三條 草案第四百四十四條ヲ比照スヘシ

第百二十四條 草案第三百三十八條第一項ヲ比照スヘシ

第百二十五條 草案第三百三十九條ヲ比照スヘシ

第百二十六條 草案第四百四十一條ヲ比照スヘシ

第百二十七條 草案第四百四十六條ヲ比照スヘシ

第百二十八條 草案第四百四十四條ヲ比照スヘシ

執行ノ端緒

草第三百二十八條 前五箇條ニ掲載セル刑ハ其餘ニ豫定セル犯罪執行ノ端緒アル片ニ之ヲ科ス可シ(刑、第二百二十四條○草、零○佛刑、第八十八條)

前五條ニ豫定セル目的ヲ以テ脅迫又ハ欺計ヲ用ヒ左ノ諸件ヲ犯シタル片ハ假令ヒ戰鬪ナカリシトモ亦前五箇條ニ記載セル刑ヲ科ス可シ

第一 兵器彈藥彈丸海陸軍ノ軍裝又ハ糧食等軍備品ノ奪領

第二 海陸軍ノ武庫屯所若クハ政府ニ屬シ又ハ政府ノ使用スル船舶ノ占領又ハ強奪

第三 同上ノ手段ヲ用キテ兵隊又ハ公力者(主トシテ巡査官等ヲ云フモノナリ)ノ屯集運動ヲ妨ケ若クハ一揆ヲ豫防シ又ハ壓スル爲ニ送リタル通知書又ハ命令狀ノ送達人ノ通行ニ加ヘタル妨害(刑、第二百二十二條○草、零○佛刑、第九十二條乃至第九十七條)

豫備ノ所爲第一ノ場合

草第三百二十九條 兵隊ヲ召集シ又ハ編成シ若クハ兵器彈藥彈丸軍裝糧食等ノ軍備品ヲ備ヘ以テ單ニ前條々ニ記載セル犯罪ノ一又ハ數多ノ豫備ノ所爲ヲ爲セシ片ハ犯人ノ身分ニ循ヒ第三百三十四條乃至第三百三十七條ニ定メタル刑ニ各一等ヲ減ス總テ其他ノ豫備ノ所爲ニシテ犯人意外ノ情狀ニ因リ執行ノ繼續ナキ片ハ少ナクモ本刑ニ二等ヲ減ス可シ(刑、第二百二十五條○草、零○佛刑、第八十九條第一項及ヒ第九十二條)

陰謀

草第四百十條 二人又ハ數人ニテ前條々ニ豫定セル犯罪ノ協議決心ノミヲ爲セシ片ハ該條々ニ定メタル刑ニ三等ヲ減ス

陰謀ノ發言

陰謀ヲ發言シタルモ之レカ承諾ヲ得サル片ハ本刑ニ四等ヲ減ス可シ(刑、零○草、零○佛刑、第八十九條第二項第三項及ヒ第四項)

完全ノ宥恕第一ノ場合

○佛刑、第八十九條第二項第三項及ヒ第四項
草第四百十一條 謀反ノ煽動者ニ非ス又謀反ニ付キ何等ノ指揮若クハ威權アル職務ヲ行ハサル者直接ニ犯罪執行ニ干與セスシテ自カラ脫黨シタル片ハ完全ノ宥恕

國事ニ關スル罪

第二ノ場
合

及ヒ免刑ヲ受ク可シ
陰謀ニ付キ威權アル職務即チ事務ヲ行フト雖モ犯罪執行ノ端緒ニ先タチ且第百三十八條ニ豫定セル行爲ノ前ニ自カラ縛ニ就キ陰謀ヲ告ケ巨魁ヲ指名シタルハ亦前項同一ノ完全ノ宥恕ヲ受ク可シ

監視

但シ前二項ノ犯者ハ二年以上五年以下ノ監視ニ付スルコトヲ得(刑、第百二十六條○
草、零○佛刑、第百條)

刑ヲ減ス
ル事

草第百四十二條 煽動者及ヒ巨魁犯罪執行ノ端緒アルノ前及ヒ第百三十八條ニ豫定セル行爲ノ前ニ降伏シテ自カラ縛ニ就キ其重立タル共犯及ヒ從犯ヲ告知シタルハ豫備ノ所爲及ヒ陰謀ニ付キ第百三十九條及ヒ第百四十條ニ記載シタル刑ノ二等ヲ減ス可シ(刑、零)

承前

草第百四十三條 總テ有罪人(巨魁ト巨魁ニ非サ
ル者トチ區別セス)謀反ノ結局ニ至ラサル前ニ自カラ縛ニ就キタルハ各々其處セラル可キ本刑ノ一等ヲ減セラル可シ(刑、零)

通常ノ重
罪及ヒ輕
罪

草第百四十四條 總テ犯人第百三十四條以下ノ數條ニ豫定セル犯罪ヲ行ハシカ爲メ人民ノ財産若クハ身體ニ對シ通常ノ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル者ハ常律ノ刑ニ處セラル可シ

何レノ場合ニ於テモ軍使俘虜人質又ハ其他接戰ニ加ハラサリシ者ヲ殺シタル者ニ

承前

ハ死刑ヲ宣告ス

刑ノ免除
及ヒ減輕

若シ兵器ヲ携フル一揆カ前以テ指名シタル一人若クハ數人或ハ衆人ヲ殺戮シ又ハ公私ノ財産ノ毀壞若クハ強奪ヲ以テ目的ト爲シタルハ單ニ常律ノ刑ノミヲ適用ス可シ第百三十八條乃至第百四十三條ノ條例ハ本條ニ豫定シタル重罪ニ適用ス(刑、第百二十八條)

隊兵ノ供
給者

草第百四十五條 下ニ掲タル所ノ第百五十四條ノ諸條例ハ反逆人ト接戰スル公力者ノ供給者(即チ俗ニ所謂
用達ナルモノ)ニ適用ス

從犯

草第四十六條 前條々ニ記載シタル犯罪執行ノ前後ニ於テ其行爲ノ目的及ヒ性質ヲ知リナカラ隨意ニ其犯者ノ屯集ノ爲メ若クハ潜伏ノ爲メノ家屋ヲ供給シタル者ハ該條々ニ豫定セル犯罪ノ從犯トシテ之ヲ罰ス可シ

監視

然レトモ第百八十七條ニ指定シタル血族又ハ姻族ニ付テハ該刑ヲ免除ス(刑、第百二十七條)

草第百四十七條 總テ本章ニ豫定セル犯罪ニ付キ禁錮ノ刑ヲ宣告スル場合ニ於テハ犯人該刑ヲ受ケルノ外ニ一年以下三年以下ノ監視ニ附セラル、コアル可シ

第二一節 外患ニ關スル罪

第百二十九條 正文略之

國事ニ關スル罪

第三章 外患ニ關スル重罪輕罪

兵器ヲ弄
スル大逆

草第四百四十八條 凡ソ日本人外國ト交戰中敵國ニ與ミシテ本國ニ抗敵シ又ハ其抗
戰ニ加リタル日本ノ同盟國ニ抗敵シタル者ハ無期流刑ニ處ス(但シ敵ニ與シタル
兵卒ニ關シテ軍律上ニ記載セル更ニ嚴ナル刑ニ抵觸スルコトナカルヘシ)

敵軍ニ加
ハトル事

交戰中日本ニ背叛シ又ハ日本ノ同盟國ニ背叛シテ敵軍ニ加ハリ若クハ敵軍ノ補助
トシテ或ル名義ヲ以テ敵兵ニ附屬シタル者ハ日本及ヒ其同盟國ニ抗敵シタル者ト
同シ論ス(刑第百二十九條○草、第七十五條第七十九條)

例外

(醫師外科醫看護病夫其他特ニ敵ノ病院若クハ病營ニ附屬シタル者ハ本條ノ規則ヲ
以テ論スルノ例ニ非ス)

第三百三十條

草案第四百四十九條第百五十條ヲ比照スヘシ

第三百三十一條

草案第五百五十條第百五十一條ヲ比照スヘシ

敵ニ物ヲ
交付スル

草第四百四十九條 外國ト交戰中敵國ノ兵隊其他敵兵ニ附屬スル者ヲシテ日本又ハ
同盟國ノ管内ニ入ルヲ得セシメ若クハ日本及ヒ同盟國ノ都府城寨陸海軍陣營港口
倉庫造兵場軍艦又ハ運漕船兵器彈藥廠若クハ糧食裝具廠ヲ敵國ニ交付シタル者ハ
無期流刑ニ處ス(刑、第百三十條○草、第七十七條)

假キ

(日本及ヒ同盟國ノ攻守又ハ安全ニ有用ナル其他ノ場所又ハ物件ヲ敵ニ交付シタ

假キ

ル者ハ其情ノ輕重ニ由リ有期流刑又ハ兩禁獄(輕又ハ重)ノ一ニ處ス)

草第百五十條 戰時ニ在テ政府ノ官員若クハ屬吏又ハ其他ノ日本人其職務ニ因リ
或ハ特別ノ委任ヲ受ケタルニ因テ本國若クハ同盟國ノ外交商議ニ關スル密事ヲ知
リ又ハ陸海軍ノ機密ヲ知テ之ヲ敵國ノ官吏ニ漏泄シタル者ハ無期流刑ニ處ス(草、
第八十條)

假キ

偽計賄賂若クハ暴行ヲ以テ前項ノ密事ヲ明カニスヘキ密事公書圖面又ハ其他ノ書
類ヲ得テ之ヲ敵ニ渡シタル者モ亦同シ(刑、第百三十條第百三十一條○草、第八十一
條第八十二條)

假キ

(偶然其秘事若クハ公書ヲ知得テ之ヲ敵ニ渡シタル者ハ有期流刑ニ處ス)

假キ

草第百五十一條 凡ソ日本人敵國ノ間諜ヲ行ヒ以テ日本若クハ同盟國ノ兵隊又ハ
艦隊ノ占ムル地位其運動又ハ其軍勢軍備ノ景狀ヲ敵ニ通知シ或ハ内地港口都府又
ハ城寨ノ細圖ヲ敵ニ交付シ若クハ敵ノ爲メニ便宜ナルカ又ハ危險ナル道路及ヒ通
路ヲ敵ニ指示シタル者ハ無期流刑ニ處ス凡ソ日本人日本及ヒ同盟國ノ管内ハ敵國
ノ間諜又ハ斥候ヲ入ラシメ之ヲ誘導シ若クハ之ヲ隱匿シタル者亦同刑ニ處ス(刑、
第百三十一條○草、第七十七條)

假キ
公信ノ妨
害

草第百五十二條 左ニ列記ノ者ハ無期流刑ニ處ス

國事ニ關スル罪

一 敵國ヲ助クルノ目的ヲ以テ腕力又ハ偽計ニ因リ日本政府又ハ同盟國ヨリ送達
 スル命令書又ハ公信ヲ携帯スル者ノ通行ヲ妨ケシ者
 二 同上ノ目的ヲ以テ公信ノ通達受信ヲ爲スヘキ電信機械ヲ破壊シ又ハ使用スヘ
 カラサラシメタル者
 三 同上ノ命令又ハ公信ヲ携帯發達又ハ受信スルノ任ヲ受ケテ之ヲ破壊シ迂廻シ
 遲延シ又ハ摩滅シタル者
 (電信杭ヲ倒シ電信線ヲ斷チ又ハ其他ノ方ニヨリ公信ノ發達受取ヲ延滞セシメタ
 ル者ハ各其情ノ輕重ニ從ヒ有期流刑又ハ兩禁獄(輕重ノ)ノ一ニ處ス)
 草第百五十三條 前數條ニ記載シタル犯罪犯人意外ノ舛錯ニ因リ闕効シタル時ハ
 本刑ノ一等ヲ減ス
 又犯罪ノ着手又ハ其施行ヲ始メタルニ過キスシテ未タ遂ケサル時ハ本刑ノ一等若
 クハ二等ヲ減ス
 其犯罪ヲ施行スルノ目的ヲ以テ唯敵國ト通信シ犯罪豫備ノ行爲ニ止マリタル時ハ
 本刑ノ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百三十二條 正文略之

草第百五十四條 凡ソ日本人(自己ノ名ヲ以テ又ハ商業會社ノ社長トシテ)日本

綴キ
物品ヲ豫

豫備

未遂

綴キ
反逆ノ闕

綴キ
備セサル

政府又ハ陸海軍官憲ヨリ陸海軍ノ爲メニ物品ヲ辨備シ若クハ工業ヲ執行ス可キ事
 ヲ任セラレタル者敵ト通謀シ或ハ内國人若クハ外國人ヨリ賄賂ヲ收受シテ故ラニ
 其契約ニ定ムル期限内又ハ契約ニ定ムル方法ニテ其契約ヲ行ハサル時ハ重禁獄ニ
 處ス(且二百圓已上二千圓已下ノ罰金ヲ科ス)

若シ懈怠ニ因テ其契約ヲ闕キタル場合ニ於テハ六月已上二年已下ノ輕禁錮二拾圓
 已上二百圓已下ノ罰金ニ處ス(刑第百三十二條○草第百三十條及ヒ其次條)

草第百五十五條 未タ交戦ニ至ラスト雖モ既ニ敵國ニ對シ戰書ヲ送ラントスル際
 ニ於テ前數條ニ記シタル罪ヲ犯シタル者亦各々其本條ニ從テ處斷ス

草第百五十六條 日本ニ在留スル外國人第百四十九條及ヒ其次條ニ記載シタル重
 罪及ヒ輕罪ヲ犯シタル時ハ其正犯又ハ從犯ハ各本條ニ記スル刑ニ照シテ一等ヲ減
 ス

綴キ
將ニ戰ハ
ントスルハ
際ノ罪トシ
外國人

第五百十七條 此章ノ規則ニ依テ禁錮ヲ言渡シタル場合ニ於テハ都テ裁判所ニ於
 テ該犯ヲ一年已上三年已下ノ監視ニ付スルヲ得

草第百六十六條 (若シ内亂若クハ暴動ノ際ニ於テ征討軍ヲ抗拒シ又ハ遲延セシム
 ル手段トシテ第百五十八條第百六十一條第百六十二條及ヒ第百六十四條ニ記載シ
 タル所爲ヲナセシ者ハ未遂犯ト看做シテ之ヲ第百三十八條ニ照シ論ス(千八百五

内亂外患
ノ場合

國事ニ關スル罪

十一年ノ佛法第四條及第五條

〔外國ト交戦ノ際敵國ノタメニ本國ニ叛スルノ目的ヲ以テ右ノ所爲ヲナセシ者ハ之ヲ無期流刑ニ處ス〕

第三百二十三條 正文略之

第三百二十四條 正文略之

第三百二十五條 草案第五百五十七條ヲ比照スヘシ

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第一節 兇徒聚衆ノ罪

第三百三十六條 草案第三百二十七條ヲ比照スヘシ

第三百三十七條 草案第三百三十八條ヲ比照スヘシ

第三百三十八條 草案第四百四十四條ヲ比照スヘシ

第三百三十六條第三百三十七條
第三百七十八條

一號

上告ノ趣旨ハ強盜ノ所爲ハ兇徒聚衆罪中ノ者ニシテ別罪ニアラス然ルニ其別罪タルノ理由ヲ明示セスシテ別罪ト爲シタルハ不法ナリト云フニ在ルモ是亦然ラス抑モ強盜ノ所爲ト兇徒聚衆ノ罪ト其性質ニ差異アルヲハ刑法第三百三十六條同第三百三十七條及ヒ同第三百七十八條等ノ法文ニ照シテ明瞭ナレバ尙モ其獨立罪タル元素ヲ具備スル以上ハ其所爲兇徒聚衆罪執行中ニアルト其前後ニアルトヲ分タス當然別罪トシテ論スベキモノナレバ殊更ニ其別罪タルノ理由ヲ付スルニ及ハサルモノトス然リ而シテ原判文ニハ強盜ノ事實モ亦明瞭ニ記載アルヲ以テ事實理由ヲ付セサル不法ノ裁判ト爲スヲ得ス(浦和重罪裁判所ノ言渡ニ對シ柿崎藤藤上告事件
明治十八年四月七日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

兇徒聚衆
中ノ強盜
ハ更ニ論
ス

第三百二十九條 正文略之

第二節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第一節 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第三百六十七條 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政又ハ司法ノ命令ヲ執行スルニ當リ重大ナル暴行若クハ脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ六月已上四年已下ノ輕禁錮拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

其暴行若クハ脅迫ノ目的官吏ヲ強ヒテ其執行スルヲ欲セサル處置ヲ執行セシムルニ在リタル時モ亦同シ(刑第三百二十九條○佛國刑法第二百九條ヨリ同第二百二十

一條ヲ看ヨ)

〔第四百十一條ヨリ第四百十三條マテニ定メル場合ニ適スル犯人ニハ特ニ刑ノ宥

恕及ヒ減輕ヲ行フヘシ〕(草第二百二十三條)

〔第四百十一條ヨリ第四百十三條マテニ定メル場合ニ適スル犯人ニハ特ニ刑ノ宥

恕及ヒ減輕ヲ行フヘシ〕(草第二百二十三條)

兇徒聚衆ノ罪 官吏ノ職務妨害ノ罪

官廳ニ對
スル妨害
ノ妨害ハ
草案第百
三十七條
ヲ參看ス
ヘシ

宥恕又ハ
減輕

第二百二十九條

一號

罪証運滅
ノ爲メ官
吏ニ抗拒
シタルモ

今扣訴ノ判文ヲ閱スルニ受取書ヲ口中ニ差入シタルニ依リ云々トアリテ已ニ吞込ミタリト認メタルニアラサレハ収税屬谷幡直力之ヲ取戻サントシタリト認定セシハ道理ニ反スル處ナキノミナラス突然協合ヨリ腕力ヲ以テ該受取証ヲ奪ヒ取り之ヲ口中ニ差入レタルヨリ直ハ其場ニ於テ之レヲ取戻サント互ニ揉合共々仆レ云々ト暴行ヲ加ヘ官吏ノ職務執行ヲ抗拒セン事實明瞭ナスレハ假令罪証ヲ隠蔽スルノ手段ニモセヨ刑法第三十九條ノ制裁ヲ免カル可カラズ(東京控訴院ノ言渡シニ對シ平野宗十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百二十九條

二號

官吏抗拒
ノ度ニ違
セス

原裁判言渡書ヲ檢スルニ被告人ハ明治二十一年十月二十五日千葉縣收税屬齋藤和三郎カ烟草檢査トシテ被告人方ニ出張シ云々被告人ノ三男喜三郎カ店頭抽斗ニテ怪ムヘキ舉動ヲナシタルヲ認メタリトテ直チニ之レヲ檢査セント抽斗ニ手ヲ掛ケ引出サントセシニ被告人ハ直チニ立テ抽斗ニ手ヲ掛ケ且ツ檢査員ノ手ヲ支ヘ小見村在勤ノ巡査カ來會セサル内ハ檢査セシムル能ハスト抗拒シタル爲メ齋藤和三郎

其檢査ヲ爲サ、リシトアリテ被告カ檢査官ノ手ヲ支ヘタルハ暴行ヲ以テ職務執行ヲ抗拒シタリト認メタルニ非スシテ檢査官ノ手ヲ支ヘ巡査ノ來ル迄檢査ハ爲サシメスト抗辨シタリト云フニ過キスシテ上告論者ノ如ク腕力ヲ用ヒ其檢査ヲ爲スチ抗拒シタリト認メタルニ非サレハ原裁判官ハ此ノ所爲ヲ以テ刑法第三百二十七條ノ罪ハ未タ構成セスト判定シタルハ相當ノ裁判ニシテ擬律ノ錯誤アルニ非ラス(官城院ノ言渡シニ對シ平野宗二即上告事件明治二十一年十二月二十六日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第二百二十九條

三號

刑法第三百二十九條ヲ解釋シ單ニ暴行ノミニテ脅迫ノ所爲ナケレハ本條ニ該當セスト云ニ在レトモ本條ハ官吏カ其職務ヲ行フニ當リ暴行又ハ脅迫ヲ以テ之レニ抵抗スル者ヲ責罰スル法章ニシテ必スシモ暴行脅迫ノ二箇アルヲ要セサルナリ今原判文ヲ閱スルニ被告人浦三郎外二名ハ(中略)警部山田強ニ於テ右演說ハ法律ニ觸ル、處アリト看認メ小太郎ニ對シ中止ヲ命シタルヤ否ヤ聽衆一全起立動搖セシ際警察署ニ向ヒ小野長太郎狼狽三郎浮田久三郎ハ煙草ノ吹売入ヲ投付ケ以テ監臨官ノ職務ヲ行フニ對シ暴行ヲ以テ抗拒シタルモノト認定ストアリテ其吹売入ヲ投付ケタルハ即チ暴行ヲ以テ抗拒シタルモノナレハ脅迫ノ所爲ナキヲ以テ本條ニ該當セ

官吏ノ職務妨害ノ罪

第三百三十
九條ノ罪
ハ暴行脅
迫中其一
アルハ成
立ス

スト云フヲ得ス(東京控訴院ノ言渡シニ對シ狼浦三郎上告事件明
治二十一年四月十八日大審院ニ於テ棄却ノ判決)

第四百十條

草案第六十八條第三第三十七條第二項ヲ比照スヘシ

刑ノ加重

第四百十一條

草案第六十九條ヲ比照スヘシ

草第六十八條 前條ノ罪ヲ犯スニ當リ左ニ記載スル情狀アル者ハ各々一等ヲ加

一 其犯人二十人以上タル時

一 其犯人若クハ其中ノ者兇器ヲ持シタル時(顯然又ハ隱然ト持シタル時)(佛刑、第
二百十條ヨリ第二百二十二條第二二十四條マテ)

監視

第百六十八條ノ二 (官吏ニ抗スル犯罪ノ首魁又ハ煽動者ハ輕罪ノ刑ニ處セラレ
且一年已上三年已下ノ監視ニ付セラル可シ)(佛刑、第二百二十一條)

殺傷毆打

第百六十八條ノ三 (若シ官吏ニ抗スル際ニ殺傷又ハ毆打ヲ惹起スルニ於テハ普
通刑法ノ刑前記ノ刑ヨリ更ニ重キ時ハ同等ノ國事犯ノ刑ヲ以テ之ニ代フ但シ第百
四十四條ノ適用アル場合ハ此限ニアラス)(草、第百四十三條○佛刑、第二百十六條)

官吏ニ對
スル不敬

草第百六十九條 官吏其職務ヲ行フニ當リ又ハ其職務上ニ關シ其官吏ニ對シテ其
面前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ公然不敬罵詈侮辱ヲ爲シタル者ハ二月已上二年

已下ノ重禁錮ニ處シ五圓已上五拾圓已下ノ罰金ヲ科ス

若シ官吏ノ面前外ニ刑行ノ文書公衆ニ對スル演説又ハ其他都テ公布ノ方法ヲ以テ
不敬凌辱ノ所爲ヲ犯シタル者ハ一月已上一年已下ノ輕禁錮ニ處シ三圓已上三拾圓
已下ノ罰金ヲ科ス(刑、第百四十一條○佛刑、第二百二十三條ヨリ第二百三十三條ニ
至ル)

官吏ニ對
スル誹謗

草第七十條 公衆ニ對スル演説刑行ノ文書其他都テ公布ノ手段ヲ用ヒテ官吏ノ
職務上ニ於テ不正ノ所爲アリト誹謗シタル者ハ其何人タルヲ問ハス其誹謗ノ事實
ヲ證明スルニ非レハ三月已上三年已下ノ禁錮(輕)ニ處シ拾圓以上五拾圓以下ノ罰
金ヲ科ス
其職務上ニ關セサル事件ニ係ル時ハ一個人民ニ對スル讒毀ノ規則ヲ以テ之ヲ適用
ス可シ

(千八百八十一年七月二十九日ノ佛法第三十一條及ヒ第三十五條)

第百七十一條 第百三十五條ニ記シタル中央官署中ノ一若クハ其長其職員ニ對シ
テ前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各々其刑ノ一等ヲ加フ

第四百十一條

一號

官吏ノ職務妨害ノ罪

官吏侮辱
ハ其面前
ニ限ラス
前後左右
ナルヲ問
ハサルナ
リ

刑法第四百十一條第一項ニ官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ云々トアルハ必スシモ官吏ト相對スル場合ノミヲ指定シタルモノニアラス前後左右其所ヲ問ハス其形容言語官吏ノ耳目ニ觸レ侮辱ノ感覺ヲ直接ニ起サシムル即チ是ナリ本件被告人カ所爲ハ其身聽衆ノ一人ニシテ其持屋外庭ニ在リ殊ニ當該官吏ノ職務ヲ執行スル目前ニ於テ侮辱ノ言語ヲ發シタル者ナレバ假令他ノ聽衆ニ自己ノ思想ヲ語リタルモノニモセヨ其距離幾許モナクシテ其言語直チニ官吏ノ耳底ニ觸レ侮辱ノ感覺ヲ起サシメタルノ事實明白ナレハ上告第一點論旨ノ如ク刑法第四百十一條第一項ニ問擬セサルヲ得サルモノトス然ルラ事實認定上ノ批難ナリトシ上告ノ主旨トスル擬律當否ノ如何ヲ判決セサルハ即チ治罪法第四百三十六條ニ定メタル哀訴ノ原由アル裁判ナリト認定ス(甲府輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ野澤日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四百十一條

二號

巡查ニ於テ其方共ハナセ氏名ヲ答ヘサルヤトノ問ニ應シ僕ハ手前カ姪デモ甥デモ無之下答ヘタル事實ナレハ畢竟其オイノ語ニ應シ甥テモ姪テモナシト答ヒタルマテニシテ其辭答ハ輕忽ニ涉リ稍敬ヲ失シタルモ未タ侮慢凌辱ノ度ニ達セサレハ刑

輕忽ノ辭
ハ未タ以
テ侮辱官
吏トナラ
ス

法第四百十一條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナレハ破毀更正ス(神戸裁判所ノ言渡ニ對シ十九年十月廿九日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四百十一條

三號

原裁判書ヲ閱スルニ郡長ヲ嘲弄セント被告三名共謀シ云々當地ニ赴任以來今日ニ至ル迄其施政ノ跡ヲ察スルニ大ニ然ラサル者アリ故ニ斷然職ヲ辭シ縣會議員ト爲ラレヨ君 如キ人カ縣會議員ト爲レハ我々カ賛成スル後藤伯大同團結ヲ爲スノ今日定メテ幸福ヲ得ルナルヘシトノ言語ヲ發シ云々トアリナト、ハ如何ナル語勢ナルカ止タ此文詞ノミニテハ未タ以テ郡長ノ職務ニ對シ侮辱シタル理由ヲ示シタル者ト云フヘカラス即チ治罪法第四百十條第九項ニ規定シタル事實ノ理由ヲ明示セサル不法ノ裁判ナリ(福島輕罪裁判所ノ言渡ニ對シ志賀政賢上告事件明治二十一年十月二十三日大審院ニ於テ破毀ノ判決)

第四百十一條

三號

無形人ニ對スル侮辱ヲ認メナカラ刑法第四百十一條ヲ適用シタルハ不法ナリト云フモ内閣各大臣トアルハ有形的ニシテ無形的ニ非ストス故ニ之レニ刑法第四百十一條ヲ適用シタルハ擬律其當ヲ得タルモノトス(東京控訴院ノ言渡ニ對シ渡邊小太郎上告事件明治二十一年三月九日大審院ニ於テ棄

官吏ノ職務妨害ノ罪

嘲弄ハ直
チニ探テ
侮辱ナリ
トスルチ
得ス

官吏侮辱
ノ適用

判決

第四百四十一條

四號

侮辱ニ涉ル書翰ヲ投寄シタルモハ刑法第四百四十一條第一項ニ適セサルハ勿論第二項ノ所謂刊行ノ文書ニモ適セサルモノナリトス依テ原裁判ノ擬律ヲ破リ直ニ無罪ヲ言渡ス(秋田裁判所ノ川傳之助上告事件明治十九年四月廿九日大法院ニ於テ無罪ノ判決)

第四百四十一條第二項

五號

刑法第四百四十二條第二項ヲ按スルニ其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖書云々トアリテ既ニ刊行ノ文書ヲ以テ公ケニ官吏ヲ侮辱シタルモノハ該法條ノ制裁ヲ免レザルヤ言フ俟タス今原判文ヲ見ルニ明カニ被告カ官吏職務上ノ所爲ニ付侮辱シタルト并ニ無届ニテ自書八拾枚ヲ印刷セシメ而カモ全盟ニ非ラサルモノニ交付シタル事實ヲ認メ之ニ該當スル右法條及ヒ新舊出版條例ノ正條ヲ適施シアリテ更ニ擬律ヲ錯誤シタル不法ノ處分アルコトナシ或ヒハ又一片ノ刊行文書ニモセヨ之レヲ全盟外ノ者ニ交付シタランニハ即チ公ケニ爲セシモノナルト爭フ可ラサル事實ナ

刊行ノ文書ニテ官吏ヲ侮辱シタル適用

レハ少許ノ故ヲ以テ其罪ヲ組成セスト云フノ理ナキヤ必セリ(静岡縣裁判所ノ言渡シ事件明治二十一年五月三十日大法院ニ於テ棄却ノ判決)

第四百四十一條

六號

原判文ヲ審査スルニ前被告ハ其目前ニ於テ該辨明ヲ以テ馬鹿氣切タル口上ナリ云々又實ニ腰ノ抜タル説明ナリ云々以來辨明ハ屹度注意シ個様ナ馬鹿ケタ説明ハ止メテ賞ヒ度杯ト發言シトアリテ議案ヲ攻撃スル議論ニ非スノ縣知事代理木村常藏ノ議案ヲ辨明スルニ當リ其目前ニ於テ彼レヲ侮辱シタル事實理由明確ナレハ原裁判所カ之レニ對シ刑法第四百四十一條ヲ適施シタルハ相當ニシテ擬律ヲ誤リタル判ニ非ラス(松江縣裁判所ノ言渡シ井上松之助上告事件明治二十一年三月二十四日大法院ニ於テ棄却ノ判決)

第四百四十一條

七號

刑法第四百四十一條ハ故ラ官吏ノ職務ニ對シ其目前及ヒ目前ト看破シ得ベキ場所等ニ於テ形容若クハ言論ヲ以テ侮辱シタル犯罪ヲ制裁スルノ律意ニシテ公廷内ニ於テ被告カ辨論ノ意思ニ過キザルモノハ直チニ該法章ノ犯罪ヲ構成スルヲ得ス然リ而シテ今原裁判言渡ノ事實ヲ閱スルニ被告ハ公廷内ニ於テ檢察官ニ對シ答論中

官吏ノ職務妨害ノ罪

官吏侮辱ノ適用

辯護ノ爲メ言語ノ過激ニ涉リタルハ官吏侮辱トナラス